

いしかり 曆

石狩市郷土研究会創立六十周年記念号

第一部 六十周年記念編

石狩市郷土研究会創立六十周年記念講演

近代北海道と石狩 -明治期を中心に-……………関 秀志… 1
(北海道史研究協議会副会長)

郷土研究会六十周年に思うこと

石狩市の後世の為に……………顧問 田中 實…19
郷土研究会六十周年……………顧問 高木 憲了…20
石狩市郷土研究会と私……………会長 村山 耀一…21
六十周年、そして二十五年……………三島 照子…22
石狩市郷土研究会と私……………石黒 隆一…23
石狩市郷土研究会六十周年に思う……………釣本 峰雄…24
石狩市郷土研究会創立六十周年に思う……………安田 秀司…25
昔の石狩に思いを馳せて……………若林真紀子…26
古文書サークルの歩み……………安井 澄子…27
石狩市郷土研究会と私……………土井 勝典…28
会六十年に寄せて……………寺尾 陽助…29
石狩市郷土研究会に育てられて……………高瀬 たみ…30
想いでを辿れば……………今井 光男…32
お世話になって二十年、思いつくままに……………小寺 幸一…33
石狩市郷土研究会創立六十周年に思う……………山内 幸子…34
広報・報道にみる郷土研究会の歩み……………36

第二部 研究編

延喜式の鮭……………田岡 克介…43
石狩川沿いのアイヌ地名(7)
ハッサム・モリ・シリサム……………井口 利夫…46
北海道に移住または足跡を残した米沢地方の人々……………千喜良 誠…57
石狩市高岡五ノ沢神社について……………工藤義衛・坂本恵衣…72
60年にわたる郷土研の宝を電子化し、公開共有へ……………石黒 隆一…77
資料紹介「石狩町ニチボー女子工員募集経過」……………三島 照子…82
「古文書」と私の愉しみ方……………安井 澄子…84
村山家文書「イシカリ年々勘定帳」分析表……………安井 澄子…88

第 34 号

2021. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会

石狩市郷土研究会創立60周年記念講演

「近代北海道と石狩―明治期を中心に―」

関 秀志

はじめに

伝統のある石狩市郷土研究会の創立60周年という記念すべき時に、講演の機会を与えていただき、お礼を申し上げます。今年の春、講演のお話をいただいたときに、北海道史研究協議会がこちらの研究会に大変お世話になってまいりましたので、お引き受けしなければいけないとは思ったのですが、いったいどのような話をすれば、地元の研究会の皆様にも多少でもお役に立てていただけるかなと考えました。石狩のことは、地元の皆様が良く知っておられるので、違った視点から見た石狩の歴史についてお話させていただくことにしました。私は北海道の近・現代史を開拓を中心に、地方史・地域史というか郷土史に近い視点で、60数年間研究してきましたので、そのような立場から、よそ者から見た石狩の歴史、特に明治期の特色は一体どういうことなのか、というようなことを、雑駁な話になるかもしれませんが、お話をさせていただきます。

さて、地域の歴史を研究する際には、二つの側面からのアプローチが大事だと思います。一つは、地元の個々の具体的史実を丹念に調べることです。それからもう一つは、地元の歴史事象が、北海道や日本の近代史と、どうかかわりを持っているかを調べることです。二つの視点から全体的・総合的に見ていくと、地域の特性と普遍性が良く見えてまいります。昔、戦前の郷土史を見ますと、お国自慢に終わってしまっている歴史が少なくありません。優れた郷土史ももちろんありますが、独善的な視野の狭い歴史、郷土史に陥らないためには、ミクロとマクロの両視点から地元の歴史を見ることが大切だと思います。それです、北海道の近代、特に明治期の特色について、簡単にお

話しすることから始めたいと思います。北海道史の視点から石狩の歴史を見ると、石狩の特性と、全道、全国と共通する両方の側面が見えてくると思います。

I 北海道近代史の特質

1. 近世から近代へ

ご承知のように、江戸時代の道南地方は和入地で、それ以外の大部分の地域は、蝦夷地（先住民アイヌの居住地）と呼ばれていました。道南の和入地には、松前藩を通して幕府の権力が及んでいますが、蝦夷地には、国家権力が直接は及ばず、場所請負人と呼ばれる、藩、あるいは幕府が蝦夷地を直轄した時代には幕府から、場所の経営を請け負った特権商人を通して間接的な力がおよんでいました。江戸時代の北海道は、このように、地理的・民族的に二分化された地域でした。それが明治2年（1869）に、蝦夷地を北海道と改称し、国と郡が置かれて、全道が国家の領域に完全に組み込まれました。

このように、明治初期に、近世のシステムが近代のシステムに転換するわけですが、どのようなプロセスで、どのような問題を起こしながら変わっていったのかということが、まず、明治初期の北海道史を見る場合の大きな関心事のひとつであります。

2. 開拓の時代

さて、明治時代の北海道は、どういう時代かと言でいうと、開拓の時代だといえます。開拓には光の当たる部分と影の部分とが当然あるわけです。最近はこちらかというところ、影の部分について、いろいろ議論されたり、反省されたりするようになってきましたが、その評価は別として、開拓の最盛期でした。

例えば人口の増加を見ますと、明治5年（1872）には、北海道の人口はアイヌの人たちも含めてわずかに11万人です。ところが、

明治末期には170万人に達し、太平洋戦争が終わった昭和20年(1945)には、350万人を超えました。全国でこれだけ急激に人口が増えた府県はありません。

耕地面積、田畑の面積は、明治5年にはわずか3,000町歩です。1町歩は約1ヘクタールですから、約3,000ヘクタールです。それが、明治末期には約60万町歩、敗戦の昭和20年には80万町歩になっています。その結果、明治初期には、北海道は寒冷で農業(特に米作)に不向きな土地だといわれていたのですが、日本有数の農業地帯に発展しました。

しかし、その一方で、明治政府の開拓政策・同化政策により、アイヌ民族の伝統的社会・文化が破壊されたことは、皆さんご承知のとおりです。

それから、住民、道民の性格が府県とかなり違います。その最大の違いは、先住民アイヌが暮らしていることが一つ。もう一つは、本州の府県各地から多様な職業、身分の人が寄り集まって移民社会が成立したことです。

3. 「内国植民地」としての役割

それから、日本の近代史の面からいいますと、明治初期は、世界史の上では、資本主義の発展期で、欧米の諸国が海外に植民地を求めて、競争していた時期であります。日本は出遅れましたから、もちろん海外に植民地を求めることはできない。その結果、国内で植民地に相当する地域として期待されたのが北海道でした。研究者は「内国植民地」と呼びます。明治初期に、日本の領土に編入されたのは、北は北海道、南は琉球(沖縄)ですが、琉球は開発の対象になる地域ではありませんでした。

4. 北方圏、特にロシアとの関係

対外的なことからいいますと、日本の中で外交的に北方地域との関係が最も深いのが北海道です。特にロシアとの関係が深く、明治初期の大きな領土問題は、南方では、琉球と小笠原であり、北は千島と樺太でした。日露間のサハリンやクリル諸島をめぐる領土問題や北方の緊張は、北海道の近代史に、大きな影響を与えました。例えば、明治8年(1875)に樺太・千島交換条約が締結された結果、樺太アイヌの強制移住が行われ、明治時代の北海道開拓で重要な役割を果たした屯田兵制度も、こうした時代背景のもとでスタートしました。さらに、第七師団が札幌に置かれたことも、後に旭川に移りましたが、そういう背景と関係が深いわけです。

5. 欧米技術文化導入のモデル地区

次に、産業技術や文化の面からいうと、明治の初めは、国策として、富国強兵・殖産興業政策に力を入れた時期ですが、そのモデル地区とどうか試験場的役割を果たしたのが北海道です。明治5年(1872)から14年までの10年間に、国の予算のおよそ1年分の資本を、北海道開拓に投入しました。明治以降の北海道の特色の一つとして、国策による開拓、拓殖が挙げられますが、国家予算の割合で言うと、明治初期の10年間で、国が最も北海道に予算を投入した時期です。

広大で、本州とは気候風土の違う北海道を日本在来の技術で開発することは無理だということで、欧米の技術や文化を導入しました。本州はヨーロッパからの技術が中心ですが、北海道の場合は開拓使が主にアメリカから多くの技術者、専門家を招いて、農業、鉱工業、道路・鉄道・港湾建設、教育、生活文化など多方面にわたり開拓に力を注ぎました。この試みは、その後も、北海道に大きな影響を及ぼしています。

6. 主要産業の発達

次に、明治期の北海道の産業の動向を見ますと、明治30年(1897)代までは、漁業が北海道の産業をリードしていました。年によって異なりますが、漁業生産の7、8割以上は鯨が占め、漁獲された鯨の9割以上は鯨メ鮫に加工されていました。先ほど北前船の話が出てまいりましたが、このメ鮫は、北海道の代表的な産物として、北前船で本州に移出されていました。現在の石狩市内では厚田と浜益が鯨の産地でした。一方、鯨に比べると生産額、生産量は少ないですが、北海道の代表的な水産物として全国的に知られていたのが鮭で、その主産地が石狩でした。

農業については先ほども触れましたが、明治になって国が力を入れた結果、30年以上たって、ようやく主要産業に躍り出ます。

さらに、大正期の第一次世界大戦中の好景気の時代に、鉱工業の生産が伸び、農業生産を上回るようになります。しかし、農業と漁業は、大正以降も依然として北海道の基幹産業です。

7. 道民の特性と文化

このほか、道民の特性、文化の特質については、北海道の住民が先住民アイヌと本州から移住した和人であることから、アイヌ文化と日本各地の民俗・伝統文化が混在していること、先ほど述べましたように、国策を背景として導入された欧米文化の影響がみられること、北海道の厳しい自然環境、特に雪と寒さに適応した文化が形成されつつあったこと、などを挙げるができます。

II 石狩地方近代史(石狩・厚田・浜益郡)の諸相―明治期を中心に

次に、これまでお話しした北海道の動きを念頭に置きながら、石狩の歴史を見ていきたいと思います。これから話すのは、石狩のことは

あまり詳しくない北海道史の一研究者が、石狩の歴史的な土地柄を知ろうとして試みた方法で、私の試論、骨組みに過ぎないことをお断りしておきたいと思えます。

1. 地域史の特色を生み出す地理的背景

石狩の歴史を考える場合にまず重要なのは、その地理的な環境、条件であります。

一つは日本海です。海との関係からいうと、産業では鯨を中心とする漁業があり、当時は交通運輸の動脈だった海運があります。そこで活躍した北前船の話は前にも出ましたが、明治30年頃までは、本州と北海道をつなぐ主要な手段でした。

もう一つは、北海道最大の石狩川です。漁業では有名な鮭漁があり、明治・大正期には石狩川航路の水運が盛んでした。そして、海運と河川交通の要地だった河口の石狩に市街地が発達しました。

それから原野です。これは開拓が進展し、農村が形成された地区であります。

次に、地質・地下資源はこの地域にどんな影響を与えたでしょうか。地下資源でいいますと、油田の開発が行われました。日本の鉱業では、北海道は全国有数の産炭地でしたが、石油はあまり注目されません。しかし、北海道の中では石狩の石油は、主要な位置を占めます。

近隣の都市の存在も地域史に大きな影響をもたらします。一つは札幌であり、一つは小樽です。ご承知のとおり、石狩は江戸時代から明治初期にかけては、この地方全体の中心地でありました。しかし、札幌に北海道開拓政策の拠点として、札幌本府が建設され、その後、開拓使、札幌県、北海道庁の行政都市として発展します。また、小樽は、幌内鉄道が建設されてその起点となり、さらに大規模な港湾整備が行われた結果、鉄道・港湾・商業都市として発展しました。その結果、石狩のこの地方(道央)における役割が低下しました。

そして、もう一つ、気象条件も地域の歴史を見る場合に、重要な影響を与えますが、説明は省略いたします。

2. 地域史の特性を考えるための指標

はじめに、「石狩」という地名の地理的範囲・区域についてひとこと触れておきます。単に石狩という場合には、現在の石狩市域全体、即ち旧石狩町及び厚田村（厚田郡）・浜益村（浜益郡）両村を指すことにします。問題は「石狩」には「石狩市街」、「石狩町」（明治40年花川村と合併）、「石狩郡」があり、郡には石狩町のほかに、現市域以外の篠津村（後に新篠津村になります）と当別村が含まれることです。篠津（新篠津）村と当別村は同じ石狩郡内でも純農村で、石狩町と土地柄が違います。そのことに気を付けながら話を進めたいと思います。

(1) 戸口の増加

さて、地域の歴史を考えていく場合に、地域の動きを知るうえで目安になるものは何だろうかと考えると、歴史の主体はその地域に住む人たちですので、住民の動向を知ることが重要であり、最初の手掛かりになるのが人口の変動です。

まず、明治時代の石狩郡の人口変動を見ていきます。あまり変わらなければ、地域社会に大きな変化はなかったといえますし、大きく動いていれば、激動の時代であり、その背景に何があったかという形で次の研究に進むわけでありです。

まず、「表1-1」の「戸口の増加」をご覧ください。石狩・厚田・浜益3郡の合計を見ますと、時間の関係で詳細な数字は表を見ていただくことにしますが、明治13年（1880）から大正6年（1917）までのわずか37年間で、1,248戸・4,318人から6,155戸・41,523人へ、戸数が約5倍、人口は驚くなけれ約10倍になっています。

もう一つは、現在の市域、旧石狩町と厚田・浜益2郡に限定しますと、

同年間に、1,076戸・3,584人から3,627戸・24,967人へ、戸数では3.4倍、人口では7倍になります。なぜ、石狩市域と3郡全体でこういう違いがあるかというと、先ほども述べたように、石狩郡には当別と篠津・新篠津が含まれるからです。

戸数の増加傾向を石狩町に限定しますと、明治30年代が明治期のピークになります。厚田と浜益はちよつとずれて明治40年代になります。人口の面では石狩と浜益は大正期まで増加を続け、明治時代にはまだピークに達していませんが、厚田は明治の末頃にピークを迎えます。

なぜこのような戸口の激増が起こったのか。これが研究を先に進める手掛かりになります。

(2) 来住（移住）者の増加

次は、人口の激増の最大の原因は何かということになります。先ほど、この時代の北海道は開拓の時代で人口が増えたといいましたが、この地域もやはり戸口の激増期で、明治20年（1887）代後半からその傾向が顕著になります。その原因を探るために、明治20年代の10年間に限定してこの地域の移住者の数をまとめたのが「表1-2」です。

3郡の移住者総数は、1,751戸・6,510人で、この10年間の増加戸口3,417戸・13,738人と比べますと、戸数では51%、人口では47%を占めています。そうすると、増加の最大の原因は、移住者・移民の激増にあったことがわかります。明治期は、この地域でも移住の時代だったということになります。

さて、もう少し詳しく知るために、移住者の職業を見ます。いうまでもなく、この地域は農業と漁業が2大産業ですので、3郡移住者総数に占める農・漁業戸数の割合を見てもみますと、農家が60%、漁家が14%です。農家には当別村と篠津村も含まれますから、現在の石狩市域に限定すれば、漁家の比率はこれより著しく高くなります。特に、浜益村の漁業移民が多いのが目立ちます。

(3) アイヌ戸口の動向

先住民アイヌの人口の動きを示したのが、「表-3」です。この表にはありませんが、アイヌの人口は、江戸時代後半、特に幕末期に著しく減っております。3郡の合計は明治5年(1872)には54戸・241人、大正6年(1917)に71戸・249人で、多少増加していますが、ほとんど変化がありません。地区別に見ますと、浜益村が圧倒的に多いのが地域的な特徴です。

(4) 農家の増加

次に、戸口の増加を農家について見ますと、「表-4」のとおりです。明治16・20・31・40年をピックアップしましたが、農地開拓の進展という時代背景を反映して、明治16年(1883)から40年までのわずか24年間に、326戸に過ぎなかった3郡農家総数は約12倍の3,808戸に増えていきます。明治40年の地区別内訳を見ますと、当然、当別村と新篠津村を含む石狩郡が最も多く75%、厚田と浜益は漁業主体の村ですので、それぞれ14%と11%と少ないのが大きな特徴です。農地開拓の進展については、後で「表-7」の耕地面積を見ます。

(5) 漁家の増加

次に漁家の戸数は「表-5」のとおりですが、漁業の種類別に見ますと、石狩郡は鮭漁の漁家がほとんどで、厚田・浜益郡は鯨漁業の漁家が大部分を占めています。すなわち、鮭漁の石狩、鯨漁の厚田・浜益という地域の特徴が明確です。3郡の総数は、明治20年(1887)の523戸から40年の1,843戸(内専業1,373戸)へと3.5倍に増えていきます。明治40年に限定して、郡ごとに戸数を見ますと、浜益が1,020戸で全体の55%と圧倒的に多く、厚田は757戸・41%、石狩は鮭漁では有名ですが、漁家数では66戸で4%に過ぎません。

さらに、漁家の魚種別、漁網別の戸数を見てみますと、石狩はすべて鮭と鱒の建網(定置網)と曳網の漁業者です。厚田と浜益は鯨の建

網と刺網の漁業者で、刺網の漁家は昆布漁や、地区によってはナマコ漁などの磯廻りの漁業を行っています。鮭漁では曳網漁業者が74%を占め、厚田・浜益の鯨漁では、刺網漁業者が80%を占めています。ここで注目しておきたいのは、鯨漁という一般に、規模の大きな建網、当時の建網は角網ですが、大規模な番屋を拠点とした親方の経営する建網漁業が注目され、それは重要ではありませんが、漁家の数からいうと圧倒的に多かったのは零細な刺網漁家だということです。

漁家を農家と比較してみますと、後で触れる通り、明治30年前後までは鯨漁業が著しく発達した時期で、農地開拓が本格化するのはその後ですので、漁家戸数の方が当然多いわけです。漁業は江戸時代から盛んで、特に幕末から急激に伸びていきました。ところが明治の後半から、漁家よりも農家の移住が増えまして、明治40年頃になりますと、農家の戸数は漁家の戸数の2倍くらいに増えていきます。

これまで、戸口の面から、現在の石狩地域の明治時代の特徴を見てまいりました。まとめますと、明治は人口の激増期であり、その主要な要因は移民であること、産業は石狩町が鮭漁中心であり、厚田・浜益は鯨漁が主体だったということです。以上で、時代のおおよその輪郭がつかめてきました。後でもう少し詳しく見ることにします。

3. 近世から近代への移行・転換(幕末・明治前期)

(1) 幕末…場所請負制の変質・崩壊

① 幕府(箱館奉行)の石狩改革

続いて、この地方が、江戸時代から明治時代、近代へどのように変わっていったかということを具体的に見てみたいと思います。

まず、近代、明治時代を知るためには、幕末、江戸時代の終わりがら見ていかななくてはなりません。安政2年(1855)に、幕府は松前藩から松前・江差地方を除く蝦夷地、松前地を取り上げて、直轄地とし、この石狩地方でも経営の改革を行いました。この石狩改革につ

いては、北海道史研究者の君尹彦先生きみのぶひこがこの郷土研究会で、2度にわたり、「石狩の近代化はどのように進められたか」という題で詳しく話され、その内容は『いしかり暦』の第12・13号に掲載されていますので、ご覧いただきたいと思ひます。

かいつまんで言いますと、幕府は蝦夷地経営のために、箱館奉行を置きます。明治初期の開拓使に相当する出先機関です。そして、石狩に勤番所を設け、それまで続いてきた場所請負制を廃止して直営方式に変えていきます。また、札幌周辺に御手作場と呼ばれる直営の開墾場を設け、保護移民を入植させて農地開拓を進めます。これが、明治初期、開拓使の移民政策の先駆的な形態です。

次に、幕末期の重要な社会の変化は、厚田・浜益も含めこの地方への出稼ぎの漁民が急激に増え始めることです。石狩では市街地の原形が形成されつつありました。一方で、先ほど言いましたように、アイヌの人口が減少していました。

② 庄内藩のハママシケ経営

北の浜益を見ますと、幕府の命令で、庄内藩が浜益（ハママシケ）を拠点にして天塩地方の警備と開拓を進めます。それまでと違って、本州の藩が、直接蝦夷地の開拓を試みる。慣れない北の蝦夷地で、一体どのように開拓を試み、何が成功して何が失敗したのか、それが明治以降の開拓使の政策や開拓にどんな影響を与えるのか、私の関心事ですが、そのことについては、平成24・25年に市民図書館の講座で、お話ししたので、省略いたします。

③ 厚田場所の動向

厚田は場所請負制が幕末にも続いていました。

④ 山道の開削

幕末には蝦夷地の各地で道路の開削が行われましたが、この地方では、浜益から雄冬を越えて増毛に通ずる雄冬山道・増毛山道（両方の呼び名があります）と、厚田の濃昼山道の開削が行われています。北

海道道路史上、重要な事業でした。

(2) 開拓使・札幌県・道庁時代の地方制度

① 郡と町村の成立

これから、いよいよ明治に入ります。

幕末の蝦夷地を見ますと、各地に場所請負人の場所経営の拠点となった運上屋があり、運上屋の漁場には番屋が置かれ、それらの近くには弁天社や稲荷社などの神社などがあり、早いところではお寺もでき始めます。アイヌの集落（コタン）も大きなものは運上屋の近くにありました。また、道南の和内地や東北の津軽・南部方面からの出稼ぎ漁民の小さな集落が海岸にポツンポツンと点在するようになります。

ところが、明治2年（1868）に蝦夷地が北海道となり、開拓使が置かれて明治政府の支配が及ぶと、この地方は石狩国の石狩郡、厚田郡、浜益郡となり、その後、その下に行政的な村や町ができ、集落や市街地が発達します。

開拓使は置かれましたが、明治2年から4年までは、開拓使が全道一円を支配したかというところ、そうではありません。新政府の財政力は弱く、開拓使の力だけではこの広い北海道を経営することは困難でした。それで、省や本州の諸藩、有力なお寺や戊辰戦争で負けた東北地方の士族たちに、全道各地を分割して、支配をさせました。

この地方はどうかといえますと、石狩郡は、2年に兵部省の管轄になり、3年に兵部省から開拓使に移管されました。石狩に出張所が置かれ、石狩がこの地域全体の中心地でした。厚田郡は開拓使の直轄地、浜益郡は東京の増上寺の管轄地でした。

明治4年に函館から札幌に開拓使の本庁が移り、ようやく開拓使が全道を統括するようになります。さらに、明治12年には、道内各地に郡役所が置かれることになり、明治15年に開拓使から札幌県、道南は函館県、道東は根室県となり、それも19年の初めに終わって、北海道

庁が設置されます。これが戦後の「地方自治法」による北海道（今でも一般的に道庁といいますが）まで続きます。ついでに言いますと、今の北海道と戦前の北海道庁の最大の違いは、戦前の北海道庁は、二つの性格を持っていました。一つは国の開発行政を担当する出先機関、もう一つは本州の県に相当する地方自治体です。

次に、この地域に初期に成立した行政的な村を見てみます。最初に村ができるのは明治4年です。石狩郡は早くから開けていましたので、村ができるのですが、道内のほとんどの地域、奥のほうは、まだ人口がほとんどありませんから、村の成立はまだ限られた地域だけでした。石狩国では明治7年に大小区画制度が実施されましたが、全道的にこの制度が行われたのは、明治9年です。

さて、その明治9年の石狩・厚田・浜益3郡の大・小区と町村は次のとおりですが、当時の地名については、こちらの研究会の顧問の田中實氏が、『いしかり暦』第4号に「石狩町の大字、字（町）について」と題して書いておられますので、参考にしてください。

石狩・厚田・濱益3郡は第二大区に属し、石狩郡の本町・辨天町・新町・濱町・横町・仲町・船場町・親船町・花畔村が一小區、若生町・八幡町・生振村が二小區、内陸の當別村が三小區です。この後、14年に篠津村、15年に樽川村ができます。

当時、「町」を、チョウと呼んだかマチと呼んだかは、厳密にいうとわかりません。北海道の自治体名の多くは、後にはチョウと呼んでいます。振りカナは開拓使が編集した『北海道志巻一』のままです。厚田郡の聚富・望來・嶺泊・古丹・押琴・小谷・別狩・厚田・安瀬・濃晝はいずれも村で、四小區です。濱益郡は川下・清水・實田・柏木・尻苗の各村が五小區、茂生・群別・雄冬の各村が六小區です。明治15年に、清水と柏木が合併して柏木村になり、郡別と雄冬が合併して郡別村になります。

さらに、明治12年にはこの大小区画制が郡区町村制に変わり、先ほ

ど述べた郡役所と戸長役場が置かれることになります。

② 二級町村制と町村の確立

そして、明治35年頃にはほ町村が確立します。北海道にも明治33年に一級町村制、35年に二級町村制が施行されて、35年に二級町村の石狩町が成立しました。当時、町の数は限られていて、ほとんどは村です。石狩が町となったのは、石狩が当時、人口が増加し、財政力もあつて、栄えていたという証拠にもなります。

明治35年の二級町村制の下では、石狩郡には石狩町のほかに花川村と當別村、新篠津村があり、石狩町の中に、本町・辨天町・新町・濱町・横町・仲町・船場町・親船町・若生町・八幡町・生振村の大字が置かれ、花川村には花畔村と樽川村の大字があります。このように、明治初期の町村の名は、大字という形で残っています。それまでの花畔と樽川も大字という形で残されました。それから、新篠津村は明治29年に篠津村から分かれています。

次に、厚田郡を見ますと、厚田村と望來村の2村があり、厚田村の中に大字として厚田・古潭・押琴・小谷・別狩・安瀬・濃晝の7村、望來村の大字は、望來・聚富・嶺泊の3村という状況でした。

そして浜益郡には、濱益村と黄金村の二つの村があり、後に両村は合併するわけですが、浜益村には、茂生・群別・雄冬3村の大字、黄金村には、川下・尻苗・柏木・實田4村の大字があります。

ほぼこのような過程で、江戸時代の運上屋、アイヌ・コタン、出稼ぎ漁民の小屋などがあつた地域に、明治になって行政区域としての町や村が成立した訳であります。

(3) 開拓使・札幌県時代の開拓政策と石狩

① 保護移民と開拓

次に、開拓使・札幌県時代の開拓政策とこの地方の歴史とのかかわりについて触れておきたいと思えます。

ひとつは移民と開拓です。開拓使は、急いで北海道を開拓するため

には、本州から開拓者を移す必要がありました。ところが、国、開拓使が呼びかけても、明治の初めは、本州の社会は、まだ、江戸時代とあまり変わっていないわけです。それまで農民は土地に縛られ、自給自足を基本とした経済でした。明治政府が行った身分制度、農地制度、税制、金融・財政などの改革により、本州の農村が大きく変わり、多数の開拓者が北海道に渡るようになるのは明治20年（1887）代からです。それでも無理に北海道に移そうとすれば、旅費、小屋掛け料、開墾料を出したり、食料や農具、家具などを支給したりしなければ、明治の初期は、本州から移民が来ない時代でした。

そのようなわけで、開拓使の保護を受けた人たち、保護移民や屯田兵がこの地方にも来たわけです。また、一般の開拓移民とは直接関係はないのですが、樺太アイヌの人たちを強制的に札幌郡の対雁に移しています。

まず、開拓使の保護移民をあげますと、石狩郡で代表的なのは、明治4年（1871）に岩手から花畔に、宮城県から生振に入った団体です。それから、全道的に有名なのは、仙台藩士の開拓団です。仙台藩は明治維新の時に幕府側に付き、戊辰戦争で敗れて処分を受けたため、藩士たちが土地をなくし、職を失って、一部の人たちが、領主と一緒に北海道に新しい土地を求めて移住してくるわけです。その一つが仙台藩岩出山の領主伊達邦直に率いられた旧家臣たちです。藩内各地を治めた領主は、住民たちにとっては殿様ですが、幕府や政府から見れば、仙台の伊達家が藩主で、各地の領主はその家臣になります。明治政府の身分制度の改革で、家臣の家臣は士族の身分でなくなり、移住先の北海道でも大問題になるのですが、説明は省きます。さて、伊達邦直主従は、明治4年、厚田郡の聚富に入るのでありますが、そこは農地には向いてないということで、翌年、石狩郡当別に再移住しました。札幌県時代になると、石狩郡には佐賀や福岡の団体が当別村に、山口の団体が樽川に移住し、厚田郡の望来や発足にも山口団体が入植しま

した。

② 篠津屯田兵村（石狩郡篠津村）

次に、屯田兵では、明治14年（1881）に現在の石狩市域ではありませんが、石狩郡の篠津に屯田兵村が置かれます。明治8年、札幌の琴似村に最初の屯田兵が移住し、明治32年までに、道内各地に37兵村が設けられ、明治37年に屯田兵制度が廃止されました。これらの兵村の中で、篠津兵村には他とは少し違う特色がみられます。一つは、開拓使は寒地に適した住宅を作ろうと各地で洋風建築の導入を試みましたが、篠津ではロシア式の丸太組兵屋を建てました。もう一つは、開拓使の養蚕奨励策として、篠津兵村に養蚕室を設置しています。

③ 開拓使の石狩鮭罐詰製造所

開拓使は、新しい産業振興政策の一環として、外国、特にアメリカから多くの技術者を雇って官営工場を設置しましたが、石狩では鮭・鱒の罐詰工場を経営しました。道庁時代初期に民間に払い下げられましたが、野付郡別海村（現別海町）の別海罐詰所と共に当時の代表的な鮭鱒罐詰製造所でした。

④ 樺太アイヌの移住と漁場経営

先ほども触れたように、明治8年（1875）、開拓使は樺太アイヌを宗谷に移住させました。アイヌの人たちは宗谷に住みたいと言っていたのですが、翌年、強制的に対雁に移しました。ところが、対雁での生活に慣れず、皆さんご承知の通り、こちら、八幡町来札に鮭の漁場、厚田村に鱈の漁場を与えて何とか生活を安定させようとするのですが、コレラや天然痘の流行により多数の犠牲者が出ました。明治18年に来札に転住しましたが、日露戦争後、南樺太が日本の領土になるとアイヌの人たちは故郷に引きあげ、ごく一部の人が残らなかったのです。

4. 北海道庁の政策と石狩

(1) 殖民地 (原野) 撰定と区画測設

次に、北海道庁の政策とこの地方との関係について述べたいと思います。道庁時代になると、府県からの移民によって人口が急激に増えたことは、既にふれましたが、その前提として、大量に北海道に移民を入れるために、北海道にどのような原野、開拓適地があるかを事前に詳しく調査し、測量、区画して地図を作り、大量に国有未開地を処分するための基礎的事業に力を入れます。最初の10年くらいはその事業に集中します。

この地方で最初に行われたのは、明治20年(1887)の石狩郡上^{トウベツ} 当別・下^{トウベツ} 当別・生^{マヤブ} 振原野の調査(殖民地撰定)です。道庁が殖民地撰定事業に着手したのは明治19年ですので、20年という、全道的にも早いですね。

この地方の殖民地区画測設事業は、明治25年の石狩原野が最初で、26年には生振・花畔・當別・篠津原野で実施され、この後は、石狩郡でも上流の当別村域になります。

厚田郡では、ハツタリ・望来殖民地の区画が明治41年です。

(2) 主な団体(団結)移民

道庁の移民政策とし注目されるのが、団体(団結・集団)移民の奨励です。個々バラバラに、単独で未開地に入り開拓するのは大変なので、総代人を中心に団体を組織して北海移住する場合には、いろいろな特典を与えました。まず、規約を作り、事業計画を立てます。例えば3年計画とか5年計画で、初年度には何戸、次年度には何戸、3年度には何戸、合計何戸入れる計画書を道庁に出し、それが許可されると、総戸数分をまとめて未開原野の区画地の一カ所に貸下地を設定します。これが「貸付地予定存置」制度です。そして、団体に入植したところに、技術の指導とか、いろいろな便宜を与えるわけです。こうして、明治の後半から団体移住が増えていきます。

この地方の代表的な団体は、石狩郡では、明治27年(1894)から翌年にかけて生振に入った愛知団体、27年から29年にかけて石川県から花畔に入った石川団体があります。厚田郡では、明治27年と翌年に望来村に移った石川団体、28年聚富村に移った兵庫団体、同年望来村高岡に入った山口団体などがあります。

各地に入植したこの団体移民は、移民の総数の中からいうと、戸数ではそれほど多くはありませんが、北海道の各市町村の歴史上、とても重要な役割を果たしています。なぜかという、一地方からまとまって入りますので、結束力が強く、単独移民の開拓地と比較して成功、定着率が高く、本州、出身地の風俗習慣をよくその地域に残しているからです。

(3) 市街地の発達

開拓の進展とともに、石狩市街地も急激に発達し、極めて重要な役割を果たすことになりましたが、このことについては、平成26年に石狩市民図書館の講座でお話しました。時間の関係もありますので省略します。厚田村には望来・厚田・古潭に、浜益村には茂生にも市街が成立しました。

5. 産業・交通運輸の発達

(1) 漁業―石狩の鮭と厚田・浜益の鯨―

産業については、時間の関係で、漁業と農業に絞ってお話したいと思います。

まず、(表1-6)の1をご覧ください。これは石狩、厚田、浜益3郡の、鯨の漁獲高・生産高、量と価格の両方をまとめたものです。調査時間が足りず空欄があり、統計の写し違いもあるかもしれませんが、それぞれ、出典を挙げておきましたので、参考にしてください。

① 鯨の漁獲高と鯨搾(締・メ)粕の生産高

戸口の面では、既に石狩の鮭漁と厚田・浜益の鯨漁という地域の特

色はつきりしていましたが、ここでは、最も重要な漁獲高から見えます。

初めに、漁獲高の単位の「石」について触れておきます。石の重量は生鯨と粕とは違います。なぜかという、鯨は粕(魚肥)に加工すると、5分の1くらいに減りますので、粕の5倍にすると生鯨の実際の重さになります。昔は、統計上は生鯨の生産量は貫を用いず、すべて石で表しました。開拓使も札幌県もそうで、道庁や漁業組合の古い記録もそうです。後になると貫に変わり、さらに、メートル法のkg・t(トン)になります。それで、1石は、お米と同じで150kgですので、締(メ)粕だと1石150kgですが、生鯨に換算すると、その5倍の750kgになります。0.75トンが1石です。

さて、北海道の鯨の漁場はご承知のように道南から次第に北上し、明治30年(1897)頃になると、この地方から留萌・宗谷地方が主産地になり、最盛期を迎えます。

この地方の漁場は、道庁の統計上は厚田郡と浜益郡だけで石狩郡はありません。両郡の漁獲高は、その年により豊漁・不漁の差が著しく一定していませんが、明治20年代まではほぼ毎年、それぞれ2万石から3万石で、明治20年代後半から30年代に最盛期を迎えます。漁獲高は、厚田は明治32年が最高で62,400石、浜益は34年に最高の54,900石を記録しました。ただし、価額では、厚田は漁獲量とおなじ明治32年の約61万円、浜益は38年の約70万円が最高額です。なお、全道の最多漁獲高は、明治30年に約125万石(94万トン)を記録しました。

当時は今と違って、獲れた鯨の大部分は肥料、粕に加工して本州に移出され、日本農業の発展に貢献しました。その割合は、だいたい90〜95%ほどです。

厚田・浜益両郡のメ粕の生産量は、明治20年代まではそれぞれ年産1万〜2万石でしたが、20年代末から30年代にかけて最盛期を出現

し、厚田は漁獲高と同じく明治32年に54,600石・544,000円を記録し、浜益も同じく34年に45,000石、価額は38年に634,500円に達しました。

なお、北海道全体の統計で、食用の鯨が肥料を上回るのは、昭和の初めになってからです。

② 鯨の漁獲高と塩鯨の生産高

鯨は「表16」の2をご覧ください。鯨漁の動向は鯨と少し違いますが、鯨は明治30年前後にピークを迎えますが、鯨はそれより10年以上も前に最盛期が過ぎていきます。先ほども言いましたように、鯨には、建網(定置網)と曳網がありますが、厚田と浜益は極めて少なく、漁場はほとんど石狩に限られます。

明治初期から10年(1877)代の3郡の鯨漁獲高は詳細は不明ですが、石狩郡の漁獲高及び3郡の塩鯨の生産量から推定すると、2万石前後でした。鯨の1石は鯨とちがって、60尾を1石といいます。鱒はその2倍の120尾です。鱒は価額が低いからだと思えます。

石狩郡の漁獲高は、明治10年代までは、1万5千石から2万石で、明治15年には約24,600石・159,000円を記録しました。ところが、明治20年の23,000石・134,000円、3郡合計では約29,000石・174,400円をピークとして不漁期に入り、1万石以下の年がほとんどになります。30年代になるとさらに減って、わずかに5千石以下に減ります。ただ、不漁になると、値上がりしましたので、漁獲価格のピークは、明治38年の約161,500円、3郡合計では177,000円です。

鯨は粕に加工しましたが、鯨の約80%は塩鯨にしています。地元などでは、生鯨のさまざまな利用の仕方がありますが、当時は、今と輸送・流通機構が違いますのでほとんど塩鯨です。江戸時代の後半からそうでした。塩鯨の生産量も、当然のことながら、鯨の漁獲高に応じて変化し、明治初期から10年代には、ほぼ年産1万から2万石で推

移し、明治12年には最多の22、400石、3郡合計25、000石を記録しました。しかし、明治16年以降は1万石以下に減少し、明治30年代になると、さらに減って5千石以下、37年にはついに千石以下となりました。

塩鮭の生産価額は、豊漁期の明治12年には石狩郡だけで約19万円にも達していました。不漁期には生産量は減りましたが、価格が高騰した結果、31年には約10万円でした。しかし、その後は不漁に伴い、明治40年には約1万円にまで落ち込みました。

(2) 耕地の増加と農業

① 耕地の増加

最後に、農業に触れたいと思います。まず、農業発展の指標の一つは、耕地面積の変化です。農家が明治の中頃から急激に増えたことは、先ほど触れましたが、耕地面積はどうでしょうか。「表17」をご覧ください。明治16年(1883)の3郡の田畑、耕地面積は、わずかに約400町歩に過ぎませんが、40年には17、000町歩に増え、この短期間に40倍以上に急増しています。耕地面積の増加は、当然農業の発達を示しています。郡別にいきますと、厚田と浜益は漁業が主体、もちろん原野もありますが、他の地域と比べて原野はそれほど広くないですから、石狩郡に集中します。石狩も現在の市域の農地はそれほど多くはありませんが、純農村の当別村と新篠津村が含まれますので、郡別では石狩郡が圧倒的で80%を占めます。

次に、耕地面積を田畑別に見ますと、明治40年になっても、畑が94%を占めます。この頃には、石狩地方(当時の札幌支庁管内、5郡)全体を見ますと、稲作がかなり伸びつつありましたが、まだ、畑作が主体です。

② 主な農作物

〔表18〕は開拓期を脱しつつあった明治38年(1905)の主要な農作物です。作付面積が最も多いのが麦の3、050町歩、2番目

が燕麦で2、450町歩です。燕麦は馬の飼料です。燕麦がなぜ多いかといえますと、若い方は想像がつかないと思いますが、北海道は全国で最も早く農業に馬が取り入れられた地域です。そのスタートは開拓使が農業の近代化を図るために、手作業の農業から機械を取り入れた洋式農業を導入したことに始まります。道庁時代の初期、明治20年代になりますと、北海道の農家の標準的経営面積が1戸当たり、約5ヘクタール、5町歩とされます。本州では自作地が1町歩ですと立派な農家ですが、北海道で農業をやっていくためには、本州の5倍もの耕地面積が必要です。人手だけではできないので、作業能率を高めるために機械を導入しなければならず、機械は今と違って畜力農機具を使いますので、馬を飼います。開拓期の数年間は馬を持てませんが、どの農家も、本州では馬を持てないような小作農家でも、1頭や2頭の馬を持つようになります。その農耕馬の飼料が燕麦です。そのほかに軍馬の飼料としても重要でした。

燕麦の話が少し長くなりましたが、次の第3位が菜種の1、500町歩で、これは菜種油、食用油の原料です。それから、小豆(あずき、しょうず)、大豆、米(稻)の順で上位を占めます。

生産(収穫)金額でも、麦の152、000円が最も多く、以下、菜種、燕麦、小豆、米、大豆が上位を占めています。

このように、明治期のこの地方では、農地が急激に増加し、農業が発達しましたが、稲作は伸びつつあったとはいえ、まだ、畑作が主流でした。この後、大正時代から急激に水田が増えていきます。

明治時代の北海道農業の特色の一つとして、華族といわれた人々が経営する農場を含め大農場が多いことがあげられ、中には1、000町歩以上に及ぶものも少なくありませんが、この地方にはさほど大きな農場はありません。また、牧場が開かれ、酪農も行われるようになりましたが、大規模なものは見られないようです。

(3) 石狩油田の開発

最初に述べましたように、この地方では、北海道では数少ない油田の開発が行われましたが、時間の関係で省略させていただきます。

(4) 交通・運輸の発達

それから、交通運輸の面では、石狩川の水運や、全国的にも有名な石狩川の渡船場があります。さらに、運河は花畔・銭函運河が開削され、鉄道では、大正期になって手稲村の軽川と花畔の間に敷設された軽石軌道もありますが、省略いたします。なお、石狩川渡船場の歴史については、ご承知の通り、『いしかり暦』第9号で特集していますので、皆さんのほうが詳しいと思います。

6. 教育・文化

教育・文化については、時間の関係で、社寺に限って少しだけ触れます。神社はその地域の歴史と非常に関係が深いですね。現在残っている神社で、江戸時代に創建された神社のほとんどは、場所請負人が創建した神社です。石狩の場合は村山家が建てた石狩弁天社です。それ以降も、石狩の場合は鮭漁が発達すると、力のある親方衆が神社の経営を財政的に支えます。そういう土地柄が神社の歴史にも反映しています。また、石狩八幡神社の創建は、最初に述べた幕府（箱館奉行）の石狩改革と関係があります。

お寺は宗派ごとによりますが、神社とは少し違いますが、それでも、古いお寺の歴史を知ると、創建期から発展期まで、地域の経済界の実力者たちが、お寺も支えている。お寺から見た地域の歴史が成り立つくらい、お寺や神社は大事ですね。

文学については、私は専門ではありませんが、石狩尚古社は、北海道文学史の中でも特色ある位置を占めております。尚古社については、『いしかり暦』第11号でも特集されていますので、省略させていただきます。

終わりに

以上、わたくしの見た明治期の石狩地方の特色についてお話をさせていただきました。調査不足と時間の制約から舌足らずで、省略させていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。



石狩市郷土研究会創立 60 周年記念講演会
日時 平成 2 年 10 月 25 日 (日)
会場 石狩市花川北コミュニティセンター

【別紙】

〔表-1〕 戸口の増加

年次	石 狩 郡				厚 田 郡		浜 益 郡		3 郡合計	
	郡 合 計		石 狩 (町)		現住戸数	現住人	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人
	現住戸数	現住人	現住戸数	現住人						
明治13	628	2,156	456	1,422	194	962	426	1,200	1,248	4,318
16	670	2,617	—	—	220	1,364	322	944	1,212	4,925
20	1,127	4,094	883	2,845	485	2,006	390	3,325	2,002	9,425
30	3,747	14,031	1,770	6,911	836	4,836	836	4,296	5,419	23,163
40	3,509	20,973	1,567	9,077	1,117	7,778	1,378	7,000	6,004	35,751
大正 6	3,936	27,022	1,408	10,466	1,061	6,896	1,158	7,605	6,155	41,523

〔出典〕 「開拓使札幌本庁管内村別戸口表」(明治13.1.1)、「札幌県統計書」(明治16.11)、
北海道庁「北海道戸口表」(明治20・30・40・大正6、各年12.31)
〔註〕 各年12月31日現在

〔表-2〕 明治20～29年 来住農・漁業者

		石狩郡	厚田郡	浜益郡	3郡合計
農 業	戸数	845	157	48	1,050
	人口	3,532	611	191	4,334
漁 業	戸数	30	41	172	243
	人口	96	128	670	894
総 数	戸数	1,049	342	360	1,751
	人口	4,056	1,174	1,280	6,510

〔註〕 明治24年までは転籍者のみ、同25年以降は寄留者を含む。
〔出典〕 「北海道庁第十回勸業年報」、「明治二十九年北海道来往住戸口表」

〔表-3〕 アイヌ戸口

	石 狩 郡		厚 田 郡		浜 益 郡		3 郡合計	
	戸 数	人 口	戸 数	人 口	戸 数	人 口	戸 数	人 口
明治 5	12戸	52人	6戸	19人	36戸	170人	54戸	241人
15	18	58	5	10	43	157	66	225
20	16	23	5	6	42	159	63	188
30	13	53	4	4	37	151	54	208
40	9	32	3	3	44	169	56	204
大正 6	12	39	3	3	56	207	71	249

〔出典〕 開拓使「北海道志 卷一」、「北海道庁統計書」(第2・10・19・29回)

〔表-4〕農家（耕作者）の増加

		石狩郡		厚田郡		浜益郡		3郡合計	
		戸	人	戸	人	戸	人	戸	人
明治16	専業	244		14		45		303	
	兼業	19		-		4		21	
	合計	263		14		49		326	
20	自作	383	1,323	79	192	30	99	492	1,614
	小作	12	25	2	4	3	8	17	37
	合計	395	1,348	81	196	33	107	509	1,651
31	合計		7,536		996		895		9,427
40	合計	2,840	15,410	550	2,478	418	2,299	3,808	20,187

〔出典〕「明治十六年札幌県統計書」、「北海道庁統計書」（第2・10・19回）

〔表-5〕漁家（漁業者）の増加

		石狩郡		厚田郡		浜益郡		3郡合計	
		戸	人	戸	人	戸	人	戸	人
明治16		24	72	174	1,418	192	1,087	309	2,577
20		14	14	178	454	331	2,093	523	2,561
40	主業	41	182	385	1,733	947	5,809	1,373	7,724
	兼業	25	113	372	1,485	73	336	470	1,934
	合計	66	295	757	3,218	1,020	6,145	1,843	9,658
	建	鯿	-	45		36		81	
	網	鮭	4	5		3		12	
		鱒	1	2		-		3	
	曳	鮭	33	2		-		35	
網	鱒	15	2		-		17		
	刺網	鯿	-	213		112		325	
	昆布		-	394		626		1,020	

〔出典〕「明治十六年札幌県統計書」、「北海道庁統計書」（第2・10・19回）

〔表-6〕石狩・厚田・浜益3郡の鯨・鮭漁獲・生産高
1. 鯨

	漁 獲 高					鯨 搾 (絞) 粕 生 産 高					
	厚 田 郡		浜 益 郡		全道	厚 田 郡		浜 益 郡		全 道	
	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	生産高	価 額	生産高	価 額	生産高	価 額
明治	石	円	石	円	石	石	円	石	円	石	円
3					23,934						
4					277,584	11,655		—		141,425	584,087
5					392,054	3,150		8,705		214,994	599,835
6					374,490	5,900		7,100		177,094	575,559
7					526,042	7,967		10,332		247,464	1,288,514
8					492,997	8,202		12,468		226,789	944,469
9					760,866	9,008		12,035		38,698	1,211,370
10					719,957	10,609		15,133		338,545	1,297,984
11					610,811	6,565		11,243		218,603	993,983
12					764,244	12,524		12,543		322,290	2,085,219
13					911,841	17,029	138,609	15,804	129,594	347,612	2,954,702
14					872,067	13,977		16,244		323,688	2,013,344
15					983,486	14,266	74,180	11,957	64,865		
16	17,507				734,677	14,184		19,903			
17			20,692		951,727	17,310	65,701	19,299	68,320		
18					886,271	24,082	72,247	19,404	60,965		
19					900,028					572,374	2,079,328
20	23,988	153,838	22,625	135,339	666,090					384,018	2,181,448
21	26,466	131,686	28,369	146,658	902,809					558,775	2,784,969
22	27,688	146,895	35,824	211,334	842,943					510,642	2,929,959
23	32,156	177,751	36,330	233,931	947,638	31,126		34,698		599,794	3,692,812
24	38,053	202,977	25,000	155,525	1,076,114					663,567	3,891,301
25	14,067	91,225	10,993	70,178	794,835	12,144		9,550		484,770	3,092,104
26	22,168	135,054	22,396	141,391	927,238	19,428		21,000	134,400	605,134	3,736,071
27	18,542	122,133	20,622	133,619	1,046,479	16,675	121,771	19,950	129,675	738,873	4,460,579
28	34,787	226,527	24,508	164,185	994,353		111,722			664,066	4,440,484
29					976,558	31,715	285,435	35,800	322,200	628,925	5,398,271
30					1,254,075	33,856	264,077	38,000	361,000	808,221	6,954,058
31	21,183	212,193	19,130	187,754	837,263	18,353	192,707	18,200	179,270	521,089	4,635,466
32	62,422	609,543	31,975	341,852	930,560	54,559	543,790	29,907	322,996	606,626	5,964,820
33	25,644	259,303	32,746	349,380	789,778	23,218	233,967	30,795	330,122	506,368	5,184,202
34	40,340	412,979	54,880	555,545	869,877	31,100	326,550	44,950	449,500	560,394	5,380,768
35					938,805	17,800	186,900	32,000	352,000	533,719	5,393,440
36	46,910	438,618	26,672	278,394	1,013,938	36,420	364,200	25,750	252,350	621,794	5,894,171
37	33,117	407,636	47,545	604,528	754,701	23,843	309,959	41,880	544,440	471,980	5,562,176
38	40,053	576,168	47,752	699,102	664,295	27,513	412,695	42,300	634,500	438,538	5,557,242
39					522,753	7,500	105,000	2,115	26,437	307,463	3,906,299
40						10,941	169,588	13,628	204,420	328,410	4,631,102

2. 鮭

	漁獲高						塩鮭生産高						
	石狩郡		厚田郡		浜益郡		全道		石狩郡		厚田郡	浜益郡	全道
	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	価額	漁獲高	生産高	価額	生産高	生産高	生産高	生産高
明治	石	円	石	円	石	円	石	石			石	石	石
3	17,211						18,903						
4	15,058						29,827	10,463		1,064	—		13,605
5	24,216	116,235					61,328	18,724		1,168	675		43,059
6	17,276						51,568	17,275		1,524	691		32,697
7	10,479						36,507	570		789	793		15,071
8	15,165						50,217	15,757		1,352	990		33,057
9	14,019						59,110	14,419		1,104	1,298		31,201
10	12,137	85,563					62,610	12,136		1,278	2,480		35,160
11	15,955						69,511	15,951		759	774		42,123
12	22,387						107,900	22,383	190,789	2,231	1,355		51,851
13	19,354						123,337	19,353		1,905	825		51,998
14	14,425						90,658	14,401		1,079	809		40,095
15	24,654	159,019					106,844						
16	17,755		1,031		3,676		106,266	16,669		704	2,003		
17							84,558	9,684	64,884	1,121	945		
18							99,318	8,405	34,965	795	1,027		
19							117,050						110,739
20	23,095	134,090	3,814	24,723	2,340	15,604	122,994						99,704
21	13,232	123,113	1,543	12,938	1,497	9,546	119,884						106,364
22	11,660	93,033	1,017	8,826	497	4,252	173,164						156,892
23	8,633	64,215	943	7,782	610	5,095	94,797	5,750		943	550		85,408
24	8,456	74,804	973	8,276	865	7,550	83,642						
25	9,762	88,389	1,583	15,393	543	4,856	107,990	7,400		1,472	488		98,284
26	1,800	15,120	930	9,220	28	238	118,106	?	?	854	?		108,670
27	2,456	22,091	573	8,881	313	2,573	59,063	1,250	10,512	571	300		35,013
28	3,478	43,446	603	7,373	121	2,085	48,422						
29							52,708	2,540	33,020	838	250		32,118
30		79,486					70,262	3,000	51,000	532	200		59,405
31	8,837	152,639	2,702	54,983	122	2,948	64,444	5,896	100,232	1,235	120		53,912
32	4,367	99,569	984	29,524	92	2,293	39,195	1,598	34,548	—	90		30,355
33	5,253	121,929	300	6,000	309	6,460	47,058	2,007	41,746	—	301		38,149
34	3,562	97,963	780	23,700	215	6,170	34,631	1,241	31,025	600	180		26,269
35							32,716	1,079	23,182	600	303		21,659
36	4,618	109,119	586	11,001	510	9,536	41,213	1,277	27,072	250	472		31,218
37	1,782	48,294	230	5,500	312	7,281	32,960	626	14,398	130	1,175		25,357
38	6,420	161,478	309	7,920	294	7,652	39,268	707	18,382	130	255		31,371
39							38,085	657	17,739	230	100		31,158
40								467	10,508	47	79		29,701

- [出典] ○明治3～28年全道漁獲高：『北海道庁統計綜覧』M29、『北海道庁第十回勸業年報』M29
 ○同29・39年全道漁獲高：『北海道拓殖の進歩』M41
 ○同4～14年鯨搾粕・塩鮭生産高：『開拓使事業報告 第參編 物産』M18、『開拓使事業報告原稿 物産部(水産表)』(道立文書館・簿書)
 ○同3～15年石狩郡鮭漁獲高：森山友太郎文書(田中實・前田薫徳編著『石狩漁業協同組合史』H14)
 ○同5・10・15・30年石狩郡鮭漁獲価額：北海道庁『北海道殖民状況報文 石狩国』M33(S62.北海道出版企画センター)
 ○同12年石狩郡塩鮭生産価額、13年厚田・浜益郡鯨搾粕生産価額：開拓使勸業課『明治十三十四年 諸物産表』(道立文書館・簿書)
 ○同15～18年各郡漁獲・生産高：『明治十五年〔札幌〕 県治類典 管内物産表』(道立文書館・簿書)、
 『明治十六年 札幌県統計書』、『札幌県勸業年報』(第2～4回)
 ○同19～40年：『北海道庁統計書』(第1～19回)、『北海道庁勸業年報』(第1～10・15～19回)、
 『北海道庁拓殖年報』(第11～14回)
 [註] ○全道には南千島(国後・択捉島)を含む。
 ○生鯨(ツブ鯨)200尾=1丸、3丸=600尾=1石、鯨×粕40貫(150kg)=1石〔生鯨換算≒200貫=750kg〕
 ○生・塩鮭1石=60尾(20尾=1束、3束=1石)

[表-7] 耕地面積の増加

	石 狩 郡			厚 田 郡			浜 益 郡		
	田	畑	合計	田	畑	合計	田	畑	合計
明治16	-町歩	342.0町歩	342.0町歩	-町歩	16.6町歩	16.6町歩	0.4町歩	47.4町歩	47.8町歩
20	-	636.5	636.5	-	221.8	221.8	-	86.4	86.4
30	178.2	4,873.6	4,873.6	8.1	645.5	653.6	3.1	121.1	124.2
40	767.3	12,776.4	13,543.7	116.4	2,276.2	2,392.6	163.6	1,019.0	1,182.6

[出典] 『明治十六年札幌県統計書』、『北海道庁統計書』(第2・10・19回)

[表-8] 主要農作物(明治38年)

農作物	石 狩 郡			厚 田 郡			浜 益 郡		
	作付面積	収穫高	価 額	作付面積	収穫高	価 額	作付面積	収穫高	価 額
米	745.6町	5,699石	79,835円	112.5町	1,008石	14,130円	110.8町	1,033石	14,462円
麦	2,777.6	22,181	132,886	150.4	1,525	10,660	122.0	1,255	8,308
燕麦	2,338.7	58,467	116,935	98.1	1,962	3,925	8.0	224	2,800
蕎麦	477.8	5,734	34,404	24.0	260	1,060	51.2	256	1,024
大豆	975.6	9,905	63,240	80.0	650	4,570	151.0	1,528	11,002
小豆	1,294.1	11,647	104,823	45.0	420	3,930	112.0	1,232	10,472
菜種	1,319.5	13,195	118,755	95.0	950	9,500	78.2	782	6,647

[出典] 『第拾九回 北海道庁勸業年報(明治三十八年)』

石狩市郷土研究会創立60周年記念講演会講師 関秀志先生のご経歴

1. 略歴

昭和11年 北海道苫前郡苫前町に生まれる
34年 北海道大学文学部史学科（国史）卒業 北海道羽幌高等学校教諭
44年 北海道総務部百年記念施設建設事務所研究職員
46年～北海道開拓記念館研究職員・資料調査課長・資料管理課長・主任学芸員
・開拓の村整備室長・学芸部長・特別学芸員を歴任
平成9年 定年退職
現在 北海道史研究協議会副会長、
北海道歴史文化財団評議員、登別市史編さん委員会委員

2. 所属団体等

日本歴史学協会、日本民具学会（名誉会員）、地方史研究協議会、
北海道地方史研究協議会（副会長）、
北海道歴史研究者協議会、北海道文化財保護協会など

3. 研究分野・主な著書〔共著を含む〕

〈研究分野〉北海道近現代史（移住開拓史・民具史）

〈主な編著書〉

『北海道の風土と歴史』（山川出版社）、『明治大正図誌 北海道』（筑摩書房）、
『北海道の研究 5・8』（清文堂）、『クラークの手紙』（北海道出版企画センター）、
『北海道の馬糞』（北海道開拓記念館）、『北海道民の成り立ち』（北海道新聞社）、
『新版 北海道の歴史 下』（北海道新聞社）、『北海道地名大辞典 上・下』（角川書店）、
『日本歴史地名体系 第1巻 北海道の地名』（平凡社）、『松平農場史』（旭川振興公社）、
『新旭川市史 第1～8巻』（旭川市）『札幌の地名がわかる本』（亜璃西社）など

4. 研究等における石狩市との関係

〈研究〉

関秀志「幕末期における庄内藩の留萌地方経営をめぐる諸問題(1)～(5)」(『北海道地方史研究』第90号・昭和48.2、『北海道史研究』第1・5・9・21号、昭和48.12、49.12、50.12、55.1)、

関秀志「幕末における蝦夷地と庄内藩陣屋」(北海道・浜益村教育委員会編『史跡庄内藩ハマシケ陣屋跡—平成元・2・3年度保存管理計画策定事業報告書』平成4.3)、関秀志「幕末の開拓地(1)～(8)」(道史協支部編『北の青嵐(67)(73)(78)(113)(126)(136)号、平成10.5～16.5)、

関秀志「庄内藩士の蝦夷地つり日誌(1)～(4)」(水交社編・刊『北海道のつり』475～478号、2010.6～9)

〈講演〉

厚田村村民大学講演(昭和62.9)、

庄内藩ハマシケ陣屋跡保存管理計画策定委員会(平成2.8～3.11)、

石狩市民図書館冬の図書館講座講演(平成24.3、25.3)、

石狩市民図書館講座講演(平成26.3)、

いしかり市民カレッジ講演(平成28.10)、

庄内藩ハマシケ陣屋跡活用検討意見交換会(令和2.2)

石狩市の後世の為に

顧問 田中 實

石狩市郷土研究会が創立60周年を迎えたことを、創立にかかわった立場から心よりお祝い申し上げます。研究会がこれほどまで長く活動を続け、現在もますます発展しているのは会員の皆様の長年にわたる研究熱心な取り組みによると思います。研究会の地道な活動によつて、石狩の歴史が様々な角度から明らかになってきました。私もまだまだ調査研究を続けたいと願っていますが、内容が多岐にわたり、行き届かない部分もあるかと存じます。

60周年という節目に、私が続けたいと考えている研究課題や研究項目を以下の通り皆さんにお知らせし、郷土研究会の後世の研究の手掛かりにしていただけだと願います。次の項目で豊富な研究成果が生まれ、石狩市郷土研究会がますます発展することを祈念致します。

1. 新石狩市史編集と市史編集の為に課題が残る項目の調査研究

・「新石狩市史」編集組織（市行政）の発足方（試案を）

明治以前欠多し 素材収集中

・平成13年以降の「石狩市年表」

（厚田区、浜益区の取り扱いを）

・石狩市（含む厚田区、浜益区）の写真集を作成すること。

そのために（市、個人、団体のノート）などを調べる。

田中所持本あり

・公団（5万分の1図）に表示された石狩市域の説明文字調査

（例・町村名、大字、小字、農場その他）

・地図に刻まれた石狩

・「対雁、来札移住の樺太アイヌ史年表」及び「関係史資料」編集

素材収集あり

・ヨハン・ゴタールト・ファンゲント図

（石狩港湾を計画したお雇い外国人技師）

― 幻の画像と墓、来日前事跡 ― 作田氏と共同で

・石狩川河口地区―本町、八幡町両市街の築堤事業と住民対策等について

・花川地域開発史概要年表（田中編）増補記事調査 取組中

・花川南地区の大規模住宅地開発資料

（計画資料・電話番号帳）田中取り組み中、資料あり

・緑苑台史（2020年8月現在なし）

遺跡、伏籠川治水計画、

前田農場↓耕北農場↓内外緑地kk↓住友商事・三菱地所

町市農委、町市史資料

・大正期・昭和期の石狩町・厚田村・浜益村の電話帳

2. 自然、文化等の具体的項目についての調査研究

・石狩海浜地植物調査誌

記録に見る植物―含む文学作品

・石狩海浜砂防林帯造成年表（昭和20年以降） 資料あり

・金大亭石黒家所蔵 額・掛物・色紙などの目録

・金龍寺所蔵品（旧 高野家など）

・石狩を書いた作家たち（含む画家、映画ロケ、歌謡など）

・石狩市のアイヌ史・伝説・ユカラ

ハママシケ（実田）・イシカリアイヌ（生振 ヤウシバ）

樺太移住アイヌ（来札）・ハツサムアイヌ

ユーカーラ（天川氏）、義経伝説、紅燕情話（ホイヤホイ）

豊川氏・山辺氏・金田一氏、久保寺氏

・石狩のサケ料理礼賛者作品について

伊藤深水、武田泰淳、達本外喜治、大谷句佛、児玉希望、

子母澤寛他

エッセイ、短詩型作者

・達本外喜治『新北海道たべもの歳時記・サケの「チウ」』

月刊北海道（株）マアビス

3. 石狩の文化（文学や美術）を伝える施設整備の在り方の検討

・石狩文学資料室 市民図書館内に（歌集、句集外）

（一部2Fに在り）

・市民の作品で作る石狩美術館（美術室）

郷土研究会六十周年

顧問 了恵寺住職 高木 憲了

私は、昭和三十年、縁あって石狩に移り住みました。実家は四国香川県高松市で、南から北へとやって来たという訳です。三十年代当時は、気温も道路事情も現在とはまったく違っていましたので、冬の寒さは想像を絶するものでした。檀家参りも、吹き溜まりの道を歩かなければならず、よくも遭難しなかったものだと思います。それも、一年二年と過ごすうちにだんだん慣れてきて、今や人生の三分の二以上を石狩で暮らして、住めば都になっております。

石狩に来て間もなくのある日、檀家のお参りをしておりました。耕北農場の品川清家に向いたところ、畑の隅に土器片が転がっていました。びっくりして品川さんに尋ねると、「畑を掘るとゴロゴロ出てくるよ。邪魔くさくて仕方ない！その木の根元に集めて転がしてあるよ」と言うのです。見ると実際、たくさんの土器片が積んでありました。何もない土地と思っていたが、この事には本当に驚き嬉しい思いました。品川家近所の家々からも続々と土器片や石器が出ていて、それらを譲り受けました。「了恵寺の若さんが集めている」と皆さんの評判になったほどでした。

なお余談ですが、耕北農場は、創生川左岸から花畔にかけての広大な農場で、明治期に旧加賀藩前田家が開いた農場です。現在は「茨戸耕北橋」というバス停がその名前を残しているだけです。了恵寺では、屯田墓地東側に住む檀家さんを今でも「耕北農場の〇〇さん」と呼んでいます。

品川家の土器を見つけた頃に、田中實さんと出会うことになりました。道の農業普及所の職員であった田中先生と意気投合したことは言うまでもなく、先生も農家の畑から出土した土器片や石器を集め保管しておられ、大いに刺激になりました。あちこち同行させていただきました。

たものです。

戦後も十年以上たっており、生活以外の事にも目が向くようになっていたと思います。町の人々にも、郷土の事を歴史を踏まえて、もつと知ろうとの気運が高まっていたところも有り、郷土研究の活動をしようという件の募集をしたところ多くの方々賛同してくださり、昭和三十五年三月郷土研究会の創立時は七十名以上になっていました。皆様この機を待っていたのでしよう。

公的な発掘調査に参加したり、了恵寺を宿泊場所に提供しての調査も実施したりと、想い出す事が多くありました。

町民ではない私であればこそ、外から見えた多くの事があつたのだと思います。

それから六十年もたち、会報誌や調査資料、写真集など、石狩市の財産になる出版物も数多く、会員皆様の努力、協力の結果と思われ

ます。最近では年齢的に、皆様と共に行動する事がなくなりましたが、組織もすっかりとして、何十年の努力が実を結んでおります。先の楽しみも多い郷土研究会ですので、私も微力な協力を続けていきたいと考えております。

合 掌

石狩市郷土研究会と私

会 長 村山 耀一

令和二年度は石狩市郷土研究会が創立六十周年を迎えた年であつたが、二月に入り新型コロナウイルス感染が蔓延するのを抑えるため、石狩市も感染症拡大防止の観点から公民館や市民図書館などが閉鎖されたことに伴ない四月の総会をはじめ、例会、村山家文書を読む会、研修視察、各種展示会などが中止されたことは誠に残念なことであつた。しかし、八月、九月の例会と十月の六十周年記念式並びに講演会を実施し、同時に発行したいしかり郷土シリーズ9『石狩市小中高等学校校歌集』を音源(CD・HPで聴ける)付きで発行できたことは何よりもうれしいことであつた。

さて、私と本会の出逢いは昭和六〇年(一九八五)四月一日、教員の異動で花川南中学校に赴任したことに始まる。石狩には我が家の墓碑が(明治二六年建立)あることから永住を決めた。石狩市郷土研究会に入会したのは現在顧問の田中實氏と故鈴木トミエ氏との出会いにあり、昭和六二年四月一日(土)の集まりが初参加であつた。会場は青少年センター二階の和室で午後三時から開かれた。当時、山口福司氏が二代目会長で顧問に初代会長の花田知也氏(石狩八幡神社宮司)と長谷川嗣氏(生振 歴史研究家)がいた。会員は二六人で、多くは明治以降石狩の開拓に関わつて移住した方の二世、三世の方や役場職員と花畔や樽川の新興住宅地に移り住んだ方々も含まれて構成されてきた。この時の会員の中で五名が現在も会員である。

入会した日の活動内容は、いしかり郷土シリーズ1『石狩の空襲を語りつぐ』と郷土シリーズ2『石狩の碑第一輯』が刊行された時で、その報告と六二年度の事業について話し合われた。内容は現在の総会のような集まりであつたと考えられる。この年の三月、旧花川中学校が閉校し、四月から現在の花川中学校に移転したのに伴い旧花川中学校の校舎は公民館として使われるようになり、郷土研究会の活動も公

民館に移り現在に至っている。

当時の活動は例会が毎月定例化されてなく、研修日や回数も不定期であった。私のその後の活動は、勤務の関係で郷土研究会の活動に十分出席できず、たまに例会や研修旅行に参加する程度であった。千歳に勤務していた時は会計から会費納入の催促のハガキが届いたことを思いだす。

私が本格的に会の活動に参加するようになったのは平成十一年四月に紅葉山小学校に赴任してからのことで、四代目高木憲了会長の時代であり会員は四十八名になっていた。この頃には例会も定例化され、研修視察旅行や新年会、市民文化祭、公民館まつりなどの展示活動も行われ、会誌「いしかり暦」も毎年発行されるようになった。平成十二年四月二十日の総会で私は三人目の副会長に推選され、さらに平成十五年四月十七日の総会で第五代会長に推選され現在に至っている。会員の入れ替りはあったが三十〜四十名台を保ち、最近では若い入会者もいることでこれからの活動に期待がもてる。

近年の活動はこれまでの活動を継続させつつ、石狩市民図書館との連携の下「村山家文書を読む会」を発足させ、古文書の解読やその背景などを研修し市民図書館まつりで成果を市民に提供し、「地図部会」も組織して、石狩に関わる古地図や地形図、町内会の戸別明細図など幅広く収集、整理してデータ化を進めている。「校歌部会」は石狩市小中高等学校の現在校と旧学校全ての学校の概要、沿革、校歌をまとめ音源も含めて前述のように発行することが出来た。また、画期的な活動では、本会でホームページを開設し、これまで発行した会誌「いしかり暦」や村山家文書目録や解読文の掲載、「石狩市小中高等学校校歌集」では音源を添えて掲載し活動成果を市民が誰でも活用できるようにした。来年度からはさらに新たな気持ちで郷土研究会の目的である石狩市の歴史、文化、自然の調査、研究を高め成果を市民に提供していく開かれた郷土研究会の活動を進めていきたいと思っている。

六〇周年　そして二五年

三島 照子

昨年、石狩市郷土研究会の六〇周年記念事業が行われました。六〇年の継続と、田中先生と高木住職におかれましては創立会員であり、元気でいられることに感動しています。

私が星川さんに誘われて入会したのは平成七年ですから、すでに二五年間も在籍していることがわかりとても驚いています。

入会した頃は、毎月田中先生の話が聞けてとてもワクワクした気持ちで参加していたものですし、田中先生の調査、研究、記憶の奥深さに感激していました。また、時々田中先生から会員に出される提案や研究材料があったのですが、答えることができなかつたのが今にして思うと申し訳ないのと残念だったという気持ちでいます。

石狩市の歴史について知らないことばかりですし、あまり興味も無かつたのですが、毎月例会に参加し、講話を聞くことにより少しずつ頭に入り記憶されるようになりました。継続は力なりです。

郷土研究会の会員数は、私が入会したときには三五名でした。入会時の会員で現在も在籍している人は五名です。ある方は亡くなられ、ある方は移動し、ある方は退会していますが、今思うと皆さんは常に前向きでいろいろな事に興味を示し楽しんでいました。特に思い出すのは、毎年八月に行われる山口会員の戦争に関するお話で、毎年いろいろな内容や材料を持ち込んで八月の終戦記念日前後の例会で話されていました。

会員数は私协会会员になった頃から三〇人から四〇人の間をいったり来たりですが、最近では女性会員や、年齢の若い人達も入会しています。また、遠距離の井口さんや、石狩に縁のある藤村先生も会員となり私達に別な意味での刺激をあたえてくれます。

ここ数年は、毎月の例会も年間計画が立てられバラエティーに富ん

だ内容になっていきますし、時にはゲストの講師も呼ばれ内容の深いものになっていきます。

郷土研究会が最も変化したのは、事務局長の石黒さんのお陰で、石狩市郷土研究会のホームページができたことです。資料検索がスムーズにできとても便利です。

六〇年という人生においては還暦です。還暦とは元の暦に還るという意味とか、これまでの暦を引き継ぎながら新しい暦を作って行きたいと思っています。

石狩市郷土研究会と私

石黒 隆一

私は、教員として仕事をした34年間の半分で厚田と浜益を含む石狩地域の学校に勤務しました。中でも古潭、厚田、浜益という石狩湾に面した海沿いの3つの地域の学校に勤務する深いご縁がありました。

すでに閉校した古潭小中学校は、北前船寄港地として繁栄した押琴湾を擁する地域にありました。昭和63年から社会科の教員として勤務して地域の歴史を探り、明治生まれのお年寄りから小樽と定期的に航行していた弁財型和船「久吉丸」に乗り組んだ経験をお聞きました。

厚田中学校には平成15年から教頭として勤務しました。旧厚田村は、「日本海に結ばれた友好の絆」というテーマで、平成4年から14回にわたって村内の中学2年生全員を石川県門前町（現輪島市）に派遣する事業を行っていました。私は、平成17年に合併を控えて最終となる訪問団に事務局長として同行しました。天領黒島北前船資料館に残る資料と道具や模型に見入り、天領祭の曳山の舵棒に使う帆桁の実物から北前船の壮大さを子どもたちと共に感じました。

4年を経て、平成22年から浜益小学校に校長という立場で勤務することになりました。浜益小では、ニシン漁で漁師たちが唄った労働歌を伝える子どもたちの取り組み「沖揚げ音頭」の復興に取り組みしました。沖揚げ音頭を盛り上げるために、地域の多くの皆さんの積極的な賛同と協力をいただきました。漁業協同組合からは、ニシンの建網漁を実際に経験された元組合長の中村東伍さんに御指導いただきました。郷土資料館に展示してある当時の漁具や建網の模型を使いながら、春先の番屋の準備、漁の仕方、身欠きニシンの加工法や、ニシンを釜ゆでして搾り上げてニシンメ粕を作る方法を詳しく説明していただきました。こうしたことによって、子どもたちは質の高い沖揚げ音頭を披露することができたのですが、子どもたち以上に、私もニシン

漁とニシンがもたらした地域発展について深く学ぶことができ、感動したところです。

その成果と感動を、子どもたちに実感を持って学んでほしいと考えて、浜益在住の創作人形作家・八田美津さんと相談しながら制作したのが、はまます郷土資料館に展示しているジオラマ第1作の「浜益ニシン場物語」でした。

このような長年の地域とのかかわりから、ニシンと北前船が私にとってはライフワーク的な研究テーマになりました。教職生活を終えて、自宅のある石狩に戻ってから、この分野をじっくりと調べていきたいと願っていました。そうした折に、社会科の先輩でかつて同じ学校に勤務したことがある村山耀一会長からお誘いをいただき、郷土研究会に入会させていただくことになりました。

その後、道の駅石狩「あいろーど厚田」がオープンして北前船ジオラマを制作・寄贈することになり、さらに、石狩で「北前船寄港地フォーラム」が開催されました。

石狩市郷土研究会に入会させていただいたことによって、田中實顧問から北前船の全国との結びつきについて豊富な資料による詳しいご指導をいただき、村山耀一会長から村山家文書に記された石狩改革と北前船の直舫じきほしりをご教示いただくことができるなど、私の力では到底追求しきれなかった石狩と北前船の歴史の奥深さに迫ることができました。

石狩市郷土研究会に入会させていただいた幸運に深く感謝し、できる限り地域と会員の皆様のお役に立てるように努力を続けたいと考えています。

石狩市郷土研究会六十年に思う

釣本 峰雄

創立六十周年を迎えた石狩市郷土研究会に入会させて頂き、毎月諸先輩のお話を聞かせて頂いたことで、石狩の歴史を知ることが出来たことを感謝しています。若い頃は東京にあこがれて上京した私でも、昭和六十一年に帰郷してから、十七年間のブランクを埋めるために、町政モニターを皮切りに、様々なサークルに所属しましたが、石狩市郷土研究会に入会させて頂いたことで、郷土愛が芽生え深まり確立してきたことは私にとって本当に幸いなことでした。

六十年前といえば私はまだ石狩町の広さも人口も知らずに、十七名のクラスメートと共に、全校生徒百名足らずの樽川小中学校に通っていました。そんな時にすでにこの会が発足していたことに私は驚いていますが、その頃私は畑の草取りをしているときに出てくる陶器のかけらを不思議に思いながら捨てていました。

春になると友人が紅葉山了恵寺の花まつりに行ってきたと言っていました。紅葉山がどこにあるかも知りませんでした。それが今こうして住職の高木さんに会の顧問をして頂き、私達は何度も了恵寺の宝蔵館で地元の出土品を見学させて頂いていることや、二十年前から北海道で五番目に低い紅葉山のすぐそばに住むことになったことに不思議な縁を感じています。

父が樽川で農業をしていた時に、よく「田中實さんのおかげだ」と言うのを聞いていて、この方に一度お会いしたいと思っていましたが、創立以来この会を支えてきた方と知って、図らずもお知り合いになったことを嬉しく思いました。田中さんの業績から町長に推されたのに辞退したこともあり、ある人があの方ほど心の綺麗な方はいないと言うのを聞いて、確かに素晴らしい方だと思いました。

また信念を貫く強い方でもありましたから、市役所の方は田中さんを怖がっていた方が多かつたようです。田中さんが表彰された時に講演内容を録音することになりましたが、田中さんは文章に書いたものは責任を持てるが、話すことは時には間違ひもあると録音をなかなか承諾してくれず、怖いもの知らずの私が説得して何とか録音できたことがありました。それ以来田中さんはよく私をご自宅に呼んで下さり、貴重な資料を拝見し興味深いお話を聞かせて頂きました。田中さんは石狩だけでなく道内や国内の歴史も正確に覚えているので、私達はそれらをできるだけ多く記録しておく必要があると思います。

私が府中のNECに勤めていた五十年ほど前に、石狩湾新港に企業が定着せず苦勞しているとのニュースを知って、石狩町役場の田中さんに企業誘致のお手伝いをしたいと書いた葉書を出したことがあります。私は送られてきた資料で都内の企業に新港への進出を勧めましたが、成果を上げられませんでした。しかもつい数年前に田中さんからその葉書を見せて頂くまで、そのことをすっかり忘れていました。私も頂いた葉書や手紙は全て保存していますが、田中さんの様にいつでも引き出せる自信はありません。

現会長の村山さんもこの会がきっかけで樽川神社横の貸農園を使って頂くようになりましたが、この方は北海道最大の場所請負人の子孫ですから、このような方が身近にいてご先祖のことを聞けるのはとても意義のあることだと思います。三島さんや若林さんの様に石狩出身の方はこの町の発展をずっと見てきた方ですから、この会になくはならない方だと思います。

これからは北前船のジオラマを作られた石黒さんやPJMの安田さんのように若い方がこの会を担っていかれると思います。私は校歌集を作るときに母校の校歌を音楽家の前で歌ったり、室蘭の井口さんを紅葉山砂丘にご案内した楽しい思い出に浸りながら、百周年を目指してこれからも在籍させて頂き、郷土史を学んでいこうと思います。

石狩市郷土研究会創立60周年に思う

安田 秀司

私が石狩市郷土研究会に参加させていただいたのは2016年7月例会からですので、まだ、4年半ほどで、まったくの新人に過ぎません。今回、この研究会が60周年を迎えられ、その刻まれた歴史を思うとき、その重みに感嘆せずにはられません。

さて、私が生まれたのが昭和32年の8月ですから、この会の誕生は私がまだ2歳のときのことです。私は苦小牧に生まれ、2歳の時に釧路に引っ越したと聞いています。私の父は教員でしたから、引っ越しは春先だったと思います。だから、会の誕生した3月、まだ凍れる釧路に来たであろう2歳の私は、母親にへばりついていてばかりで新しい街も、何が何だか分からないような状態だったと思います。

たぶんその頃の、私の一番古い記憶というのは、3歳上の姉が幼稚園に行くために自宅から登っていく坂があったのですが、あるときなぜか姉を迎えに行こうと思っただけで、一人で坂を登って迷子になり、不安のどん底にいたというものです。また、坂を少し下ると、おそろく私の最古の友だちであろう幼い子供たちの面影が思い出されるのですが、その子らの家が平屋の長屋で、各戸に水道がなく、屋外に設置された共同の水栓から水を汲み、バケツで家の水瓶に運んでいた、という記憶もあります。

会の創立60年にあたり、自分の60年前の記憶を、本当にその奥底から掘り起こしてみたのですが、本当に私にとっては擦り切れかかった記憶ながら、すごく大切なもののように感じます。実際、「共同水栓」の記憶はそれこそ50年以上忘れ去っていた記憶でした。そして、今、初めて文字に書き起こすことで、消えそうな記憶が「記録」になったわけです。

郷土史を研究するということは、放っておくと消えてしまうかも知

れない石狩の記憶を「記録」していく大切な事業だと思えます。石狩の歴史。それはまさに「縁あって石狩に住まうこととなった人々」にとっての貴重な宝物に違いありません。郷土研究会はその宝物を紡いでいく重責を担った会なのだと思います。その会の一メンバーとして、これからも微力ながら皆様と活動を共にしてゆきたいと思えます。

昔の石狩に思いを馳せて

若林 真紀子

初めて田中實先生のお話を聞き感動した時、偶然隣に居た幼馴染の三島さんに軽く誘われて入会し、8年になります。

仕事をしている時とは違った形で多くの魅力ある方々との出会いがありました。

曾祖父の時代からの石狩っ子、学生時代と勤めの数年間を除いての、祖父母、父母との暮らしでしたので、少しは石狩のことは知っています。はず…と思いきや、切れ切れの思い出と、明治から現在までのかなりの不確かな「石狩」の認識であることに次第に気付きました。少し頭の中の霧が晴れるようになったのは、例会や古文書の会に参加したり、いしかり暦等を読む機会が積み重なってきたからでした。恥ずかしいですが、特に熱心とか探求心とかは程遠いのですが、「おもしろい」「楽しい！」という感覚で、この8年間、毎月休むことなく参加してきました。

歴史の流れを再確認する時、我が家の曾祖父の時代からを並べて思い描くことも多く、不思議と「明治は遠くはない」と思ったり、もつと祖父母に聞いておくべきだったと今更ながら悔やんだりしました。

時々石狩のちよつとした風景、川や海や吹く風や佇まいに幼かった自分を重ねていたり、無意識にあの頃を捜していたり、タイムスリップしたような感覚を覚える気ができるのは「ふるさと」に居ることができる幸せと思っています。

今では会で（古文書の会も含め）話題になったり、学んだ石狩の歴史や暮らしを自慢げに兄や妹に話をして…「貴方が一番清作おじいちゃん似かも…お話好き（おしゃべり）なところが」などと言われたりしています。

努力、情熱、実力不足で及びもつきませんが、昔々に思いを馳せつ

つ、明治の人（大正時代だつて…）は「エライ！」と思うことしきりです。そんな清作おじいちゃんも60年前、郷土研究会の発足に係わり、役員をしていたことが分かり、ご縁というか、ちよつと感動したりしました。我が家の石狩の歴史から、明治、大正、昭和から今に至るまでの月日を見ていくことで、なつかしさと共に厳しい時代を生き抜いてきた、先祖がいてくれたから、周りの石狩の温かい人達に助けられてきたから、今こうして私が居る事自体、感慨深くもあり、こんなことに気付かせてくれた郷土研究会には感謝しています。

古文書サークルの歩み

安井 澄子

田中實先生の「これからは少しでも古文書の原文に接し読み取れる力をつけなければいけない」との御提言で、平成十五年六月から郷土研究会の中に定例会とは別に希望者で毎月一回・二時間として田中先生の指導の下に勉強会が発足しました。

一年位してからは「村山家文書」を中心に、当会会長の祖先村山伝兵衛が、宝永三年（一七〇六年）この石狩の地で引網を使って鮭漁を始めて以来、明治四十一年（一九〇八年）石狩を去るまで二百二年間の足跡を辿るになりました。

過去に北海道大学や北海道開拓記念館で解説整理された文書や新たに村山耀一会長の解説文を参考に、主に江戸末期の易しそうな原文書を選んで、時代は行きつ戻りつしながら取り組んでいます。

何しろ知識不足で、解説文を読んでも書かれている内容が理解出来ないことが一杯で、田中先生や藤村久和先生の解説でやっと納得という有様でした。平成二十八年（二〇一五年）突然田中先生が病に臥せられ、私達はサークルの指導者を失いました。度々つまづき判らない所は宿題にし、その答えがでないうままに……。それでも田中先生や藤村先生、開拓記念館（北海道博物館）の学芸員の方々に指導を仰ぎながら細々続けていました。

昨、令和二年国文学の専門の勉強をされてきた田岡克介前市長を迎えることが出来まして安堵いたしました。

又、石黒隆一会員によって全ての「村山家文書のデータベース化」も完了しました。これから研究される方には貴重な資料となることでしょう。

これからは一般の石狩市民の方々にも気軽な気持ちで手に取り理解してもらえる様に「現代文の形で残せたら」との思いであります。

石狩郷土研究会と私

土井 勝典

8年ほど前、郷土研究会に入会しました。そのころ私は、いしかり市民カレッジの講座の企画に携わっていました。開校記念講座の講師が田中實さんで、「いしかり人物語」歴史を彩った人々」について話されました。井上伝蔵や豊川アンノランなどの話に大変感銘を受けました。田中さんからは、毎年「田中實さんが語る」〇〇」という講座で話を聞くことができ、すっかり魅了され田中ファンになっていきました。もっと話を聞きたいという思いで、郷土研究会にはさほど関心はなかつた私ですが、友人の誘いもあって入会することになりました。会員になつたといつても、研究などというものではなくただ例会に参加して、先輩方の話を聞くだけという状態でした。そのうちに村山家の文書を読む古文書部会にも参加するようにもなりました。

新年会での田中實さんの「石狩市内の校歌集を」という呼びかけで、編集の仕事に関わることになりました。教育委員会や各学校の協力、新聞や地域への「校歌の楽譜探しています」などの照会、声楽家の今野博之氏の参加など多くの方々の方が集まり、どんどん広がりを見せて作業は進みました。そして「石狩市郷土研究会創立60周年記念号」という形で校歌集を作り上げることができました。

学校の歴史を見ていくと、郷土の歴史そのものでした。石狩、厚田、浜益は漁業で発展し大いに繁栄した時代があり、多くの学校は地域住民の力で建てられ、支えられてきました。漁業の衰退とともに学校も次々と閉校していきました。今では大きく変貌をとげ、住宅団地として発展した花川地区、流通と生産機能を分担する拠点としての石狩湾新港地区も先人たちが開墾した田や畑だったところす。高岡の奥に油田があり石油採掘に従事する人たちの集落もありました。そこには、当然学校もあり子どもたちの歌った校歌が響いていたことを思い起こ

すことができます。

石狩もその以前はアイヌの人たちの時代でした。来札にアイヌの子どもたちのための学校があつた、浜益がユーカラの舞台だつた、厚田の古潭にシャシ跡があつたことなどがわかりました。詳しいアイヌの人たちの様子は見出せませんでした。しかし、地名として見つけることができました。イシカリ、アツタ、ハママスはもとより花畔から千代志別まで学校名のほとんどはアイヌ語地名に由来するものでした。校歌を調べるところから、郷土の歴史の一端を知ることができました。郷土研究会の一員としてちよつとだけ仕事をさせてもらい、創立60周年という記念の年に居合わせた幸運に喜びと感謝の気持ちを抱いたところです。

会60年に寄せて

寺尾 陽助

いち市民グループがこのように長きにわたって、そして、設立当初から変わらない深さで活動・研究を続けていることに、会員でありながら驚くばかりです。石狩市郷土研究会（以下、会）の創立60周年は、石狩市にとって、とても大きな出来事ではないでしょうか。

会では、様々な角度から「石狩史の空白」を埋めたり、新たな「ページ」を掘り起こしたり、さらに平成17年10月の3市村合併以降は、研究のフィールドを「浜益区・厚田区」まで拡げたりと、以前にも増して充実した研究と発表を重ねているように感じています。

私が会の存在を知ったのは1998年、石狩市役所に奉職した後となりますが、学生の頃（高校生かな）、自宅の本棚に『いしかりの空襲を語り継ぐーいしかり郷土シリーズ1』（1987年（昭和62年）発行）があるのを見つけ、読んでいたことを、この原稿を書いていて、ふと思い出しました。

石狩市民として、昭和20年7月の石狩空襲（北海道空襲）のことは知っていましたし、母校の石狩東小学校には、空襲（だったかな？）を受けた際に撃ち込まれた「銃弾」の残る棚があって、それを先生に触らせてもらった記憶もあります。空襲時のまちの様子・被害については何も知らず（学校でも教えていなかったはず）、見つけたその冊子を興味深く読んだものです。すっかり覚えていたもんですね。

私自身、石狩で生まれ育ち、中でも幼少期を過ごした本町地区・八幡地区での思い出は、記憶に強く残っています。今は立入禁止となっているあそびうち近くの「石狩展望台」（みなさん、わかりますか？）は、日が暮れるまで遊んだ場所。石狩川堤防の造成に伴って集団移転した「旧八幡市街地」の形跡（今でも建物の基礎が残っているはず）を年長の友達に教えてもらった学びのフィールド。

また、母校の小学校は取り壊され、今は住宅街になっていますが、冬はグラウンドにスケートリンクを整備して、児童が毎日スケートを滑っていたこと（PTAの皆さんは、さぞ大変だったでしょう）、グラウンドが狭く野球の練習がままならなかったこと（ライト方向は特に）、等、幼少期の暮らしは、すでに「石狩市の歴史の1ページ」かもしれないですね。

私が入会してから早10年ほど、たまたま教育委員会に異動し、会のみなさんと関わる機会の増えたことが入会のきっかけになったかと記憶していますが、今のところ、みなさんの研究熱心さには、まったくついていけず、研究テーマさえも見つかりません。せっかくの活動ですから、幼少期の体験などもふまえ、いずれば、何かを発表し、そして、次の世代に会の取り組みを継承しなくてはなりませんね。

「石狩市郷土研究会」に育てられて

高瀬 たみ

石狩市郷土研究会60周年記念誌に当たり、心からお祝い申し上げます。

石狩町に住むきっかけは、1976（昭和51）年、北海道住宅供給公社より花川北の土地を購入したときです。その時の気持ちは、主人が札幌市職員だったことから、「何も不便な石狩に」という思いがありました。当時は高度成長の折、どんどん物価が上がり、公務員に買えるような100坪近くの土地は、札幌市にはありませんでした。広い土地で子供をのびのび育てたいとの思いから、札幌市民にとっては遠い感覚の石狩町を選びました。

翌年、娘が満一歳になる少し前の7月の暑い日、石狩町に初めて訪れました。新居の上棟式の日でした。

1983年に長男が生まれた頃の花川には、まだまだ周囲に原っぱ・空き地が沢山あり、空がとっても広く感じたものです。

「石狩町（当時）郷土研究会」との出会いには、石狩町住民になって8年目の1985（昭和60）年でした。娘が小学校3年生のとき学校からいただいた社会科副読本の『いしかり』を手にした時です。「広報いしかり」以外読んだことがなく、知っていることといえば、生活に関わる商店・病院・役所・幼稚園・学校・身近な公園くらいでした。商店の遠かったこと、病院はバスで札幌市まで通いました。そのころの気持ちは札幌市民であり、石狩町民という意識が薄かったように思います。

そんな時に娘が持ってきた社会科副読本の『いしかり』は、丸ごと石狩町紹介で、地元を知るきっかけとなりました。読むにつれ「石狩町ってこんなにいい所だった」と教示されました。この本をきっかけに、「もっと、石狩町を知りたい」と早速、同会に入会させていただけ

きました。

そして同会会員ということで、多くの機会が与えられました。市政施行記念事業の一つであります『石狩百話』編集補助委員、『石狩の碑』シリーズの編集委員、公民館事業シニアプラザ「郷土研究クラブ」講師（6年間）、地方紙「ななかまど新聞」等々に石狩町の歴史を長く書かせていただきました。いしかりガイドボランティアの会々員共同執筆のガイドブックの『ぐるっと案内』（社）石狩観光協会発行）は、郷土研究会々員の教え・指導、石狩市教育委員会、石狩市観光課・観光協会の協力の賜物です。この本は「ガイドの普及版」ということで、平成13年初版千冊発行されましたが瞬く間に無くなり、翌14年2版が発行となり総数二千冊が印刷されました。歴史ある本町・八幡町の歴史・自然がポケットサイズで利用できることで、多くの市民の皆様読んでいただきました。

以上、自分の事ばかり述べて申し訳ありません。

以下は、これまで石狩市郷土研究会発行の『いしかり暦』に発表し、掲載していただきましたレポートです。

- 第9号 「聞き書き 女船頭だった頃」 創立35周年記念特集号
- 第12号 「小樽内川集落」 ―小樽市域になった集落―
- 第13号 「子育て観音」 ―生振地域の母子を見守る―
- 第14号 「特別例会 巻物などに見る歴史展」
―了恵寺百年記念宝蔵館所蔵資料より―
- 第15号 「石狩市と巖谷小波」
- 第17号 「感謝をこめて」 創立45周年記念特集号
- 第21号 「石狩市内の屋号」
- 第24号 「開拓者が伝えた神事芸能」 ―石狩市望来獅子舞―
- 第25号 「石狩湾新港で消えた石狩浜の集落」
―小樽内川集落（オタネ浜）と分部超集落（十線浜）―

第27号 「石狩越後盆踊り」―郷土から持ち込んだ盆踊り―

第28号 「石狩越後盆踊りの歌詞」

「濃昼の旧木村番屋から見たニシン漁」

第29号 「石狩湾漁業協同組合にみる近年の石狩市漁業あれこれ」

第31号 「江戸時代、イシカリ・アツタ」

ハママスに足跡を残した医師―

第31号 「俳句のまちいしかり」―石狩市本町地区の句碑巡り―

第32号 「石狩市の民間宗教」(一)

―本町地区の出雲教会と当時の状況―

―生振の後藤家の出雲教会と稲荷社―

第33号 「石狩市の民間宗教」(二) ―石狩市内の稲荷社―

第9号の「聞き書き 女船頭だった頃」は、共同執筆者として初めて名前を掲載して頂きましたが、取材・テープ起こし全て先輩会員の故吉本愛子氏が文書化して下さいました。初めて経験した取材で、ただただ同先輩にくっ付いていただけです。ここで「聞き書き」という、語り手が語る言葉をそのまま文章にする方法を学ばせて頂きました。当時の渡船の運賃、船頭という職業の危険、茨戸川での漁と自然など、そのまま語り手の話し方で見事にまとめられました。自然体で語っていたたく丁寧な取材を初めて同先輩から学びました。

「石狩市内の屋号」(第21号)は、地元の方が屋号で話されるのを聞いていて、「いつかまとめたい」、また「記録してほしい」という要望から取り組みました。文章は屋号について調べ・同じ姓の多い漁村に多いことから本町地区を中心に多くの方々にお聞きしてまとめました。が、まだまだ未完成なものでした。そこに顧問の田中實先生、中島勝久氏、沖本義尚氏、蓮田栄一氏、石橋孝夫氏の先達会員方が気にかけて記録されていたものを、学芸員の石橋孝夫氏が表1〜20まで示し、加筆・訂正し完成させて下さったものです。発行されたとき、皆さん

にご協力いただいた共同発表となり、25頁からなる大作となったことに驚き、本当に有難く嬉しかった発表です。

第29号の「石狩湾漁業協同組合にみる近年の石狩市漁業あれこれ」には、特別な思い出があります。原稿の締め切りが迫った2月初旬、出来上がった原稿の最終確認のために石狩湾漁業組合厚田本所に連絡をした時のことです。2月初旬はニシン漁の最盛期でした。「絶対断られる」と確信に近い思いで電話をすると意外や「来てもいいよ」とのこと。ニシン曇りのその日は、ニシンが群来(くき)て厚田漁港は沸いていました。多忙の最中なのに、本所で長い原稿を快く全て見て校正して下さい、「よし!これでいい!」と一言いつて漁港に向われました。さらに、厚田支所の方が「今、ニシンが群来ているから見ていくといいよ」と声を掛けて下さったのです。しかし、その時の空模様は大雪で風もあり吹雪模様、一人で慣れない危険な海岸線を運転して花川まで帰らなければなりません。先も見えないような吹雪のなか沖に向かう漁師さんたちは大丈夫かなと気遣いながら、無事、八幡町に着いたときの安堵感、そして自宅に着いたときはホッとするやら、あとから「やっぱり見てくればよかった」と思ったものです。ニシンで沸く活気ある厚田の様子を肌で感じる事ができたのは本当に幸せでした。

他に

第12号 「石狩の近代化はどのように進められたか」

―石狩改革―(講演) 君 尹彦氏

第13号 「石狩の近代化はどのように進められたか(続)」

―石狩改革―(続編) 君 尹彦氏

上記の12号と13号の「石狩改革」のお話は、平成10年3月19日に行われた会員の君尹彦先生の例会講演を私(高瀬)がテープをもとに文字化しました。12号は短く文字化したもので、13号は、講演で頂いた

村山家等の多くの資料を、さらに洩れなく加え、二度に亘って君先生に添削いただいたものです。その際、先生自ら加筆・充実させた力作が13号で、「まもなく始まる明治維新に通じる北海道の近代化が幕末の石狩から始まった」の資料を基に紐解かれ、同研究会通信『いしかり暦』に貴重な内容の濃い史料として残りましたので、ここに付け加えさせていただきます。

以上の発表は私個人だけで書けるものでなく、ご縁のあった沢山の市民の皆さま、学芸員の方々のご協力をいただいております。特に顧問の田中實先生には、必ず見て頂き助言・指導を受けております。

私の拙文を読んでいただく為には、無我夢中に取組み必死に調べ、お聞きしたいことをまとめイメージを膨らませてから、多くの方々に取材させていただきました。今でも文章を紐解くと、お世話になった方々、情景が浮かびます。

皆さま、本当にありがとうございます。

思いでを辿れば

今井 光男

何時か志美小学の西岡先生にお逢いした時、「小学校の通学区域と青年団通学区域と違いますよね、どうしてですか」と問われたが、解答することが出来ませんでした。父に聞きますと「それは生徒数の問題で、花畔北六線から北矢臼場迄が志美小学校で後に花畔北一線に変更に成った」と聞かされ、西岡先生に達元先生は自宅訪問の為に地図を作られていました。私は興味津々、「旧道の今井」と呼ばれる意味が理解出来ました。西岡先生は石狩町に「郷土研究会」と云うサークルがあつて「昔の石狩を研究」しているとか。金子仲久さんが会員だから紹介入会してもらつて勉強したらとの案内をもらい、家に古くからある資料の解読することにした。小樽生まれの小樽育ち石狩町花畔北六線の今井の家は母親の実家で、志美小学校は児童疎開校、石狩の歴史を深く知りたく、入会、知っている人と言えば田中先生、中島、金子、船場さんぐら이었다。難しい話題で困難視するのではと思つたが、話を聞くだけでもと思つて入会した。会員の皆さんの話を聞いている内に幼少の頃や青年時代の事と結びついて行くことに興味が沸いて来て、途中半端に成つていた「今井家」の家系図に手を付ける喜びを感じた。引越時でも父が手放さなかつた書籍を開いて益々興味を持って後世に伝えるべき物を作り上げる書き上げることが出来た。これも郷土研究会に入会しなかつたら仕事を続けられなかつただろうと感謝しております。莫大な記録と書類の整理も一生の仕事として続けられるでしょう。これまで生かされた追加の力を支えてくれた郷土研究会に只々感謝するのみです。

お世話になって20年、思いつくままに

小寺 幸一

始めに、私が郷土研究会に入会することになった理由を記しておきます。平成10年3月に教職を退職し無職になったのですが、第2の人生はボランティアでいいから石狩のガイドになりたいと思っていました。平成12年にガイドの養成講座があり、それを受講していしかりガイドボランティアの会に所属し、ガイドとしての第一歩を踏み出したのです。

しかし、石狩市で育ったわけではないので、石狩市についての知識はほとんどありませんでした。ガイドとして試行錯誤の厳しい日々でしたが、そんなとき郷土研究会入会を勧めてくれる人がありました。郷土研究会なら知識の宝庫、ここでも勉強しようと思いい入会したので、平成13(2001)年5月17日の事でした。理解できることは少なかつたのですが、石狩のことを沢山知るためには頑張らなくては、そのうち慣れると、期待して月1回の例会に出席をしていたのです。

石狩市郷土研究会といしかりガイドボランティアの会。似たような二つの組織に所属したのですが、石狩のことを沢山知りたいという願いに直接応えてくれたのはガイドの会でした。「ぐるっと案内」というガイドマニュアルを発行してくれたのです。しかし、その源流(自然分野以外)は郷土研究会だということは何となくわかってきましたので、難解であっても郷土研究会には積極的に参加し、理解すべく努力をしていました。

やがて、私が郷土研究会の例会にレポート発表することになりました。タイトルは「雄冬岬灯台の誕生と消滅」、平成21年5月21日が発表の日です。できることは一生懸命調べ、緊張して発表当日に臨みました。昭和27年9月1日の灯台初点灯の日から、昭和61年10月17日の消灯の日まで約34年間灯台を取り巻く人々を中心に、できるだけ興味

が持てるようにドラマチックに話したつもりでした。皆さんにどの程度理解して頂けたか分かりませんが、終わってホッとしました。これで郷土研究会の一員になったような気がしたのです。

さて、私も郷土研究会に所属して20年になります。初めのころの石狩のことを沢山知りたいという願いは20年がかりで少しはかなえられたと思いますが、現在は意欲が薄くなったことは否めません。年齢的にも限界かなと、半ば諦めの状態にあります。眼前に展開される石狩のことは、広く、深く、無限です。郷土研究会の話題のみならず、通信交通、科学技術の急速な発達により世の中全体が情報過多の状態にある、これらに対処することはとても無理と思うのです。私のボヤキでもあり、半ばホンネでもあります。

私の脳裏に強く焼き付いているレポートがあります。最後にそれを紹介します。

「いしかり暦」第19号に掲載された「北千歳サケ・マス流し網漁めしたき物語」(吉岡玉吉さんのレポート)です。私が感動したのは、次の3点です。

①15歳の少年が、23・85トンの独航船「第五長栄丸」(75馬力 3気筒速度12ノット―22キロ 巡航速度11ノット―20キロ)のスタッフとして、北千島の占守島まで行って「めしたき」として役割を果たした。

②北千島の自然の厳しさ

・5月25日、オホーツク海横断中に猛吹雪に遭遇。

・帰途大しげに遭遇 「うねりは山の如く僚船がうねりの間に入る」と2分ぐらい見えなくなる程の大うねりであった。うねり間隔 100〜150メートル位」(筆者の記録)

③太平洋戦争2年目に入りアメリカ軍の潜水艦が千島列島近海に出没しているとの報もあり、危険と隣り合わせの中での漁であった。

これらは、「サケの町石狩」を支えてきた人々の努力の足跡であります。しかも15歳の少年の体験であり、今日望んでも実現不可能な貴重な体験です。このような姿が後世にも継承・伝承され、石狩のサケ漁が更なる発展を遂げることを願い、ここに紹介させていただいた次第です。

終わりにりましたが、石狩市郷土研究会の更なる発展を祈念致します。

石狩市郷土研究会創立60周年に思う

山内 幸子

知りたがり屋の…

・'09(平成21年) 石狩文芸同好会の仲間でもある釣本氏のおさそいで、手稲郷土史研究会^々で小樽方面へ。

・'09(12/17) 公民館での例会に参加。この日は釣本氏の^々石狩の鉄道計画^々の研究発表

・'10(1月から3月はブランクがあった。まだ入会は考えていなかった。)

・'10(4/15) 総会に出席。名簿に私の名前があった。この日、鈴木トミエさんに出会っている。

・'10(12月まで毎月、欠かさず出席。)

・'11(1/22) 『美食工房・花』での新年会に

それから10年後の'21年まで、2回くらい失念して例会を欠席している。―まるで生徒の如く、学ぶ側である。そんな日々の中でそれがキツカケとなって―神社・狛犬・俳句あんどん・縄文土器・越後盆踊り・望来に伝わる獅子舞・村山家と鮭漁など、どんどんと^々知りたがり屋の私になだれの如く資料という遺産のパワーが迫り来る。―これからも、それはつづく。

・'21 1月も今日で終わり。私は5月で78歳となる。2年後には80歳！―ここ数年前から、自分の過去・げんざい・未来について分析。本当に必要な物・事は何か？を考える時間が出来た。―これは無視するべきではないと感じている。学んだことを、どんな形に表現して行くかどんどん進めて行くべきだと気づいている私だ。

^々知りたがり屋^々で立ち止まってはいけな…

・'21(1/31) 原稿の締め切り日。ギリギリで。

おわりに：

— 近頃は考えているだけで楽しいのは、[〃]狛犬[〃]で作るカレンダー。
楽しくないのは、[〃]風車[〃]。知り得た事をスルーせずに、[〃]知りたがり屋[〃]
の私は短歌に詠^{うた}って、カクニンする。その先をどうするのか？ 妙案が
あつたら教えてほしいものである。— こんなグチを書くなんて、どこ
かズレてる。これが私です。

いしかり 町広報

2月1日発行
発行所 石狩町
兼行 佐藤 茂
兼集 佐藤 茂
兼充 佐藤 茂
印刷所 本間印刷 K.K.
札幌市南一条東五丁目

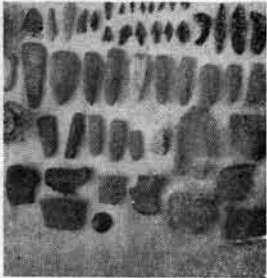
広報・報道にみる郷土研究会の歩み・1
←石狩町郷土研究会結成を呼びかける昭和35年2月の「石狩町広報94号」

石狩町広報

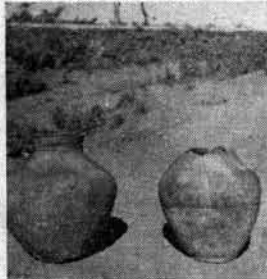
昭和35年2月1日 【6】

第94号

高岡から出土した石器



同上 土器（高さ3.5cm）
推定6,000年前のもの
現在 飯目氏所蔵



線紅葉山から手稲町界にか
社寺や旧家その外いろいろ
けて、或いは高岡地区に数
な方面に往時を知る上貴重

石狩町郷土研究会をつくります

私たちの町の歴史を正しく理解し 明日への指針にしましょう

私達の住む石狩町の歴史、また、遠い昔から色々なケ所、その外にもたくさんは、北海道開拓史の一頁と、時代の移り変わりによって、発見されており昨春秋に北もいえるに、重要な役割幾たびかの困難な境遇を過 大の大地開拓の予備調査をりや占め、古くからの伝統を保持して来た文化財は、それそれ た石器や土器を観察し遺跡と多くの文化財とを持って、現在まで残つておりました。これら 現場も観察され、これら は町民の生活源である 郷土の過去を知る上に貴重 現場には五、六千年に亘つて引続きと共に、憩いの場々でもあ けに、これを正しく理解し から各年代に亘つて引続き 認識し、愛情をもって保護 住居が営まれ、そしてかな 保存につとめ後世に正しく 寄せる親愛感を、本町の郷 残さなければなりません。と考えられると発表されて であることは、云うまでも してどんなものがあるか？ に発掘することが法律で禁 ないことであるが、其いままに判明したことや ぜられておりますので、町 歴史の、風土的、社会的な ことを述べ 教委では今春雪どけを専 環境をよく知り、そして古 五十年程以前にも町内 家を指導するに備へて、町 間が生活していた するのを計画してま ます。その外にも鮭の漁場として、

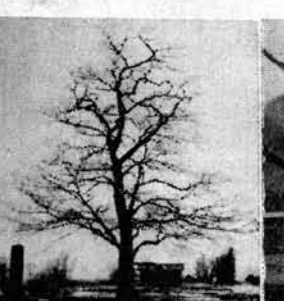
なことがありますが、
また各部落に祖先が入殖し
た当時のことや開拓の状況
なども正しい記録にして関
係の資料などと共に後世に
残したいものです。
さらにあらゆる一般的な関心
を向けられてはおりません
が西浜地区の銭函に至るま
で五里の長きに亘るカシワ
は海岸の純林として本道で
最も代表的であることや、
ハマナスを始め数多くの海
浜植物も他の海岸では、見
られない豊富な植物群落と
であり、私達が今更だに
ついていても、気が付かず
にいたこともよく観察され
ば、非常に興味深く、価値
の大きいことを発見する場
合もあります。

町内には今更だに郷土文化
研究のための正式な組織が
なかつたため田中実、飯目
幸次郎、高木憲一の諸氏が
何年もの間にいろいろな資
料を集め調査をされ、その
分を町の文化祭に発表して
戴いてきました。

石狩町郷土研究会の あらまし

一、会の名称は石狩町郷土
研究会とし事務所は町教委
事務局内におきます。
二、目的としては郷土のあ
らゆる文化財に眼を向けそ
の調査や研究を通じて郷土
町民としての郷土愛をたか
め町発展と道文化の開發に
寄与したい。
三、会の目的を達成するた
めに次のような事業を進め
ます。
文化財の調査と研究、機
関誌や情報交換の連絡紙
発行、研究会展示会の開
催、関係機関との連絡、
その他

この活動を今後は一層伸
張活性化させ石狩町より
よき繁栄に資するため前記
の三氏と町教委では御相談
を致しまして、「石狩町郷
土研究会」を正式に発足し
せ町内多くの入連によつて
次のような「会」としての
活動を行いたいと思ひます
のでどうぞ御賛同の上、多
数御入会下さることを切望
致します。



生振参線の赤ダモ大樹
明治初年に此の木を目
標に踏歩入殖した



八幡神社の手洗鉢
寛政元年作 (210年前)



弁天社（大字弁天町）
元禄7年創立
鰯口は文化11年作

七、会議で決めたいと思ひます
額一〇〇円の経費は会員一人年
他の収入をもつて充たし機
関誌や其の他の印刷費及び
通信費又は資料作成や調査
費等に支出されます。
会の正式発足は三月を予定
しその前に第一次の入会申
込をまともすから二月二十
十日頃までに町教委宛にハ
ガキで申込下さい。
(申込みの様式は町教委へ
宛名は町教育委員会へ
石狩町郷土研究会に入会
申し込み)
昭和三五二年二月 日
住所 石狩町大字
氏名
生年月日

広報・報道にみる郷土研究会の歩み・2
 ←石狩町郷土研究会60周年
 (北海道新聞2020年10月30日)

石狩の歴史、文化伝え60年



60周年記念講演会であいさつする石狩市郷土研究会の村山 耀一会長(右奥)

市郷土研究会

情報共有HPで会誌公開

【石狩】郷土を研究する石狩市郷土研究会は今年、創立60周年を迎えた。市内の郷土研究としては著書に次いで「会誌」に古く、「今年からは会のホームページ(HP)で会誌を電子化して無料公開する」と、研究の蓄積を地域と共有する取り組みを進めている。25日に記念講演会を市内で開催し、会員らが研究への思いを新たにしたい。

（水野可菜）

会誌1960年3月、当時の石狩支庁に務めていた田中実さん(94)を中心に、74人で発足した。現在は月1回の例会で研究発表や学習会を行うほか、研究や学習をまとめた会誌「いしかり」を毎年発行し、地域の行事や農村文化の歴史、季節風呼び方などを収録してきた。

今年1月には会のHPを作成し、80年のいしかり歴史資料を共有でき、新たな関連資料を寄せてもらっている」と喜ぶ。

会員は現在、24、94歳の男女39人。村山耀一(会長、78)によると、研究に没頭する人から、見識を広めたい人まで幅広い人材がいるという。村山会長は「歴史文化の継承と会の存続のため、地域に開かれた活動を進めたい」と話す。

25日は会員や関係者約40人が集まり、北海道研究協議会(札幌)メンバーが講演。来賓の加藤龍幸市長は「会員のさまざまな研究成果や、市民に石狩の歴史が浸透している」と活動たたえた。

石狩の旧・現53校 校歌ウェブに



郷土研究会 4年半かけ収集

【石狩】石狩市郷土研究会(村山耀一会長)は、明治期以降の市内小中高55校のうち、閉校した35校と現存する18校計53校の校歌の記録を集め、市内在住の歌手らに演奏・歌唱してもらって録音した校歌を同会のホームページで公開している。閉校した学校の校歌の記録は、卒業生を訪ねて採譜などして4年半かけて収集した。同会は「多くの人に『心のふるさと』を懐かしんでほしい」と話している。

（水野可菜）

校歌集めは、統廃合が進み、同会内に校歌部会を(明治4年)に本町地区にむ市内の学校の歴史を残す。発足させた。旧石狩小の前開設して以降、市内に記録が残る59校を対象にした。

41校は閉校しており、このうち12校分は歌詞はあっても楽譜が見つからず、会員らが捜索を開始。町内会の回覧板や市広報紙、新聞などで卒業生らに協力を呼び掛け、連絡をくれた人を訪問して、口ずさんでもらったメロディーを楽譜に起こす「採譜」作業を重ねた。

41校のうち、樺太アイヌのために建てられた庁立来札尋常小(1904、06年)など6校は、卒業生らの情報から、校歌がなかったと判断した。

採譜した元音楽教師の高橋たい子さん(64)は「卒業生1人では思い出すのが難しかった」と話す。

校歌集や録音のCDを手にする(左から)高橋たい子さん、土井勝典さん、今野博之さん

記憶の旋律頼りに採譜 オペラ歌手ら歌唱

しくても、同級生らに集まってもらって自然と口を突いてメロディーが出てきた」と振り返る。「校歌は心のふるさと。校舎がなくなっても、校歌さえ残っていれば友だちや先生の顔が思い浮かぶ」と話す。

集めた楽譜は関係者らに演奏・歌唱してもらって録音した。現存する学校は各校の児童・生徒が、閉校分は、市内の元地域おこし協力隊員のオペラ歌手今野博之さん(43)と妻くる美さん(43)が歌唱とピアノを務めた。

校歌の捜索にも協力した今野さんは「協力隊時代に見た市内の風景や人思い浮かべて歌った。歌えて幸せだった」と話す。よみがえった校歌の録音を卒業生に確認してもらって、涙を流す人もいたという。

校歌部会長の土井勝典さん(75)は「校歌には郷土への思いや子どもの成長への願い、教育への希望が込められていると感じた。遠く離れた人も、ホームページで校歌を聴いて懐かしんでほしい」と期待する。

同会は、楽譜と歌詞をまとめた校歌集も作成した。校歌集を希望する人は村山会長(011-333-722・7489)へ。

→石狩町郷土研究会60周年事業の一環として発刊した「校歌集」の紹介
 (北海道新聞2020年11月21日)

特集

まちが人を、人がまちを動かす

文化財を保護する条例ができる前から、遺跡や遺物保存の大切さに気づき、こつこつと活動を積み重ねてきた石狩市郷土研究会。彼らが見つめるまちの姿とは――

「市民として郷土愛を深め、歴史資産の提供を通してまちの発展に寄与したい」



村山耀一会長(中央)と副会長の三島照子さん(右)、事務局長の石黒隆一さん(左)

高岡地区での土器発見がはじまり、石狩市郷土研究会が昨年、創立60年の「還暦」を迎えました。道内に数ある郷土研究会の中でも2番目に古い活動歴を誇る同会ですが、60年前といえば、世帯数1645戸、人口9358人の石狩町時代。その中でどんな方々が、どんなきつかけで会を立ち上げたのでしょうか？ 第5代会長の村山耀一さんに伺いました。

「1959年の秋、高岡地区で土器が発見されました。当時はまた文化財の調査や保護への取り組みが不十分で、専門家に調査を依頼したそうです。そこで石狩の遺跡や遺物を保存することの大切さを強く感じた住民たちが、翌年この会を結成し、活動を始めたことが礎になっています」

創設期の会員数は75人。石狩・志美・花畔・南線・樽川・生振・石狩東・高岡に支部を持ち、まちの遺跡や史跡、開拓資料を調査したといえます。

やがて「石狩町誌」の編集も始まり、会員の中には基礎資料の調査や刊行作業に携わる人も出てきて、個々の活動は活発に。一方で会としての活動は下火になっていきました。そこには当時多く在籍していた農家の方が、農閑期以外の活動は難しかったという背景もあったそうです。

60年のあゆみ

石狩市郷土研究会

- 1960年 創立
- 1961年 遺跡、史跡、開拓資料の調査 (~1979年)
- 1980年 会誌「いしかり暦」創刊号発行
- 1985年 会としての調査活動を開始 石狩空襲の調査 (~87年) 石碑調査 (~2015年)
- 1987年 「石狩の空襲を語りつくす」刊行 「石狩の碑」第一輯 ~ 第五輯刊行 (~2015年)
- 1990年 「いしかり渡船場物語」刊行 (創立30周年記念事業)
- 2002年 「石狩町女性史年表」(1996年~) 「21世紀に伝える写真集」刊行
- 2011年 石狩市郷土研究会が北海道文化財保護功労者表彰を受ける
- 2013年 顧問(第3代会長)の田中實氏が北海道文化財保護功労者表彰を受ける
- 2020年 創立60周年記念式典・講演会を開催 「石狩市小中高等学校校歌集」刊行

石狩市郷土研究会 村山会長 ☎72・7489

会として活動することを最優先に、結成から25年後、個々の活動に加え、「会としての活動も大切にしよう」と会員たちが新たに動き出します。それが石狩空襲の調査でした。

石狩空襲とは、1945年7月にアメリカ軍から受けた空襲のことで、聞き取りを中心に行われた被害の実態調査は、「石狩の空襲を語りつくす」という1冊の本にまとめられています。

同じころ、市内の石碑の調査にも着手し、石狩編をはじめ、2015年までに厚田編、浜益編が刊行されたほか、「石狩川の渡船場に関する資料」「女性史資料」や「歴史写真」の収集などの調査に会として取り組んでいます。

また、個人の研究に対しても新たに発表の場が設けられました。それが会誌「いしかり暦」の発行です。「1980年から30年以上、毎年欠

かさず発行しています。道内では例が無いのでは？ 内容も全道で一番だと思っています」と村山会長も胸を張ります。

こうした長年の活動が認められ、2011年には同会が団体として、2013年には会の創立者の一人であり、顧問を務める田中實氏が北海道文化財保護功労者表彰を受けました。

さらに、創立60周年を記念して「石狩市小中高等学校校歌集」を刊行。学校の統廃合が多い石狩市で、新旧の校歌を収集し、「学校」という視点からまちの変遷を捉えた貴重な資料です。その出来栄に村山会長も声を弾ませ、「同窓会などでこの歌集を使って母校の校歌を思い出して歌っていただければ」と期待します。

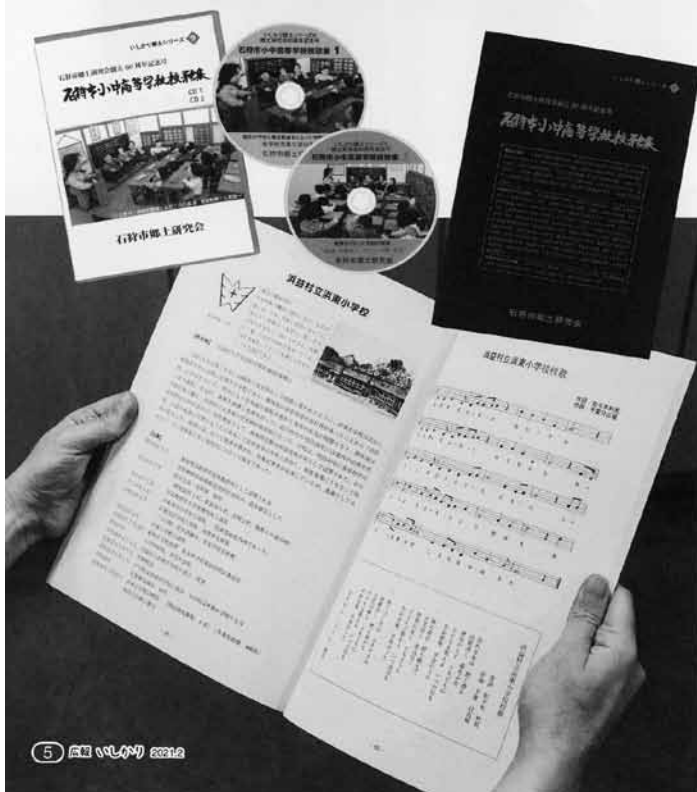
▶毎月第3木曜の例会では、会員がリポートを持ち寄り、みんなで勉強。その成果の一部をまとめたものが年1回発行している「いしかり暦」です。33号まで発行が続く同誌には「村山家文書を読む会」「地図部会」などの部会活動における研究成果も掲載されています



▼いしかり市民カレッジの人気講座「石狩歴史散歩」で講師を務める村山会長。「私たちの日ごろの調査や研究の成果が、市民の皆さんの郷土愛を育むことに役立てば幸いですね」



▲昨年10月には、創立60周年を祝う記念式典と講演会を花川北コミセンで開催しました



▲事務局長の石黒さんが担当する同会HPでは、過去の「いしかり暦」や「村山家文書目録」がデータベース化され、誰でも検索して学べるようになっています



◀「石狩市小中高等学校校歌集」は校歌部会が中心となり4年半の歳月をかけ編んだもの。付属のCDには、在校生の協力を得て録音したものと、統廃合された学校の校歌は、元地域おこし協力隊員でオペラ歌手の今野博之さんが歌ったものを取っています。中には譜面も音源も残っておらず、卒業生を訪ね、その記憶から譜面に起こして再現したというものも！ ※全て同会HPで聴くことができます



研
究
編

魚肉を割いて乾した魚条を須波夜利と訓むのは細枝割（すはえわり）の如くなり。（倭名類聚抄）

水頭（ひず） 鮭の頭部の軟骨。

背腸（せわた・みのわた） 血合いの塩辛。

内子鮭（こごもりさけ） 卵、内臓を取り出した後、卵のみ戻し、濃度の高い塩水につけ干したもの。

並子（なみこ） 不明

鮭子（すじこ） 卵巣を胞衣（えな）のついたまま塩漬けにしたもの。

散子（はららこ） 胞衣を割いて卵を撤したもの。

地元「金大亭」の料理品目は石狩鍋を主にするほか「延喜式」に記載されている「背腸」をアイヌ語のメフンと称する塩辛で、「水頭」は水頭膾（なます）散子（ばらこ）をイクラとして提供している。楚割鮭は文字通り身を裂いた乾鮭で、トバ、アダチ（ツ）寒塩引、内子（いれこ）、腹子は筋子、イクラなどの加工品として、何れも需要は高く、これらは千年を超えて現在に継承され、郷土料理、特産物となっている。無論、時代ごと料理、加工は変化するが、いつの時代にあっても他の魚とは異なる威風と精神性を有し、各地に塚、神社、伝説は多数遺されている。

元禄元年（一六八八年）水戸光圀の命を受け、巨額な費用とリスクを抱えながら、鮭百万尾以上を産する石狩探検に赴いた水戸藩は「鮭外交」の重要性を伝統的に認知していたと考えられる。その因として①大化の改新以降、都へ献上している。幕藩体制下では將軍家へ献上②倭武天皇、弟橘媛の古事から、鮭を重要視していたことを読み取ることが出来る。（常陸国風土記）。③鮭の獲れる川を助（介）川と変えるほど保護した。（鮭の親を「介」と称している）④藩政時代那珂川での一番鮭には二両を、二番鮭は一両二分、三番鮭に一両一分以って褒賞している。⑤種川制度を施行した。⑥鮭の捕獲量が年々減少傾向

の中、家禄を始めとした需要は高く、必要に迫られていた。これらのことなどから、水戸藩は鮭の安定的確保のため、快風丸派遣のハイリスクな事業を実行したのではないかと推察する。元より山丹交易を視野に入っていただろう。

三、延喜式の「鮭」及び由来品の助数詞

ここでは「延喜式」の鮭及び加工品に係る助数詞、「荷」「擔」（たん）、籠、隻、斗、壺缶（もたい）などについて考えてみたい。その頃の助数詞は中国からの仔細な量詞と、上代日本語からなっている。しかし、現代では単位として使用しないものもある。

「荷」量的には分らない。当時納税品の運搬は馬車、船の使用は禁止され、陸路人力のみ許されていた。

「擔」籠に塩や楚割鮭などを入れ、天秤棒の両端に荷を下げ運搬する程度の量。単位として一人の人が担う荷物。（ピクル・重量の単位で一人で担げる重さ。一ピクルは約六十キログ）（数え方の辞典）

「隻」は①鳥一羽②ひとつ③かたわれ④ほんの少し⑤船や車などを数える助数詞⑥動物を数える助数詞「羊千隻」「大字源」角川書店⑥などから鮭一隻は一尾である。「しゃく」と発音するとの説もある。「度」分らないが三度運ぶと読むことも可能ではないか。

「罐」（もたい）酒などの飲み物を入れる腹部の膨らんだ蓋つき土器「麻笥」（おけ）麻製の筒袋「壺」素焼の壺に「水頭一斗」これらの助数詞は名詞自体の形、或は運搬形態などの変化により、意の異なるものへの変化、最も想定しうるのは、消滅することであり、現在では使用されない単位である。ここで時代を跨いで鮭を数える助数詞を挙げてみると「頭」（びき）「匹」尾「本」隻「喉」石（せき）「束」把「石」などをあげることができる。現在「隻」は船を数える助数詞として「せき」と発音されている。上代日本語は「しゃく（尺）」と発音した例

もある。鯛、鯖、鮭、羊、鳥、矢、釘、針、船の助数詞であり、意味も変化したことが分かる。「石」は「こく」として度量衡に使用されるが「せき」と発音し一尾としても使われた。

船の助数詞は多数あり、船、隻、艘、艦、艇、杯、盃、葉、本、帆、床、台などである。

ところで、隻は漢字の成り立ちとして鳥一羽を隻、鳥二羽雙で、雙(双)となり雙の方が大きいと思う。しかしタンカーなどの大型船は「隻」で小型船は「艘」となっている。石狩場所請負村山家文書の勘定帳に「浜大網漁具」として「磯舟大小貳艘 同網船壹艘」と記されている、壇ノ浦での義経八艘飛びは世に知られているように小舟である。

四、むすび

「鮭」は石狩川を擁す本市にとり、市民憲章に「鮭がのぼるまち」と記す特別思いの深い魚である。縄文時代の鮭捕獲遺構が発見され、四千年以上の歴史を辿ることができるまちである。五十年ぶりに「延喜式」を手に「鮭」の文字を探し、石狩市民図書館、いしかり砂丘の風資料館の職員の協力をいただきながらまとめたものである。六十年特集「いしかり暦」に載る機会を得、心より感謝を申し上げますと共に先輩達に敬意を表したい。「六十周年おめでとうございます。」

引用・参考文献

- 飯田朝子 二〇〇四 「数え方の辞典」・小学館
 黒板勝美ほか編 二〇〇〇 新訂国史体系第二六卷 吉川弘文館
 洪沢敬三 一九九二 「式内水産物需給試考」洪沢敬三著作集第一卷 平凡社
 末広恭雄一九八〇「魚と伝説」新潮社

石狩川沿いのアイヌ地名(7)

ハッサム・モリ・シリサム

井口 利夫

はじめに

1. ハッサムについて

幕末以降の発寒川名の変化／発寒川の変遷／アイヌ地名解の系譜・

ハツサフ訛り説への反論／松浦武四郎「ハツシヤフは和語の訛り」

説／松浦武四郎説の疑問点／ハツサフコタンは何処にあったか

2. 「モリ」・「シリサム」について

工藤氏の紹介する「モリ」／モリとシリサム―山田秀三の調査記録

／「モリ」は「山」を意味する古語／「モリ」は古代から鮭漁の拠

点だった／『札幌郡西部図』の「モリ」／「シリサム」について／

「トシリ(創造神の墳墓)」について

あとがき 《余話(1)》・《余話(2)》

はじめに

ハッサム・発寒川については以前にアイヌ地名研究誌¹に発表した

内容を整理し直したものです。発寒川沿いの地名「モリ」については、

工藤義衛氏が『いしかり暦』²で紹介されている。

この「モリ」という和地名について、山田秀三³が昭和60年に紅葉

山まで調査に来ていること、アイヌ地名シリサムに結び付くらしいこ

と、発寒川の支流、軽川のアイヌ地名トシリバオマナイに結び付くら

しいこと、などを例会で紹介した。

例会で発表した時は紅葉山砂丘について不勉強で、ボンヤリとした

知識しか無かったのだが、工藤氏から関連する資料と貴重なコメント

を頂き、古代遺跡との関連も見えてきて、予期以上の大きな広がり

あることが分かってきた。小さな「地名」も記録することの大切さを

改めて教えられた。

1 ハッサムについて

ハッサムという地名は場所などの広域地名にも使われているが、

元々は発寒川を指すアイヌ地名だったらしく、またアイヌコタンの名

でもあったようだ。

19世紀初め(1810年代)に測量された伊能間宮図では「ハサミ

川」で、直接石狩川に注ぐ川として描かれている(図1)。

現在、この付近に流れ込んでいる川の名は伏籠川で、発寒川はその

支流の扱いになっている。

発寒川は明治以来の度重なる河川改修でアイヌ時代の面影をすっ

かり失ってしまった。そのため、アイヌ地名の説明にあたっては、か



図1. 伊能間宮図

1810年代間宮林蔵の測量(一部改変)。

石狩川に直接注ぐ川「ハサミ川」として描かれている。

つての川の姿を振り返っておかないと、何処のことを説明しているのか理解できない。

幕末以降の発寒川名の変化

かつては、川口辺りにはパラトと呼ばれる沼と湿地帯があったが、この地名を流用したと思われるワラト・茨戸太の表記が現れるのは幕末に到ってからのようである。

幕末から明治初年にかけては、和人の移入による漁場の拡大もあって、川名・地名・漁場名にこのパラトが川名相当の地名として多用されるようになる。漢字での地名の表記が多用されるようになってからの発寒川の川名の表記は様々である。

この中で、これまでのハツサフに代わって、明治5、6(1872、3)年を境にしてハツサム川・ハツサム・ハツシャム・発寒村の表記が現れる。この時期は、松浦武四郎の「西蝦夷日誌」第五編が刊行された明治4(1871)年の少し後に当る。

なお、明治初年までを調べた限りでは永田方正の採録したハチャムベツ(後出)とペツのつく例は皆無だったし、別項に採録されているハチャムパラトの形もなかった⁴。

創成川が開削されて、川口の位置が変わってから発寒川は創成川へ注ぐ支流の扱いになった。

明治20年代の地形図に発寒川に茨戸川と表記する例が出てくるが、これは道庁地理課の地形図の影響らしく、道庁20万図・陸測輯製20万図・同仮製5万図に共通する。陸測図ではT5測図(後出図3)で発寒川に改まっている。

現在ではこの川口に発寒川・創成川・伏籠川の3川が流入し、前述のとおり川口部の川名は伏籠川で、発寒川はその支流の扱いである。

発寒川の変遷

川筋の大きな変化は明治時代に入ってからで、一帯の湿原の排

水のための新川の開削によって、中流部から上流の部分を直接石狩湾へ流すようにしたことによる。

「新川」の開削によって上流部を新川水系に取って代わられる以前の、元々の発寒川の源流部は手稲山の南側まで遡り、奥手稲山付近が水源になっている(現在は新川の水源。図2)。アイヌ風に云えば手稲山か奥手稲山がハツサフエトコ(発寒川の・水源)と呼ばれ、和人風に云えば「発寒岳」と呼ばれてもよいだけの、この附近ではかなりの大きな川だった。

ハツサフの下流部は「新川」のように砂丘帯を突き抜けることなく、紅葉山砂丘に行く手を遮られて、同様に砂丘に沿って下ってきたポン



図2. 発寒川(旧ハツサフペツ)流域図

山田秀三(1965・1984)附図を改変。

山田はハッチャムベツと書くが、ハツサフと改めた。

ハツサフ（追分川）と「モリ」附近で合流して、砂丘沿いに石狩川の方へ流れ下っていた。

排水のため上流が新川によって石狩湾へ流されて、すっかり水量が減る以前は、ハツサフ本流部は湿地帯（札幌市側）を流れていたが、明治末頃には既に涸れ川となったようで、T5測図（後出図3）でも一部しか残っていない。現在では全く痕跡が無くなってしまった。またポンハツサフ（追分川）の方はT5測図ではまだ残っているように見えるが、現在では両側の遊歩道は整備されつつあるが、水の涸れたただの溝にしか見えない部分も多くなった。

アイヌ地名解の系譜

大きな川の例に漏れず、発寒川のアイヌ地名についても、その語源ははっきりしない。

山田秀三の『札幌のアイヌ地名を尋ねて』（1965）では松浦武四郎の刊本『後志羊蹄日誌』の記事と永田地名解を引いて、ハツサブはハチャム（桜鳥）が訛った、との説に従っているが、同時に江戸時代から明治初年の諸資料がハツサブだったことも紹介している。

その後の『北海道の地名』（1984）では「北海道内のところどころの地名に桜鳥が出て来るので」⁵と桜鳥説をとっている。

ハツサム訛り説への反論

山田秀三が地名解の根拠として挙げている永田地名解では、「ハチャムペツ」として「茨戸川筋」に採られている。

ハチャムペツ 櫻鳥川 櫻鳥多シ故二名ク松前氏ノ時「ハツサブ」ト訛リ石狩十三場所ノ一タリ今
ブト訛リ石狩十三場所ノ一タリ今
ハツサブ
發寒村ト稱ス

永田方正は「松前氏の時……訛り」と書いているので、古記録から地名の変化を調べてみたが、初見と思われる寛文10（1670）年の記録では、アイヌの集落名として既に「はつしやふ」だった。以来、文化年

間までの約20例は、はつしやふ・ハツサブ川・ハツシヤブ場所・ハツサフ川などで、表記はほぼ変わっていない。

この間の唯一の例外が伊能間宮図のハサミ川・ハサミ、同じ間宮林蔵の作製と推定される「北海道実測図」⁶、のハサミ川・ホンハサミ川・イビシヨマハサミ、及びこの一系統の「ハサミ」の表記である。

松浦武四郎「ハツシヤフは和語の訛り」説

山田秀三（1965）は松浦武四郎の刊本『後志羊蹄日誌』から引用しているが、ハチャム＝桜鳥説は安政4（1857）年の「丁巳日誌」が初見らしい。松浦武四郎の記述の流れを少し詳しく見ておく。（傍線は引用者）

「丁巳日誌」安政4（1857）年5月4日の記事

「字ハツシヤフは則ハチャムの訛りなるとかや。此地ハチャムと云鳥多き地なるによつて号るなり。其鳥は桜鳥に似て奇麗なる小鳥の由なり。この鳥余中川にて夜聞く事あり」

続いて5月20日ヲフイチャシフトでの記事

「夜に入、又此辺には上川すじにて聞かざるアチャシと云鳥居たり。其声チヨヒンタタヒイヨタタと鳴なり」⁷

「戊午日誌」安政5（1858）年6月18日に同様の記事

「ハツシヤブ……ハツシヤフは和語の訛りにして、土人は呼ぶ時はハツチャムと云也。ハツチャムは桜鳥の如き小鳥の事なりと。此川すじ其鳥多きによつて号るとかや。……」

刊本「後志羊蹄日誌」（1861）（山田秀三の引用記事に同じ）

「ハツシヤム（土人は）本名ハシヤムと云。桜鳥の如き鳥多きより号るとかや。……」⁸

松浦武四郎説の疑問点

右に紹介した記事（二重傍線の記事参照）に見る通り、松浦武四郎は桜鳥の実物を見ていないように思われる。

これまでよく引用されて来た戊午日誌にあった「和語の訛り」という

表現は後年の刊本ではなくなっていることがわかる。

また原名とされるアイヌ地名の表記についても、松浦文献中では

丁巳¹¹ハチャム（手控はハチャヌ・ハチャム）、戊午¹²ハツチャム、
後志羊蹄¹³ハシヤム、西蝦夷¹⁴ハチャム

のように揺れがあることに気付く。

以上みてきたように、松浦武四郎の「ハチャムの訛り」説には気になることがあるが、その他にも気になることがある。

①松浦武四郎は乙名コモンタ（四十七才）から話を聞いているのだが、そのコモンタについて

「此者等は元中川イシヤン（秋葉注¹⁵「一巳」）の者のよし」

と書いている（「一巳」は現在の深川市の一部）。つまり、コモンタは古くからの居住者ではなく、文化年間の疱瘡の流行後にイシカリへ移ってきた者の子孫か、とも思われる。コモンタが過去のいきさつをどの程度伝承しているのか疑問がある。

②ハツシヤフ川筋の7つの支流のアイヌ地名を見ると、

・ホンハツシヤフ ・フシコハツシヤフ（以上丁巳日誌）

・ホンハツシヤブ ・エヒシヨハツシヤフ ・ルウトラシハツシヤフ

・シヤマツケハツシヤフ ・シイハツシヤフ（以上戊午日誌）

和人の立ち入らないような最上流まで含めて、全て松浦武四郎が古形とする「ハチャム」ではない。

和人が知らないであろう奥深い支流の名まで、和人の訛りの地名に置き換わるようなことがあるだろうか？ アイヌの間で代々語り伝えられている内に訛ってしまったのだろうか？ もしかしたら、元々の地名もこうだったのではないだろうか？

以上、少なくとも戊午日誌にある「和語の訛り」とは言い切れないと思われる。

ハツサブコタンは何処にあったか

松浦説によれば、ハサミという川名は古いコタン付近の地名に由来す

ることになるが、そのコタンはとも川口付近ではなくずっと上流だったように思われる。

幕末から明治初年にかけてのハツサブのアイヌ集落があった場所、つまり松浦武四郎が聞いた椋鳥が多い「この辺り」というコタンは、現在のJR琴似駅の北方500mくらいの発寒川沿いにあたる。

明治6年実測の『発寒村地図』には耕地にアイヌ人4人分の名があり、その中に小文太（個人情報につき姓を略す）という名がある。丁巳日誌で松浦武四郎が会った乙名コモンタと同一人物とすれば、明治6年には63才だったはずである。

永田方正の地名調査は明治22（1889）年だから、松浦武四郎の調査から30年位後のことだ（コモンタ存命なら79歳）、情報提供者は共通していた可能性はある。

原地名の場所が判らなければ語源解釈も簡単にはゆかないだろうが、山田秀三は知里真志保の試案として *hatgan*（山葡萄の・傍）、自らの試案として *hasan*（灌木の・傍）を紹介している（山田1965・1984）。いずれもハチャムを念頭に置いている。

残念ながら山田秀三は「ハツサフ」の語源解釈をしていない。その後も語源解釈に言及する者がいるが¹⁶、元々のアイヌ地名の形が不明なこと、発祥の地が不明なことから、いずれも単なる思い付きにしかならないことは言うまでもあるまい。

いろいろと疑問の多い地名ながら、若しもハチャム説が正しかったとしたら、間宮林蔵の採録した「ハサミ」は極めて貴重な記録ということになるのだが、果してどうか。

2 「モリ」・「シッサム」について

石狩市の旧石狩町の範囲は海岸線の変化が少ないことや河川が少ないことから、アイヌ地名はほとんど石狩川沿いに限られていて永田

地名解でも、アイヌ地名の採録の少ない地域である。

発寒川沿いのアイヌ地名としては、石狩町誌のアイヌ語地名地図に唯一「シリサム」が採られているが、地名解の項には載っていない。

工藤氏の紹介する「モリ」

北海道仮製五万図には発寒川沿いの下流部で唯一、ポツンと「モリ」と書かれている。前述のように工藤義衛氏が『いしかり暦』に「地図にあつて忘れられる地名があること」として、この「モリ」について紹介している。

工藤氏によれば、「モリ」の位置は現在の花川南公園あたりで、

『北海道開拓使事業報告』の山林の項に明治八年ころ開拓使が設置していた三等官林として『発寒川字「モリ」辺ヨリ西北平林」と見え……(※……は引用者の省略を示す。以下同)

明治三十年の『札幌沿革史』でも「発寒川は(中略)北流し、字モリに至りて手稲川(一名追分川)を合せ茨戸川となりて石狩川に入る。

と、官報に載つたれつきとした「地名」で、「このころにはキチンと地名として使用されていた」という。また「大正五年の五万分一図には見られなくなっている」が、それは、

「モリ」は発寒川と追分川の合流点だったので、新川の開削により発寒川の下流が干上がって衰えたと推測がつくが、もともと松浦武四郎など江戸時代の記録にも全く見られない。……明治時代のほんの短い期間だけ使われた地名であつた。

とされる。「モリ」について調べてみると、工藤氏の挙げた例より2年早い明治6年の『札幌郡西部図』¹²にも「モリ」がある。五万分一図では明治42年の修正測図では無くなつていて、代りに「紅葉山」が現れる。工藤氏の指摘より更に短い期間しか使われていなかった地名だった

らしい。

モリとシリサム―山田秀三の調査記録

工藤氏は松浦武四郎時代のことにも言及しているが、この点については、山田秀三が未刊の調査ファイル『発寒川筋の諸川の名』¹³で取り上げている。

山田秀三はこの中で、「モリ」とアイヌ地名の「シリサム」を結びつける興味深い指摘をしている。まず「モリ」の近くで合流している支流の軽川には「いろいろの名があつた」として、永田地名解から①②③の3例、松浦武四郎戊午新道日誌から④の1例、

- ①カルガワ：原名「トシリパオマナイ」今「ガルガワ」と云：
- ②マサラパオマナイ：(山田訳「海岸草原の・かみて・にある・川」)
- ③トシリパオマナイ 墳頭川 アイヌはコタンカラカムイ(國作神)

の墳墓なりと云ひ傳ふよし 小圓丘にして栗樹其上に生す 和人これをモリと云ふ 土を盛り上げたたる如き形状なればなり (山田訳「墳墓の・かみて・にある・川」)

④ホンシユルクアマナイ(山田訳「小さい・とりかぶと・ある・川」) 計4つのアイヌ地名の別称を上げている(傍線「引用者」)。これに続く「シリサマ・モリ(和名)」の項で

〈石狩場所絵図〉 発寒本流とポンハツシヤフの合流点に「シリサマ」と記す

shir-sam (山の・傍ら)ならん。

砂丘の中の目立つ山の下の処のことだろう

〈札幌郡西部図〉は同じ場所に「モリ」と記す

東北人は盛上つたような山や丘を「もり」という、それならん。

〈永田地名解〉小円丘にして栗樹その上に生ず。

アイヌはコタン・カラ・カムイの墳墓なりと云ひ伝ふ

トシリ・パ・オマナイ(軽川)のトゥシリ tushir (墓)はこの

丘であるとの説。

それなら今の軽川から、この合流点迄をトウシリパオマナイと呼んだものか。

と、モリ〜シリサム〜トウシリパオマナイの3つの地名が関連することに言及している。

「モリ」は「山」を意味する古語

山田秀三は〈札幌郡西部図〉の「モリ」について「東北人は…」と書いているが、「山」と「モリ」については、『霊山と日本人』¹⁴によると、

……東北や四国などでは標高一〇〇〇メートル以上はかなり高い山も森と呼んでいる……森と山が同義に用いられているのである。……『万葉集』では、「森」「杜」「神社」のいずれも「モリ」で訓ませている。……このように古来日本では、森や山は神のいます所あるいはカミの世界と里との境界、ひいては両者をとりもつ聖なる場所とされてきたのである。

とある。なお、鏡味完二の『地名研究』によれば、山名の語尾について「語尾「森」は547(5.3パーセント)」あり、「東北・四国西部・紀伊・甲信地方に分布」するという。

山田秀三が「もり」について「東北人は…」と書いたのは、永田地名解に「和人之を…」とあるのを意識していることかもしれないが、永田方正が「和人之を…」と書いているのは、東北以外にも用例があることを知っていること¹⁵かもしれない。

T5測図以来古い地形図で「紅葉山」と書かれていた場所は、「モリ」と紅葉山三角点の間あたりで、その近くに紅葉山了恵寺がある。鈞本氏の案内で訪れた三角点附近の丘陵も此所も栗樹が多く落果している。永田地名解の「小円丘にして栗樹その上に生ず」を現在でも髣髴とさせる景だった。

「モリ」は古代から鮭漁の拠点だった

下流の紅葉山49号遺跡は縄紋のウライが発見された遺跡として砂丘の風資料館にジオラマまであってはよく知られているが、「モリ」附近では、札幌市K483遺跡からは近世の紅葉山52号遺跡からも縄紋期と中世のウライ跡が重複¹⁶して発掘されている。

「モリ」はハチャム(発寒川本流)とポンハチャム(軽川〜手稻諸川)が分岐する手前の場所だから、ウライを掛けるには最適の場所で、古来継続的に鮭漁の施設があつて不思議はない。江戸時代にも場所は不明ながら、ハッサムにウライがあつたことは諸記録にあるから、当然ここがその最有力の場所である。

鮭漁もでき、山の恵みも多い南向きの丘陵の川沿いの地といえ、古来、人の住まないわけがない。アイヌ地名のシリサムが此処のことだったとして不思議はない。

『札幌郡西部図』の「モリ」

『札幌郡西部図』の原図(松本・河野旧蔵・道立図書館蔵)¹⁷には、

・「モリ」の下に 「朱点」が2つ

・「モリ」の脇に不鮮明ながら 「土人二」

という北大写図には無い注目すべき記事がある。

添えられた記事からして、この朱点はアイヌの居小屋か漁小屋を示しているはずで¹⁸、「モリ」はこのアイヌコタンのある場所の地名だったらしい。

居住者が居たからこそ地図上に地名が記録され、その後アイヌ人がいなくなつて、明治末年に到つて地図上から地名が消えた、という経緯が想像できる。

「シリサム」について

山田秀三は前掲のように『石狩場所絵図』に「シリサマ」などとして旧記に見えることを紹介している。山田秀三の例示する絵図は恐らく安政期の江差沖ノ口備付の『西蝦夷地石狩場所絵図』かと思われる。

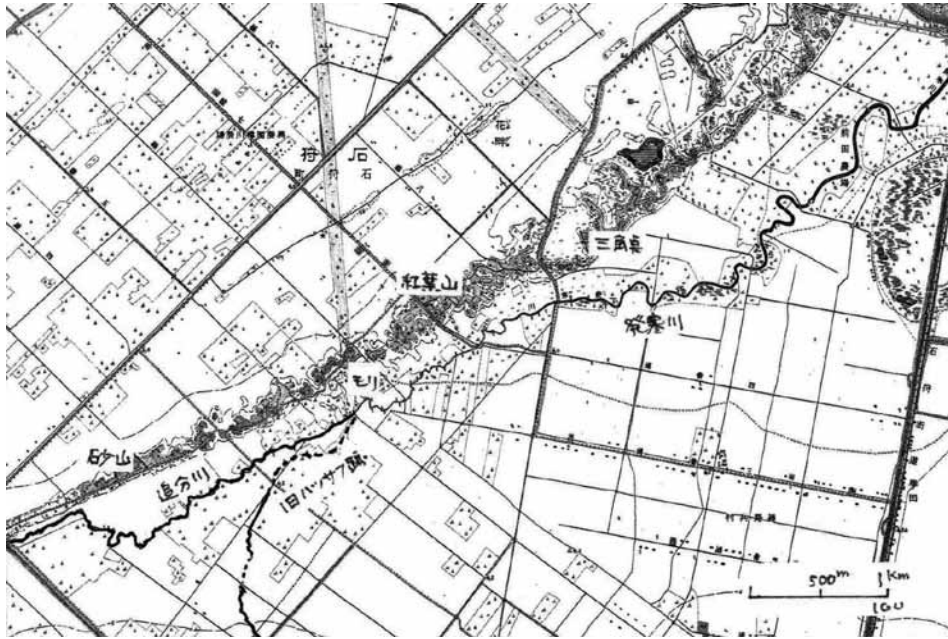


図3. T5測図「茂戸」(一部改変)

(砂丘の+7.5 mに淡ボカシ入れ。旧ハッタサフ川跡の一部を補筆)

左下の「砂山」地区から、砂丘上を上り下りする道が続いていること

古くは文化5(1868)年の秦 櫛丸『蝦夷地絵図』¹⁹にハッタサフ川と思われる川沿いに「シリシヤム」がある。

江戸時代の地図では「シリサム」の位置はややあいまいだが、当然アイヌの生活と関係のある地名のはずだから、山田秀三が「モリ」と「シリサム」とは同じ場所と書いてるように、それが明治期になっ

て「モリ」と呼び替えられたことは十分に考えられる。

削平される前の紅葉山砂丘帯南部の状況については、「すなやま」の石田さんのおばあさんが「ここへ来た頃(60年前)は、(砂丘上の)道を上り下りして歩いた」と言っている。T5測図(図3)でも砂丘上を路が上り下りしているのがよく分かる。「紅葉山砂丘は連続した大きな砂丘ではなく、比較的小さな砂丘、いわば「モリ」地形の集合体である点の特徴です。」と工藤氏が説明して下さった状況だった。そのいくつかもある「モリ」地形の中でも目立つ処が国造神の「トゥシリ(墳墓)」と見られたのであろうか。

アイヌ語としては、紅葉山砂丘なら何処でも「シリ」になるから、紅葉山砂丘沿いの土地なら何処でも「シリサム」となってしまい、これでは地名の意味をなさない。したがって、山田秀三も「シリサム」について「砂丘の中の目立つ山の下の方のことだろう」と書いているのだが、「目立つ山」とは何処かということになる。

「ドシリパオマナイ」について、前出のとおり山田秀三は永田方正の地名解について

トシリ・パ・オマナイ(軽川)のトゥシリ{ fushir(墓)はこの丘であるとの説。

それなら今の軽川から、この合流点迄をトゥシリパオマナイと呼んだものか。

と書いている。

トゥシリパオマナイ(軽川=追分川)の分岐点は丁度「モリ」の付近である。地名解をトゥシリ(墳墓)・パ(の上手)・オマ(にある)・ナイ(川)とすれば、「トゥシリ」はこの「モリ」の付近の丘陵を指していることになる。つまり、「シリサム」の「シリ」がこの伝承の地の「トゥシリ」を表していると考えれば、「シリサム」を「トゥシリ」の傍の意味と採ることができる。

この伝承ゆかりの地「シリサム」が和人によって「モリ」と改称さ

れたという想定もあながち的外れとはいえない。

「トシリ（創造神の墳墓）」について

永田地名解には「小円丘にして栗樹その上に生ず。……」と地形とその風景についてかなり具体的な表現をしていることに気付く。

「モリ」ではありません、トウシッ（墳墓）です

と、案内のアイヌ古老がその場所を指し示した情景をまざまざと想像させる文章である。永田方正が現地調査をした明治22年7月当時はアイヌ古老が伝承の地を指示できる状態だったのではあるまいか。

紅葉山砂丘に古代の墳墓でもあったのだろうか？

この点について、工藤氏の御意見を伺ったところ、「与太噺ですが」と断って、次のような考えを示された。

地図上で「モリ」とされている場所は現在の花川南公園付近にあたり、この場所には、続縄文時代の墓地遺跡である紅葉山33号遺跡がある。33号遺跡からは漆塗りの弓や道内では珍しい管玉が発見されている。あるいはこうしたものを見たアイヌが「トシリ（墳墓）」と言ったのかもしれない。しかし、道内に大規模な墓地遺跡はたくさんあるし、大量の土器石器が見つかる遺跡も珍しくない。だが「トシリ」と呼ばれている遺跡は知らない。単にお墓や土器石器がたくさんあるだけでアイヌは創造神の墓と結び付けたのだろうか。それ以上の「何か」があったのではないか。

紅葉山砂丘からは、5世紀ころの古墳文化との関連を示す遺物（石製模造品・石製の刀子²⁰）が発見されている（野村論文）。紅葉山砂丘上の遺跡はその多くが発掘される前に住宅造成などで破壊されており、想像でしかないが、江別や恵庭で調査されている「北海道式古墳」のようなものがあつたらどうだろう。自然の砂丘だと思っていたものが実は円く人工的に盛られた砂山（まさに「モリ」だ）であることに気が付いたら。そしてその中央の木棺

から蔵手刀や帯を飾った金具や須恵器などを発見したとすればどうだろう。アイヌは自分たちが思いもよらない巨大な墓の中から見たことのない形の刀や金属の飾りや陶器を発見して、伝説に結び付けた可能性はないだろうか。

工藤氏は考古学のプロであるから「与太噺」と謙遜するが、筆者のような素人には相当に根拠のある「仮説」に感じられる。これを作業仮説として関連史料を改めて点検すれば、隠れた歴史のミッシングリングが出てくるかもしれない²¹。

この小さな地名「モリ」が石狩市の忘れられた「歴史」をよみがえらせてくれるかもしれない。

トウシッパオマナイのトウシッ（墳墓）についてのイメージがふくらんでくる。工藤氏が8年前に紹介された地名「モリ」が、その謎解きの入口の扉を開く鍵だったようだ。奥深い物語がその扉の先にあるかもしれないが、残念ながら老生にはもう追いきれそうもない。

あとがき

はじめに書いたように「ハッサム」については既に発表したことがあるが、「モリ」については初めて採り上げたテーマで、例会で皆さんから教えて頂くつもりで、まだ現地を踏んでいなかった。

工藤氏からは例会で貴重なコメントを頂いた上に、その後も助言や関連する史料を頂いた。

また幸いなことに、例会後に釣本会員が紅葉山砂丘を案内して下さった。紅葉山三角点のある自衛隊基地の近くにお住まいとかで、現地の事情に詳しく、発寒川沿いの遺跡発掘場所をはじめ、手稲区の砂山地区の「すなやま」まで案内して頂き、石田さんのご家族から貴重なお話を聞くことができた。

おかげで、縄紋からアイヌまで続くこの土地の人々の生活の姿や、

今は半ば失われてしまった紅葉山砂丘の在りし日の姿も想像できる
ようになり、例会では未消化だった「モリ」についての材料も結びつ
いて、予想以上に興味深い姿が現われてきたのだった。

このお二方の御厚意が無ければ、本報は形を成さなかった。末筆な
がら記して感謝の意を表します。

《余話(1) 「モリ」＝アイヌ語説があったこと》

「モリ」が東北地方で「山」の別称であることは山田秀三の著作で
知っていたので、永田方正の地名解の説明もそれほど違和感なく読め
た。ところが、明治時代のアイヌ語辞典²²に、「モリ 小山」と「モ
リ」をアイヌ語として採録しているので驚いた。

永田地名解が出た当時「モリ」をアイヌ語とする説があつて、その
ために永田方正はわざわざ「和人の訛ナリ」と書いたのかと思われた。
念のためバチラーの辞書(1989)²³を見ると、「Mori モリ 小山
……」とある。さてはバチラーが発端かと思つたが、永田地名解より前
に出た初版²⁴には「モリ」は採録されていなかった。

永田地名解の出版(明治24年)以前に「モリ」をアイヌ語とする説
があつたのかどうか、今のところ不祥。

《余話(2) コタンカラカムイとコタンコロカムイ》

よく注意しないと聞き間違いやすが、「カラ」と「コロ」では意味
がゴロツと違ってしまふ。

コタンカラカムイ(一)の世を造つた神²⁵

巨大な神様(創世神、処によってはオキク
ルミ、奥地ではサマイクル)²⁶

コタンコロカムイ(村を領有する神。①フクロウ神。②神の村で
の村おさの神。)²⁷

民話などでは「フクロウ神」として出てく

ることが多いようだ。

《参考文献》

- 飯島矩道・船越長善(1873)『札幌郡西部圖』松本十郎・河野常吉旧蔵。
北海道立図書館蔵・(写)北海道大学附属図書館蔵
- 井口利夫(2008)『伊能間宮蝦夷図の石狩く勇払横断線の地名(1)』『アイヌ語地名研究』11 P 43～64 アイヌ語地名研究会
- 石狩市教育委員会(2009)『石狩市紅葉山52号遺跡』札幌市K483遺跡
発掘調査報告書』石狩市教育委員会
- 工藤義衛(2013)『石狩浜の「鯨」と「塚」をめぐって』『いしかり暦』
第26号 石狩市郷土研究会 p50～p59
- 永田方正(1891・1984)『北海道蝦夷語地名解』北海道庁・初版復刻
＝草風館
- 高倉新一郎(1935・1980)『パンナングルものがたり―能登西雄談話
聞書―』『北海道社会事業』・『新版 郷土と開拓』p135～156
北海道出版企画センター
- 野村 崇(1993)『北海道出土の石製模造品に関するノート』『吉崎晶
一先生還暦記念論集』P 135～140 同刊行会
- 秦 櫛丸(村上島之允・1908／文化5)『蝦夷嶋地図』京都大学総合
博物館蔵。
- 北海道史編(1911)『袖珍 北海道土人語案内 附北海道地名畧解』
小嶋大盛堂
- 宮家 準(2004・2016)『霊山と日本人』日本放送出版協会・講談社
学術文庫
- 山田秀三(1963・1983)『札幌のアイヌ地名を尋ねて』楡書房・『アイ
ヌ語地名の研究』3 (P 10～145) 草風館
- 山田秀三(1984・2000)『北海道の地名』北海道新聞社・(復刻)草風館
- 山田秀三(1985)『YFO046 発寒川筋・手稲60』北海道博物館

- 1 井口利夫 (2008)。以下「ハッサム」部分はそれを大幅に書き変えたものである。
- 2 工藤義衛 (2013)
- 3 山田秀三 (1985)
- 4 永田方正 (1991)
- 5 山田秀三は「桜鳥」説を採る地名の例を挙げていないが、管見ながら、厚沢部町(上原熊次郎説。山田秀三1984)、栗山町ハサンベツ川(池田実1996「夕張郡史料 夕張日誌」『白鳥の道・日の出の国へ』)がある。
- 6 国立公文書館蔵(以下「河川図」、同じく間宮林藏の調査資料を参考にしたと思われる『蝦夷全図』(高橋景保カ。文政期。国会図書館蔵)がある。
- 7 この記事のもとになったと思われる野帳『手控巳第五番』には「○ハチャヌまたはハチャムとも云り。桜鳥に似たる小鳥なり。此鳥多きによつて号り」とある。
- 8 刊本『西蝦夷日誌 第五編』(明治4刊)の方には、戊午6月18日の記録として「ハツシヤブ〔発寒〕……本名ハチャムといふ。此地に桜鳥に似たる鳥多き故に号く、其音チヨピンタ々ヒイヨ々々と鳴なり。……」とあり、後半には、『丁巳日誌』の別地点の記事を流用して興を添えている。
- 9 高畑利宜・大島新兵衛(1974)『発寒村地図』北海道大学附属図書館蔵。
- 10 例えば、榊原博文『アイヌ語地名データベース 石狩I』では川口の地名として紅葉山砂丘を地名解の根拠としているが、何故川口の地名とするのか、その理由を示していない。
- 11 シリサム。アイヌ語ではsir-samを「シリサム」と表記するが、
- 12 本論では常用の地名や引用文の用語では「シリサム」のままとしている。
- 13 飯島矩道・船越長善(1873)。
- 14 山田秀三(1985)
- 15 宮家 準(2004・2016)『霊山と日本人』日本放送出版協会・講談社学術文庫
- 16 永田方正は伊予西条藩士の江戸藩邸生まれという。
- 17 高倉新一郎は『札幌の歴史』⑫で江戸時代のウライという想定で紹介しているが、発掘報告書(石狩市教育委員会2009)では縄紋期と中世の杭列の遺物が重複している、としている。
- 18 山田秀三が引用している『札幌郡西部図』は北大附属図書館蔵の写図の方らしく、これとは別に道立図書館蔵にその原図と思われる図があり、松本十郎から河野常吉へ譲られた来歴を示すメモがある。道立図書館蔵の松本・河野旧蔵の原図の方を山田秀三が見ていたら、もっと洞察の内容を広げていたことだろう。
- 19 他所にも同様の「土人七戸」「土人一戸」「土人五戸」のような記事がある。
- 20 秦 楳丸(村上島之允・1908)。北海道大学附属図書館には文化13年の村山直之の写図がある。
- 21 石製模造品 全長7.3cm 滑石製 皮製の鞘に入った鉄刀子を模した所謂「石製刀子」。西暦5世紀代。古墳文化の北海道への影響をものがたるもの。所蔵者は高木憲了氏で平成4(1992)年入手(発見はその2年前)。出土地は紅葉山砂丘東南端の丘陵線、海拔約4〜7mの標高。紅葉山51遺跡。
- 22 「能登西雄談話聞書」高倉新一郎(1935)には「……軽川の奥にツィシリ山があり、温泉のあたりから流れて来る川ツィシリポーオマナイの水源だが、ここには偉い人が死んで葬った所と伝えられている。……オタシユツウンクルは銭函の人……ツィシリに葬られ

- た英雄というのもこの人かも知れない。……」とあり、地名解は不明ながら、川筋としては全く逆の水源の山が想定されている。
- 22 北海道史編(910)『袖珍 北海道土人語案内 附北海道地名畧解』小嶋大盛堂
- 23 バチラー、ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典 第四版』岩波書店
- 24 初版(明治22年・1889)は北海道庁刊『蝦和英三對辭書』で、これには「モリ」の採録無し。
- 25 知里真志保・山田秀三(1958)「幌別町のアイヌ語地名」『北方文化研究報告 第十三輯』P1～33 北海道大学北方文化研究室(オソルコチの項)。
- 26 山田秀三(1984)。
- 27 田村すす子(1996・1998) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館・再版

北海道に移住または足跡を残した米沢地方の人々

千喜良 誠

一. はじめに

二〇一五年一月に千葉県船橋市から石狩に移住して以来、石狩の美しい自然や独特の歴史にふれる機会を得るばかりでなく、石狩の人々に暖かく受け入れてきていただきましたが、二〇二〇年八月の郷土研究会例会で表記のようなテーマで発表するきっかけとなったのは、「石狩ファイル」^{〔文献〕}に左記のような記述があったことでした。

石狩の開拓の歴史 〇〇一四・〇一(二〇〇四年七月一日)

石狩の各地には、それぞれ、最初に次のような人たちが入植しました。

■生振村 明治四年五月、宮城県宮城郡から二九戸一二四名(引率者：米沢藩士玉木琢蔵)

■花畔村 明治四年五月、盛岡県岩手郡から三九戸一二九名(引率者：佐藤熊太郎)

このうち、生振、花畔村の移民は、開拓使募集の募移民で、旅費、家屋、農具、3年間の食料、開墾料(一反に付二両)の補助のある開拓者でしたが、それでも開拓は軌道にのらず、離農するものも多かったのです。

生振の歴史 〇一一〇・〇一(二〇〇九年九月二五日)

■苦難の開拓期 明治四(一八七一年)年、山形県米沢地方の人々一二四人が入植して集落が形成されたのに伴って、オヤフルの地が生振村と命名されました。

私と私の家内の故郷は山形県米沢市ですが、石狩の生振に同郷の方

が開拓で入られていたことを知り、米沢地方の人々が北海道にどれだけ、またどのような状況で移住しているのかという疑問を持つようになりました。昨年、郷土研究会で何か話をするようにという要請をいただき、だいたためらったのですが、この機会に表題のようなテーマで自分なりに調べてまとめてみようと思いい立ちました。

元来、私は理系の出身で、歴史を調べるための基礎教育は全く受けていません。郷土研究会で石狩の歴史についてさまざまなお話を伺い、また郷土研究会会長の村山燿一先生が主宰された石狩の歴史散歩ツアーや、郷土研究会事務局長の石黒隆一先生にお世話いただいた北海道博物館、北海道立文書館、北海道大学北方資料室などの見学会に参加させていただき、それらの機会に得られたいろいろな情報を参考にしながら、見様見まねで調査活動を行いました。

今回の発表はまずグーグルなどでインターネット上の情報を検索し、それを入り口にして北海道や各市町村史、あるいは学術論文などの二次資料を探し、そこで参照されている一次資料に挑戦するという手順で進めました。しかし、一次資料はほとんどすべて古文書で、自分で解読できるものは皆無でしたので、先達の研究者が刻読あるいは現代語訳したもののみを利用させていただきました。その結果、今回の発表は歴史的事実としての厳密性には欠けた概観的な内容になっていることをご容赦下さい。このような経過で選び出した米沢藩士による左記の4つの事例について年代を追って紹介させていただきます。

- ① 島津才兵衛 文化元年(一八〇四年)蝦夷地幕府直轄 大野町(現北斗市)開拓
- ② 山田民弥 他6名 明治二年(一八六九年)北海道分領支配 磯谷郡寿都町 調査
- ③ 玉木琢蔵 明治四年(一八七一年)移民扶助規則 団体移民 石狩市生振 開拓

④ 柿崎家善 本庄孝長 明治二三年（一八九〇年） 土族屯田兵 厚岸町太田 開拓

二. 米沢藩（上杉藩）

米沢地方（置賜地方）は山形県の南部の盆地で、上杉藩の城下町とそれを取り囲む農村地帯である。歴史的風土としては、代々の上杉藩の当主、上杉謙信（越後）、上杉景勝（会津）、上杉鷹山（米沢）などを崇拜する形で形成された。上杉景勝の時代、米沢地方は上杉の家臣、直江兼続の領地で、上杉以前は伊達政宗の根拠地で、支倉常長は米沢で生まれている。

上杉藩は関ヶ原の戦いで徳川家康に対抗して豊臣方に付き、そこでの敗北により慶長六年（一六〇一年）会津一〇万石から米沢三〇万石に減封され、さらに寛文四年（一六六四年）跡目相続の不手際から一五万石に減封されている。この間、家臣団はそのまま維持されたので、藩財政は破綻寸前の状況になった。このような厳しい藩財政を立て直したのが、明和四年（一七六七年）、一七歳で跡を継いだ第一九代藩主上杉治憲（鷹山）である。このときの新規事業の振興、技術開発、人事組織改革、教育改革などの政策は後世に広く受け継がれ、現代でも経済再建策のお手本としてしばしば取り上げられている。

慶応三年（一八六七年）の大政奉還以降、徳川幕府が崩壊し明治維新に移る過程での戊辰戦争で、米沢藩は奥羽越列藩同盟の一員として明治政府に反抗したが、北越戦争で敗北し、明治元年（一八六八年）九月に降伏している。その後、戊辰戦争は明治二年五月、函館戦争における榎本武揚らの降伏によって終結した。この戊辰戦争の戦後処理として米沢藩は一八万七千石まで増えていた知行高を四万石減封されたが、仙台藩や会津藩に比べれば比較的寛大な処置といえるべきであったろう。これはもともと米沢藩には明治政府に帰順して戦争を避けよ

うと主張した勢力もあり、早めに降伏したことで、明治政府との交渉のルートを保持していたのではないかと推測される。それに反し仙台藩は六二万石から二八万石へ、会津藩は二三万石から陸奥斗南藩三万石に転封という厳しい処分を受けている。（文献²）

北海道の開拓に宮城県からの移民が大きな貢献をすることになったのは、秩禄が減って困窮した仙台藩の家臣団が北海道へ組織的に入植したことによるものであろう。米沢藩はそのような状況にはおかれず、明治初期に大勢の家臣団が北海道に入植する事態は起きていない。米沢藩は明治二年の北海道分領支配の政策に応募して磯谷郡寿地方を割り当てられ、山田民弥 他六名を調査に派遣しているが、米沢地方からの入植はほとんど実行されていない。

ただ、明治二三年（一八九〇年）厚岸町太田地区に最後の「移住士族取扱規則」による土族屯田兵として旧米沢藩士族五九戸が入植しており、困窮した武士団の存在は米沢藩も例外ではなかった。

三. 米沢藩士 島津才兵衛

現在まで確認できている北海道に開拓者としてもっとも早く移住した米沢藩士は島津才兵衛である。島津才兵衛は蝦夷地の幕府直轄支配にとまなう蝦夷地開発事業のため、文化元年（一八〇四年）に北海道に渡っている。幕府直轄については『函館市史』に左記のような記述がある。（文献³）

幕府は、ロシア人の北方諸島進出の確認、度重なる蝦夷地近海の外国船の出没や、あるいは国後・目梨のアイヌ騒動など、まさに物情騒然たるなかにあつて、もはやこれをそのまま看過することはできなかった。そこで寛政一〇年（一七九八年）、目付渡辺久蔵胤、使番大河内善兵衛政寿、勘定吟味役三橋藤右衛門成方らに命じて、蝦夷地の

警備ならびに経営についての本格的な調査に乗り出したのである。(文献3 p419)

蝦夷地御用掛の有司は、箱館近郊の開墾事業にも意を用い、寛政十二年以来、水田その他種々の農作を試みている。その収穫も相応にあつたので、箱館奉行は将来の見込み充分ありとして、文化元年土地を選定し開墾の事を幕府に伺いを立てたところ、八月許可の指令に接した。そこで調役山田鯉兵衛、下役村上次郎右衛門、石坂武兵衛、在住勤方代島剛平を掛りとし、その外用達、用聞にも命じ、諸国のうち農民過剰の所から希望者を雇い入れ、移住させ、小屋をつくり、農具などを与えて、文化二年から開墾に着手した。(文献3 p433)

島津才兵衛は上杉藩の士族であり、農民として移住したのではなく、初めは道路開発の取り締まりとしての役割を与えられ、その業績が認められ、千代田村(旧大野町千代田、現在の北斗市千代田)の開拓者の頭取として開墾事業に取り組んでいる。大野町は二〇〇六年二月上旬磯町と合併し、現在は北斗市となっている。『新大野町史』には千代田村の開村と開祖について左記のように記録されている。(文献4)

「当村ハ米沢藩士島津才兵衛ノ開発ニシテ、才兵衛ハ文化元年本道へ渡航シ、峠下ヨリ森村ニ至ル官営道路開サク取締トナリ、ソノ労功ニヨツテ函館会所ヨリ、当人ノ希望ニヨリ開墾ノ許可ヲ受ケ、文化二年開墾ノ小屋ヲ建テ、同二年南部八戸ヨリ農家十二戸ヲ募集シ来タリ、函館会所ヨリ米増及ビ金員を借入シ、字東前谷地ニ畑及田ヲ墾成セシハ、開村ノ初メナリトスル」

しかし、『函館市史』には、島津才兵衛は千代田郷の隣の一本木郷を開拓したとの記述もあり、その真偽は定かではない。当時の地名についてはその境界などがまだ十分に定まっておらず、このような解釈

の違いが発生したと思われる。

ところで、島津才兵衛が蝦夷地に入植した文化元年(一八〇四年)の米沢藩はどのような状況であつたらうか?

日本の歴史上、米沢藩の藩政改革と経済再建で有名な米沢藩九代藩主上杉治憲は、明和四年(一七六七年)に家督を継ぎ、享和二年(一八〇二年)剃髪し、鷹山と号した。(文献5、6)

上杉鷹山は文政五年(一八二二年)七十二歳で亡くなっているが、その間、米沢藩の財政を安定させるためには、農業生産を増やし、安定させることが重要と考え、農民だけでなく、藩士に対しても田畑の開発を促した。安永二年(一七七三年)から翌年にかけて、藩士たちに田畑の開墾や治水のための土手修理などを実施させ、さらに、寛政四年(一七九二年)には、藩士の次男・三男が農村に移り住み、田畑を開墾することを進めている。(文献6) また、上杉鷹山は日本全体の政治状況にも心を配っており、新潟県沿岸にロシアの軍船が徘徊しているとの情報などから、寛政五年(一七九三年)には、蝦夷の状況調査に米沢藩士を南部・津軽辺に派遣している。(文献7) 島津才兵衛はこのような状況のもとで一八〇四年、蝦夷地へ移住している。

島津氏の家系を見ると、中興の祖は島津忠久で、鎌倉時代前期の鎌倉政権の重要な地位を占めている。長男の忠時は薩摩の島津氏へ、次男の忠綱は越前・播磨・信濃赤沼の島津氏へ、三男の忠直は信濃長沼の島津氏へ受け継がれている。信濃長沼の島津氏は戦国時代に上杉謙信の支配下に入り、その後、上杉藩の越後、会津、米沢への移封に従って島津氏も上杉藩の家臣として移動している。(文献8)

米沢における島津氏の状況については種々の上杉文書に記されているが、島津才兵衛の名前はみられず、生誕、死没の時期が不明である。同じ時代に島津喜七郎親忠が江戸家老となったという記録が上杉文書家督先後録(文献9)に記録されている。

島津才兵衛は米沢藩の島津家の傍系(次三男、部屋住み)で、上杉

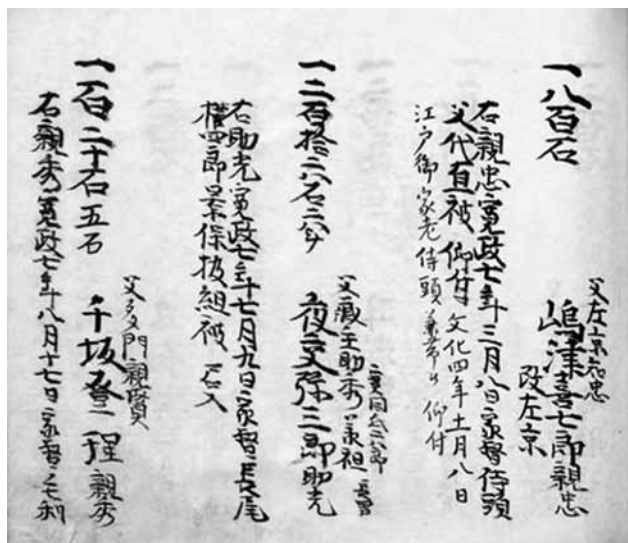


図1 家督先後録・上杉文書 (文献9)

鷹山の藩政改革の時期に蝦夷地を目指したのであろう。名家の士族として函館に来ているので、直ちに農地開拓に従事したのではなく、函館奉行の道路開拓事業の差配人の一人として雇われている。

『新大野町史』(文献4)によれば、千代田村の島津家に、才兵衛と同じ米沢藩士浪人の網谷という人物を師とする寺子屋(私塾)が開設されている。その私塾では愛之助(めでのすけ)、小次郎、新平など、男子五名、女子三名が学んでいた。開設の年代は明らかではないが塾生の年齢から考察して維新前である。なお、北斗市立島川小学校は明治一八年一二月大野小学校の千代田分校と一本木分校を併合し創立されたが、千代田村を開発した島津才兵衛と一本木村を開発した川村新左衛門の二人の功労者の冠字をとり、校名を島川小学校と名付けられている。島津才兵衛の後継者としては左記に示した名前が記されているが、島津家は明治期まで六四年間、千代田村の終世名主として勤

めている。

二代目 島津才吉

三代目 島津才太郎 明治六年、千代田村副戸長(戸長は任命されていない)長万部から黒松内までの道路を開削した。

四代目 島津愛之助 明治一三年農業改良資金の融資の代表者となり、詐欺の被害に合う。

四・米沢藩士 山田民弥他六名

北海道の分領支配(文献10)は、明治二年(一八六九年)七月から明治四年(一八七一年)八月まで、開拓使が管轄する北海道を諸藩、士族、庶民の志願者に分割して支配させた体制のことである。米沢藩は磯谷郡(現・寿都町)を割り当てられ、この地域の見分および領地受領のために左記の米沢藩士が派遣された。(文献11)

山田民弥(昌寿院様御用人)、真野寛助(勘定頭筆頭)、入澤伝右衛門(役所役)、吉田元頑(外様法禮医師)、村恭介(扶持方平勘定)、浜崎八百寿(同心頭絵図方)、家来一人 荷物二個 両掛一個

この派遣団の主幹となった山田民弥はこの出張の記録を「恵曾谷日誌」(文献12)として、また同行した絵師浜崎八百寿は「恵曾谷日誌」中の挿絵を描くとともに、独自の旅行日誌「蝦夷恵曾谷日誌」(文献13)を記している。「恵曾谷日誌」は明治二年(一八六九年)五月から翌三年五月まで記されており、北海道の風景や風俗を文章で表すとともに、絵師が描いた生き生きとした挿絵が入り、当時の状況を知るための貴

重なる資料となつてゐる。なお、「惠曾谷日誌」は宗方洋子により口語訳されておりネット上で閲覧できる^(文献4)。

以下に、行方洋子訳による口語訳から引用して、惠曾谷日誌の内容を抜粋して記す。また旅行の行程については山本淳による解説^(文献1)を引用した。

分領支配の通達主旨

蝦夷地は、国の北門で、すぐ山丹満州に接し境界はほぼ決まつてゐるとはいえ、北部に至つては、内外の人々が雑居してゐるところである。これまで、日本の役人はアイヌ人に過酷な労働を強いてきたが、外国人たちはもつと愛情を持つて待遇してきてゐる。こんな事ではアイヌ人は、いづれ我が国に恨みをもち、外国人の方を尊敬するようになる。もし人民を救済するという名目でアイヌ人を扇動する者が現れれば、すぐに箱館や松前に禍が及ぶ。それを未然に防ぐのが、まさに今の要務である。箱館が終結したのであるから、速やかに開拓指導方を作成し人民を入植させる件に関して、それぞれの利害得失等の意見を忌憚なく述べてもらいたい。

明治二年一〇月一二日 米澤藩が弁官に出した願書

今回専ら、蝦夷地開拓についての注意がありその趣旨をお伺いして、諸藩から願ひ出るようにとの ことでした。臣下にとつては誠に当然のことと思ひ、この際奮発勉勵してお国のご恩に報いるべく参上しました。我国は、かねてから窮迫しており、資金が必要となることは明らかですが、窮民を救う手立てが見えず当惑している状態なので願ひする次第です。国力ありませんが、何とか微力を尽くして国をお助けし、この大事業の始まりに当たつて一度、かねてからの思ひをお酌みとり頂いて国力相応の地所を割讓して頂ければありがたいと思ひます。恐れ多いことではありますが嘆願申し上げます。

以上明治二巳 九月八日(十月十二日) 米沢藩知事

明治二年一〇月二三日 弁官役所通達

米沢藩 後志国 磯谷郡の内、後別川(尻別川)西但し、川の西、ノツ

ト(能津登)を境界とする。右、その藩の支配を命ず。九月 御印

太政官

惠曾谷日誌行程

米沢から函館まで

明治二年一〇月九、一〇日 米沢出發(駕籠)

一四、一五日 東京着

一六日 真野、入澤 松浦武四郎を訪問

二一日 東京發 夕刻 横浜着(馬車)

二二日 横浜港 露国蒸氣船コーリール船に乗船(二二、五\$、一名)(二七、五万円?)

二三日 出帆

二五日 晴れ 海上は風がなく穏やかだ。みんな息を吹き返したよ

うな心地して少し食事をしたけれど、飯などは食べられない。蜜柑、梨、葡萄のたぐいは食べやすい。(かねてから

船中に貯藏してあつた商人の物をもらつて食べる) 外国

人が飯を持つてきたが、食べる者は一人もない。夜少し

眠る。夜中、寒氣して目覚めた。詩あり。

風の勢いは漸く収まり海の色は青い

船に霜の如き月上る

小窓から忍び込む寒氣が眠りを妨げ、目覚めさせる

寝ながら見れば、金色の波が大海原に湧く

明治二年一〇月二七日 函館上陸

明治二年一〇月二七日 函館上陸

函館から磯谷まで

明治二年一月二十八日 佐藤伊三右衛門(磯谷請負人)と置賜栄一(開

拓使少主典、米沢浪人)と面談

一二月四日 正午 函館出立 夜 大野村着

(一本木、千代田を通過しているが、島津家との接触の記述は無い)

一二月五日 大野村出立 鷺ノ木着

一二月六日 鷺ノ木出立 山越内着

一二月八日 山越内出立 長万部着

一二月九日 長万部出立 黒松内着

一二月一〇日 黒松内出立 磯谷着

東西境界見分(山田・真野・入澤)

明治二年一二月一三日 曇り、朝飯の後、我ら三人(私と真野、入澤)は、石子、萩野、その他に支配人、浜役が同行して、東の境界を見分しに行く。川の西岸に、小さな家が六軒ある。この家は、シリヘツに所属するので除外して、山の上がり口に境柱を立てる。左の通り。

後志国磯谷郡 能津登是より西 米澤藩支配所 明治二年十一月

午後から西の境界へ見分に出る。アルト、ホロヘツ、ハシリは、海岸の岩に波が打ち寄せ、潮が引くときでなければ通れない。潮が満ちるときは、山の道を往来する。ホロヘツ川の川幅十間程で橋がある。サメトマリ(訳注・鮫泊、鮫取澗)、ユウキナイ、まで運上家から十二丁五十八間。ユウキナイの中程に今まで境柱が立っていたところに新規に境柱をたてる。

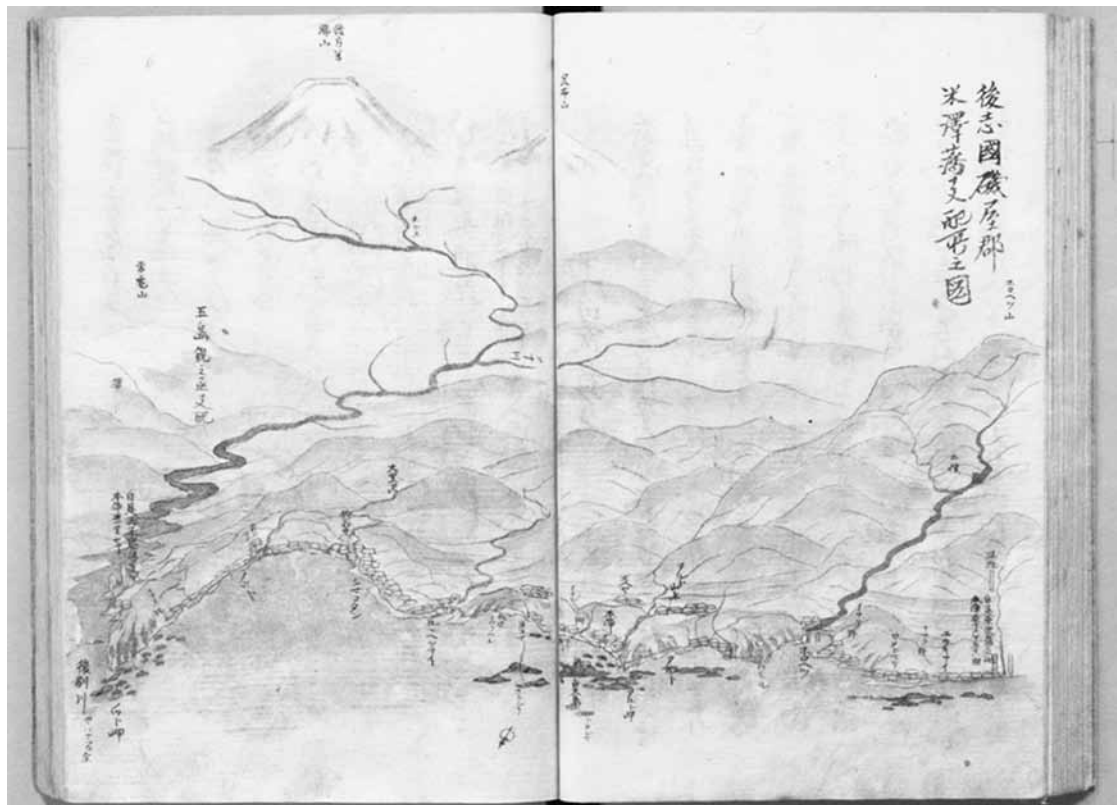


図2 後志国磯谷郡 米澤藩支配所之図
〔蝦夷惠曾谷日誌〕 浜崎八百寿筆 (文献13)

一二月一四日〜一二月一六日

磯谷場所の地理的境界、アイヌの人の家族構成、所領の神社、永住している住民の人別長、磯谷場所の物産（ニシン、あわび、ナマコ、鮭、昆布）などの生産量、各使用人に対する給費などを確認

一二月一七日 真野・入澤・下村 帰国の途につく。

明治政府の分領支配制度の一つの目的がアイヌの人々が反乱を起こさないような政策を実行することであったので、アイヌの人たちと交流し、その様子はかなり詳細に記述している。

二月十五日 今日三人を呼び酒を出す。今年は、疑いなく大漁であるので、沢山飲み、祝いを述べようとすると、通訳はその主旨を三人に伝える。

行器に酒を満たし、あの大椀に鬚上げという箸を一本のせ、三つをそろえて置き、肴はなく、飲む仕草が昨年見た通りなので、通訳にどうして箸を使うのかと聞くと、まず第一に氏神（義経のこと）捧げ、次ぎに火の神、次ぎに水の神、次ぎに龍神に捧げ、今年の漁獲を沢山にして下さいと黙祷して、その後飲むと言う。エーサク、シエタサの二人はあまり飲まず、シエトは、よく飲むというので勧めると、上機嫌になって…



図3 アイヌの有力者にお酒をふるまって接待している様子。「恵曾谷日誌」 浜崎八百寿筆（文献 12）

石狩地方の視察

山田民也、吉田岩頑（医師）、浜崎八百寿（絵描）、常吉（番人）

明治三年三月七日 磯谷本陣 岩内本陣

同 八日 岩内本陣（炭鉱見学）茅沼村 同 九日 茅沼村 岩内本陣

同 一〇日 岩内本陣 与市笹小屋 同 一日 与市笹小屋 忍路本陣

同 一二日 忍路本陣 小樽内本陣 同 二三日 小樽内本陣 銭函本陣

同 一四日 銭函本陣 石狩本陣 同 二五日 石狩本陣 札幌本陣

同 一六日 札幌本陣 銭函本陣 同 二七日 銭函本陣 小樽内本陣

同 一八日 小樽内本陣 与市本陣 同 二九日 吹雪同 二〇日 与市本陣 与市笹小屋 同 二〇日 与市笹小屋 岩内本陣

十三日（三月十四日）晴九時頃弁当を持って出発。

…浜中という通行屋一軒有り、昼食する。汁を注文すると、汁に具がない。具のない汁を煮て出すので、何故なのかと尋ねると、昨年は、石狩の鮭が不漁でさらに、昨年来、人の往来が多くて野菜の蓄えが底をつき、今大根を買おうにも金一分で三本なので買えない、という。また、砂浜を二里行き、三時頃石狩本陣に到着し、泊まる。番人（山形 今三日町 塗や熊次という）の案内で市内を見分する。人家は、石狩川の手前に百五六十軒、川向こうに二三十軒ある。三四軒酒楼も

あるけれども、かなり不景気の様子だ。川は、巾が二百三十間ある。上流三四丁の所は皆凍り、渡し場の辺りだけは凍らず、船渡しだ。ここは、鮭しかない所で、昨年は、極めて不漁で三四百石から千石までの船で七十艘あまり積み出したとのことだ。この辺は、秋だけ賑やかで今時分はかえってここから鮭場へ出稼ぎに行く者が多いという。…

山田民也の後任の米沢藩士宮島幹は明治三年八月に山田らと同様な経路で視察を行った。宮島は「北行日記」に以下のように記している。石狩町誌^(文献15)によれば、

明治三年八月一五日 …夕方漸く石狩駅本陣へ至りしに、権幹事止宿のため御宿六ヶ敷とて、弁天町越中屋へ止宿、銭函より五里半此の日の行程凡九里余。今日弁天の祭りとして、灯籠を所々へかけ、町中至つて賑はし、当所は鮭ばかりの猟にて外には猟のなき故、春は鯨場へ出稼ぎに來り秋ばかり繁華の由、最早秋鮭節に相成り追々賑やかになりしと云う。…石狩川手前に人家百二十軒、酒楼妓楼十三四軒有之、夜々弦歌の声にて賑々し。

山田らが石狩を訪れたのは三月中旬で、この時期はニシンの漁獲期で多くの労働者は厚田や小樽のニシン漁場に出かけており、石狩川河口付近の本陣地域は閑散としていたのである。宮島らが訪れた八月中旬はサケ漁の準備などで労働者が本陣付近の本町地区にもどり、賑わいを取り戻している。

山田らは明治二年(一八六九年)一二月磯谷に到着し、明治三年四月に出立するまでの期間、磯谷での年の瀬の行事や年頭の挨拶などの年中行事に参加し、児童の遊戯の様子、安産祈願、飲酒の儀礼なども観察記録を行っている。一方、領地の運営は旧場所請負人佐藤伊三右衛門に任せていた模様で特に新規な事業を始めてはいない。領地内の

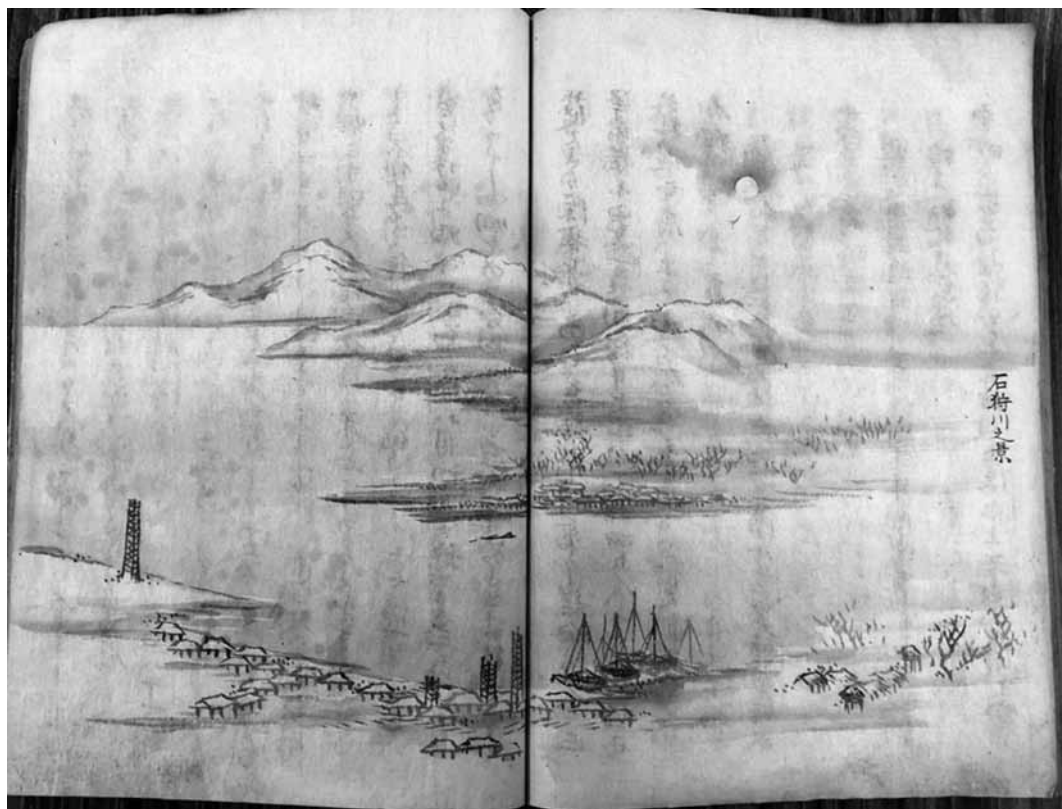


図4 石狩川之景「恵曾谷日誌」浜崎八百寿筆 明治三年三月(文献12)

山林資源、農地、ニシン漁などの漁業活動の調査を行い、米沢藩の財政にどう役立てられるか検討していた。この間、松浦武四郎の記録なども詳しく読み込んでいた。

山田民也らの一行は明治三年四月一日に磯谷を出立して二三日松前に着き、五月五日松前から乗船したが、潮に流されて縋月（青森県津軽郡今別町大字婁月）に漂着した。その後、陸路 弘前、大館、大曲、尾花沢、山形を経由して米沢に五月二〇日帰任した。なお、明治四年分領支配終了後、旧米沢藩から成田某ら五戸入植し開墾を始めたという記述が蘭越町ホームページ (<http://www.town.frankoshihokkaido.jp/introduce/index13.html>) にあるが、詳細は不明である。

五. 米沢藩士 玉木琢蔵

明治二年七月、明治政府は箱館府（慶応四年閏四月二四日設置）を廃止して開拓使を設置、同年八月一五日に蝦夷地を北海道と改称して開拓を推進した。開拓使は明治二年一月に仮移民扶助規則を制定し、東北地方の諸藩・県からの移民募集にあたった。（文献16）

左記は『新札幌市史』に記されている内容を抜粋要約したものである。

明治三年の庚午（こうご）移民は主に山形（庄内）・新潟県内から募集。苗穂・丘 珠・円山村の創設に携わった。明治四年の辛未（しんみ）移民は主に岩手・宮城県内の農民層から募集、月寒・対雁・花畔・生振村の創設を担当した。辛未移民の募集にあたったのは広川信義大主典で、広川の募集や手続による移民は次の通りであった（県名は当時のまま）。

- ① 盛岡県岩手郡 四三戸一八五人（月寒）
- ② 同 三九戸一二九人（花畔）

③ 登米県遠田郡 二四戸（対雁）

④ 仙台県宮城郡 二九戸一二四人（生振）

⑤ 胆沢県水沢の伊達将一郎旧家臣ほか（平岸）

広川信義大主典は岩手・宮城県での募集活動の後、山形、米沢、新潟に向かっているが、広川の山形、米沢、新潟での募集は順調にいかなかったようである。「十文字龍助日記」四年六月四日の条（文献17）には、左記のような記述がある。

「広川大主典、山形米沢にて移民不弁酒田にて一戸、幸に陸前松嶋高城の者共の越後迄立越しを送越せしと」

その後の経過については「これらの移民は新潟から開拓使の庚午丸にて渡航し、五月二一日に小樽に到着している。内訳は新潟県二四戸一〇四人、大泉藩（庄内藩）一戸六人、米沢藩一三人、仙台藩（松島・高城）九九人となっていた。」と記されている。

『新札幌市史』の記述にはいろいろな疑問点が含まれている。米沢では募集がうまくいかなかったとされているが、結果として米沢藩から一三人が仙台藩（松島・高城）の人々九九人と一緒に新潟から乗船して入植していることになる。この移民は、広川大主典の移民記録による仙台県宮城郡二九戸一二四人とは別の枠組みでの移民なのであるうか。しかし、陸前松嶋高城は宮城郡に属するので、仙台県宮城郡二九戸一二四人と言われている中には米沢藩一三人と他藩の入植者の一部が含まれていると推定するのが自然ではないだろうか。玉木琢蔵の一家もこちらの枠組みで北海道に移住したとも考えられる。

ただし、『生振開村百二十年』（文献18）には「宮城郡の高木、松島、磯崎と山形県米沢地方の人々が玉木琢蔵（旧米沢藩士）を引率者として石巻港から津軽海峡く石狩川河口を経て入植した」との記述もあり、その真偽については今後の研究が待たれる。

明治五年の開拓使文書「壬申歳生振反別調書」(文獻¹⁸)には生振に入植した二九戸それぞれの構成員と割り当てられた畑の面積が記録されている。

この調書によれば、戸主の最年長は七三才、最年少は二六才で平均四四・七才となるが、玉木琢蔵(このとき玉木伊右衛門と名乗っていた)は申壬年(明治五年)に三四才で、戸主としては若手と言えよう。畑三反六畝五分割り当てられているが、この面積は決して大きい方ではなく、同期に入植した高橋藤左エ門(五六才)は七反五畝九分割り当てられている。

この調書は生振村伍長玉木伊右衛門、丹野伝松、吉田林右エ門の三名の署名で提出されているが、このことは玉木琢蔵が単独の引率者として石巻港経由で入植したという『生振開村百二十年』の記述に疑問を抱かせる。後に明治四年に生振地区に入植した移民が「玉木団体」と呼ばれるようになったのは、その後の開拓の事業に玉木琢蔵がおお

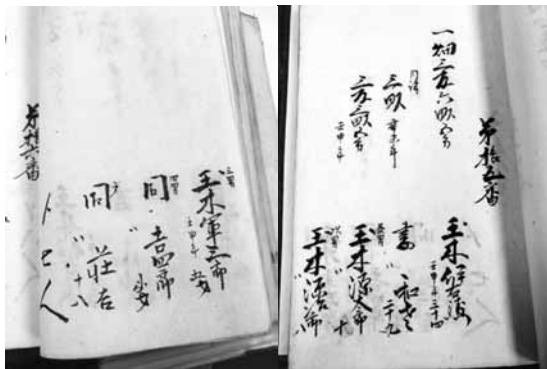


図5 明治5年の開拓使文書
「壬申歳生振反別調書」北海道立文書館

いにリーダーシップを発揮したことによるものであろう。入植時の玉木琢蔵の家族構成は妻和さ(二九才)、長男源太郎(一〇才)、次男源次郎(八才)、三男軍三郎(五才)、四男吉四郎(三才)、弟莊吉(一八才)計七名である。

玉木琢蔵は米沢藩士として移民扶助規則による開拓に応募しているが、玉木家の家系は上杉文書の分限帳から元禄三年(一七九三年)までたどることができる。(文獻¹⁹)

以下に、慶応元年(一八六五年)までの分限帳に記載されている内容を示す。これらの分限帳ではいづれも「研師」という職分に属し、式石五斗の俸禄を受けている。天保十二年の分限帳からはその年の年齢と家督を継いだ時期を記録している。

- ・元禄三年(一六九〇年) 分限帳 研師 式石五斗 五右衛門
- ・寛政五年(一七九三年) 分限帳 研師 式石五斗 玉木五右衛門
- ・享和三年(一八〇三年) 分限帳 研師 式石五斗 玉木五右衛門
- ・天保一二年(一八四一年) 分限帳 研師 式石五斗
- ・玉木善右衛門 文化一二年(一八一五年) 九月 家督、四一歳
- ・嘉永二年(一八四九年) 分限帳 研師 式石五斗
- ・玉木善兵衛 文化一三年(一八一六年) 九月 家督、四九歳
- ・玉木源助 弘化二年(一八四五年) 一二月 家督、四三歳
- ・慶応元年(一八六五年) 分限帳 研師 式石五斗
- ・玉木伊右衛門 弘化二年(一八四五年) 一二月 家督、五九歳
- ・玉木善兵衛 文久二年(一八六二年) 一二月 家督、三三歳

元禄三年(一六九〇年)の分限帳には研師としての職能集団七人の一人として「五右衛門」という名前が記録されている。「玉木」という苗字は記録されていないが、一〇三年後の寛政五年の分限帳に記録されている「玉木五右衛門」の先祖ではないかと推定される。いつ苗字を許されたかは不明である。天保一二年の玉木善右衛門と嘉永二年

の玉木善兵衛は家督を継いだ時期が一年違うが、年齢を比較すると分限帳の年代差と一致するので、同一人物と推定される。

慶應元年の分限帳の玉木伊右衛門は嘉永二年の分限帳の玉木源助と同一人物で、弘化二年に家督を相続している。同じ分限帳の玉木善兵衛は文久二年（一八六二年）一月に嘉永二年の分限帳の玉木善兵衛から家督を継いでいる。玉木琢藏は玉木伊右衛門とも名乗っており、慶応元年で五九歳の伊右衛門の息子と思われる。事実、玉木琢藏の弟である玉木莊吉の家系につながる郷土研究会会員の今井光男氏が記録した家系図では、琢藏は玉木伊右衛門の長男と記されている。

玉木団体が入植した生振の場所は「明治二六年殖民区画測設時の状況の図」^{〔文献18〕}によれば、幕勲別川に接した生振の北側の地域（生振村六線北）で、近くにアイヌの有力者である豊川アンノランも住んでいた。玉木団体の開墾事業は非常に厳しく困難な状況に置かれており、玉木団体が入植時に豊川らの援助を受けていたと記されている。明治二六年の時点では琢藏は長男の源太郎に家督をゆずり、莊吉は琢藏から独立して一家をかまえているが、この時点ですでに明治四年に入植した二九戸中、名の残るものが少ない。さらに『生振百二十年』^{〔文献18〕}に記述されている昭和二〇年時点の生振村の居住者の記録によれば、明治四年に入植した家は岩手県一戸、宮城県六戸、山形県（米沢）一戸となっている。

玉木団体の開墾事業が非常に厳しく困難であったことは、開拓使公文録「元中主典富田信定、贖罪例ニ依リ処断ノ件」からも推測できる。工藤義衛氏による公文録の解説^{〔文献20〕}によれば、「生振村御救助農夫十二人密雇致シ候ニ付農夫トモ三十日懲役」という記述から、十二人の開拓民が中主典富田信定に非合法的に雇われて漁業に従事し、三〇日間の懲役処分を受けていたことが分かる。工藤氏は救助移民には開墾に専念する義務が課せられていたが、当時、玉木団体の移住者たちは入地してあまり間もなく、農作物による収入は見込めず、開拓

使から支給される金では足らず、現金収入が必要だったことが背景にあったと推測している。このような状況下では、生振地区の農地開拓はあまり進まず、生振の本格的な開拓は明治二七年の愛知団体の入植を待つことになった。

次に『生振百二十年』に記述されている玉木団体の主な活動を記す。

明治六年 玉木団体 生振7線北三号に小祠を建立し、天照大神を祭る。（生振神社由緒）宮城県より入植の人々により小祠を建立し、三神を祀ったのを生振神社の始めとする。

明治二二年 洪水被害により、上記祠を玉木宅西側に移転。

明治二六年 若生町の萱場武之助を教師に招き玉木宅に児童一〇余名を集めて寺子屋開設

玉木拓藏は明治三〇年六一歳で亡くなっているが、二代目の玉木源太郎氏は明治二九年の生振小学校設立の委員、明治三五年の石狩町誕生時には大字生振村部長を務め、昭和二二年八六歳で亡くなっている。

六：米沢藩士族 柿崎家善、本庄孝長^{〔文献21〕}

太田兵村

屯田兵制度は黒田清隆の建議によって明治六年（一八七三）年二月二五日に制度実施が決まった。最初の屯田兵は明治八年（一八七五年）五月、青森・宮城・酒田3県と道内の函館周辺にいた士族ら合計一九八戸、その家族九六五人が札幌の西方の琴似兵村へ入植した。初めは士族だけが屯田兵に応募できたが、明治二四年（一八九一年）から平民が応募できることになった。太田兵村は最後の「移住士族取扱規則」による士族屯田兵兵村で、新潟・山形・石川・福井・兵庫・

宮城・山口・和歌山の士族四四〇戸 からなり、そのうち旧米沢藩士族は五九戸であった。この時の移住がもつとも多くの米沢藩士の北海道への集団移住となった。

なお、太田兵村は開拓に尽力し兵村設置にも協力したアイヌ出身の太田紋助の名が冠されている。(文献²²、²³)

太田兵村は泥炭層からなる地帯で、夏の海霧と低温で作物が育たず、開墾は困難を極め、明治三十一年(入植八年後、後備役に)時点で半数近くの入植者が離村。日露戦争はさらに拍車をかけ、給与地は荒廃し、作付けされている耕地は兵屋の周りの三〜四反という有様で馬鈴薯、麦、蕎麦、稲黍、燕麦等自家用の食料を補う程度になってしまった。その後、残った者と新に入植した人達の手によって酪農や林業に活路を見いだしている。

柿崎家善(文献²⁴)

柿崎氏は戦国時代においては越後一六家(楠、五十嵐、蔵王堂、樋口、風間、柏崎、加治、本庄、妻我、篠崎、柿崎、新発田、直江、三条、宮川、大井田)の一つで、越後国頸城郡柿崎(現・上越市柿崎区柿崎)に根拠をもつ豪族だが、桓武天皇の遠縁とされている。柿崎和泉守景家は川中島合戦で上杉謙信の先鋒隊をつとめ、武田信玄の武将。武田信繁軍を破ったことで名を馳せている。景家の家督を継いだ次男晴家は上杉景勝と上杉景虎の家督相続の争いで景虎側について滅ぼされたが、柿崎憲家(景家の四男)は上杉景勝に赦免されて柿崎家が再興される。その後、いろいろ浮沈があつたが、上杉家の家臣として会津、米沢への移封に従つて幕末を迎えている。上杉文書の嘉永二年(一八四九年)の分限帳によれば天保四年(一八三三年)七月に家善の祖父と思われる柿崎和泉(家成)が二五〇石で家督を継いでいる。柿崎家善は元治元年(一八六四年)柿崎家教の長男として生まれ、柿崎和泉守景家の一三代の子孫になる。明治一六年(一八八三年)巡

査、一八年近衛歩兵第三連隊に入隊、一三年に屯田兵に応募している。応募したときの階級は軍曹で米沢市長から屯田兵取り締まりを命ぜられていた。明治二七年に日清戦争に出征、三〇年太田村戸長役場の筆生、四三年から大正六年まで太田村戸長に就任しているが、翌七年(一九一六年)に没している。

畑作には不向きな泥炭地の太田村で、柿崎らは牧畜業に取り組み、成果をあげ、戸長を退任した大正六年に釧路産牛馬畜産組合から感謝状を贈られている。(文献²⁵)

柿崎家文書(文献²¹)

柿崎家善が屯田兵として太田兵村に移住した際、米沢から先祖伝来の文書を持参した。この中には、上杉謙信・景勝および各地の戦国大名から授受した文書があり、史料価値が高い。米沢時代に火災にあつて、判読不明の文書が少なくない。写本も多く含む。

寛文年間(一六六一〜一六七三)、江戸幕府儒臣林鷲峯が「続本朝通鑑」の編纂を開始し、その資料として諸藩に伝わる古文書・資料の提出を求めた。米沢藩では竹俣義秀・矢尾板三印が藩御倉の文書を整理し、家臣から所蔵文書を提出させ、上杉家文書を刊行。この時、柿崎家も同家に伝わる戦国期の古文書をまとめて提出している。

二〇一六年三月、戦国時代から江戸時代までの八〇点あまりの柿崎家文書を柿崎家が上越市に寄贈し、これらの文書は現在、上越市公文書センターで保管している(文献²⁶)。この中には、永禄十一年(一五六八年)に村上の本庄繁長が武田信玄側と結んで挙兵した際、謙信が村上へ派遣した景家と直江景綱に春日山と信州の守りについて伝えた書状や、北条氏政や安房の里見義弘が、景家に謙信との同盟や支援を求めた書状などがある。

本庄孝長(文献27)

安政六年(一八五九年)本庄昌長の三男として生まれる。長男の勝長が廃藩後商売に失敗して明治六年失踪、孝長が養子先から復縁して家督を継ぐ。その後、旧臣との間で土地の所有権をめぐる訴訟争いが発生し、大審院まで争ったが敗訴、財産を失った。これにより、屯田兵募集に応募し、明治三年(一八九二年)北海道に一家八人(母、妻、妹二人、長男、長女、姪(勝長の娘))で移住。

本庄家の家系

桓武天皇の末裔とされる秩父畠山重宗を祖とする武家の家系で、鎌倉時代初頭、越後国小泉庄本庄(現新潟県村上市)の地頭となっている。中興の祖本庄繁長は、戦国時代上杉謙信・景勝に従って各地に転戦し、その武勇を内外にとどろかした。本庄氏は上杉政権下では外様の国人として相対的に独立した存在であり、謙信に反旗を翻した時期もあった。上杉景勝の時代に復権し、上杉家の会津転封時には福島城代を勤め、米沢移封に際しては鮎貝城代として廃藩まで勤めた。鮎貝は現山形県白鷹町鮎貝で米沢盆地の北西部に位置し、新潟県境に近く、かつての本庄家の根拠地であった新潟県村上市に比較的近い地域である。

本庄家文書(文献27)

本庄孝長は移住の際に先祖伝来の古文書を持参し、合わせて屯田兵として移住の生活を日誌として詳細に記録している。これらの資料は写真なども含めて総数四三九点にのぼり、本庄俊長氏により北海道立文書館に寄託されている。多くの古文書は写本で、江戸時代初期に米沢藩が藩公歴代年譜の編纂を開始し、家臣から先祖書きや文書を提出させ、文書集を編集したが、この機運に乗って家臣も家伝の重要文書を整理しまた写本を作成して文書集を編纂した。最古の文書は建武三

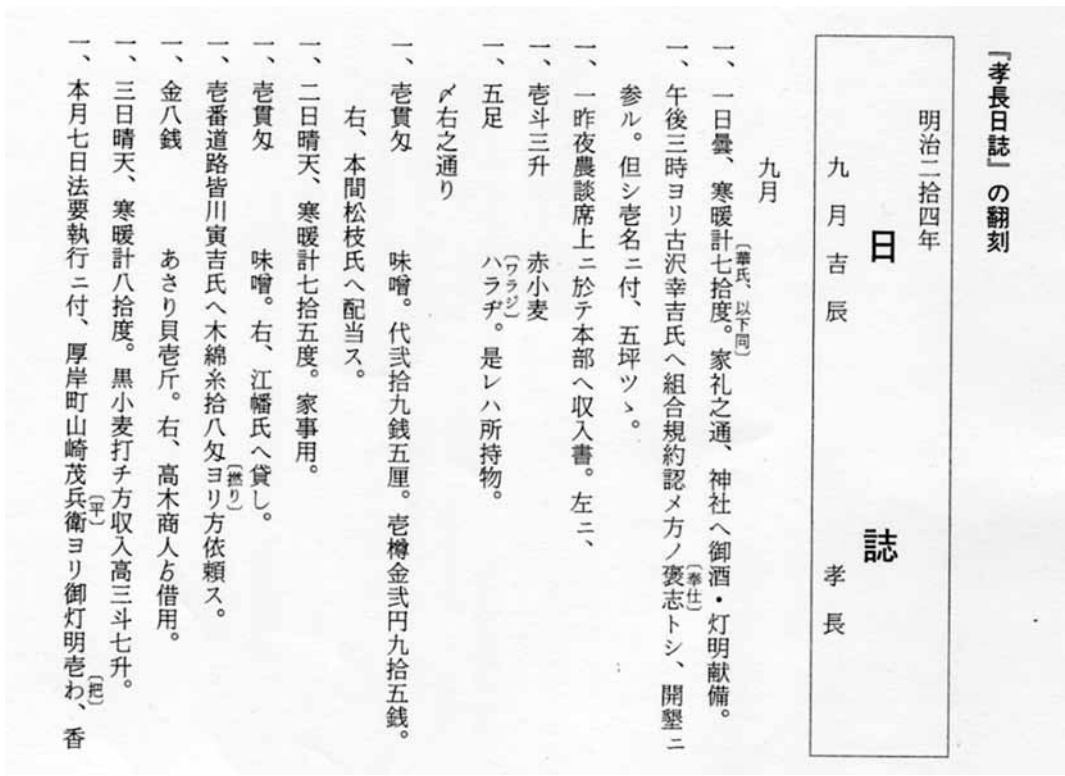


図6 「孝長日誌」の翻刻 (文献28、p 39)

年(一三三三六年)「足利直義軍勢催促状」。最新は、「昭和六年八幡宮遺宝及び斎藤六太郎一族長楽寺本堂ニ於テ写ス」「写真」である。



図7 平成元年三月二九日に解体する直前の上杉神社（本庄良子氏 撮影）（文献 29）

孝長日誌^{〔文献28〕}

明治二四年九月から翌年六月までの一〇ヶ月間にわたって本庄孝長が書き綴った日記で開拓二年目の兵村の実態を伝える貴重な資料である。孝長の日誌は金銭出納帳の一面をもっており、商人からの信用買いや兵員同士の貸借など、金銭の出入りを細大漏らさず記している。この几帳面な性格のお蔭で村内の経済活動の一端を知ることができると。「孝長日誌」は太田屯田兵の唯一の日記であり、第一級の史料価値を有する。

太田兵村では出身地ごとに親睦団体を結成して神社や石碑を建てて、旧藩主を祀った。米沢人会（旧米沢人貯金会）は明治二八年、南太田村二二〇戸中、米沢地方出身五七戸の寄付により結成された。この会は会員の親睦を図るだけでなく、相互扶助の場となり、上杉神社御堂建築事業の中心となった。

本庄孝長の直系子孫の本庄俊長氏は現在も厚岸郡厚岸町に在住し、

平成二九年度「ほっかいどう地球温暖化防止貢献の森林づくりコンクール」で優秀賞を受賞されている。夫人の本庄良子氏は厚岸町太田屯田開拓記念館の管理人として記念館の維持に尽力されている。

七．終わりに

今回の発表を通して北海道の全体の歴史についてもより深く学ぶことができたように思います。北海道は。日本の各地から移住して数々の苦難を乗り越えてきた開拓者の歴史が詰まっている地域であることを再認識しました。その中で、上杉藩の士族を中心とした米沢地方の人々も、北海道の開拓史の中で華々しい注目を浴びているわけではありませんが、地道に努力して各地域の発展に貢献していることを確認できました。

北海道に移住した上杉藩の士族の歴史をたどっていくと、これらの人々もまた日本の異なった地域から上杉藩に合流した集団であり、それぞれ異なった歴史を背負っていることも再認識できました。

八．謝辞

郷土研究会で発表の機会を与えていただいた郷土研究会会長村山耀一先生初め役員の皆様に感謝いたします。

上杉文書その他について情報検索でご援助いただいた米沢市立図書館郷土資料担当 石黒志保氏に感謝いたします。

太田屯田村についてお話を伺い関連資料をいただいた厚岸町太田屯田開拓記念館本庄良子氏に感謝いたします。

9．引用・参考文献

文献1 石狩ファイル

<http://www.city-ishikari.hokkaido.jp/museum/ifpd.html>

- 文献2 米沢藩 <https://ja.wikipedia.org/wiki/米沢藩>
- 文献3 函館市史通説編第一巻第二編第三章 函館市編一九八〇
(函館市地域史料アーカイブ)
- 文献4 新大野町史 大野町史編さん委員会編 二〇〇六
- 文献5 上杉治憲 <https://ja.wikipedia.org/wiki/上杉治憲>
- 文献6 上杉鷹山の生涯 <https://bestsuppli-kan.com/archives/36>
- 文献7 鷹山公世紀 池田成章編著 一九〇六 吉川弘文館
- 文献8 「武家の家紋の由来」
http://www2.harimaya.com/sengoku/html/sin_simazu.html
- 文献9 家督先後録 市立米沢図書館所蔵 市立米沢図書館デジタルライブラリー (library.yonezawayamagata.jp)
- 文献10 北海道の分領支配 <https://ja.wikipedia.org/wiki/北海道の分領支配>
- 文献11 米沢藩士による蝦夷地見分日誌二種 山本淳 二〇一六
山形県立米沢女子短期大学付属生活文化研究所報告四三号 P1
- 文献12 山田民弥 恵曾谷日誌 北海道大学北方資料室所蔵・別 915-Yam
- 文献13 浜崎八百寿蝦夷恵曾谷日誌 市立米沢図書館所蔵
FQ007001 市立米沢図書館デジタルライブラリー (library.yonezawayamagata.jp)
- 文献14 恵曾谷日誌一民也と共に 山田民也著、佐藤健彦解、行方洋子訳 二〇一四 <https://namekata.org/wp/isoyanisshi/>
- 文献15 石狩町誌上巻 石狩町編 一九七二 P365
- 文献16 新札幌市史第二巻通史二「辛未移民の入植」札幌市編 一九九一
- 文献17 新札幌市史第六巻資料編二 札幌市編 一九八七 P775
- 文献18 生振開村百二十年 生振村開村百二十年編集委員会編
- 文献19 一九九二
上杉文書 分限帳 市立米沢図書館所蔵 市立米沢図書館デジタルライブラリー (library.yonezawayamagata.jp)
- 文献20 開拓使公文録「元中主典富田信定、贖罪例ニ依リ処断ノ件」
工藤義衛 二〇一四 いしかり砂丘の風資料館紀要 第4巻 P61
- 文献21 本庄・柿崎家資料※厚岸町太田屯田開拓記念館 (town.akkeshi.hokkaido.jp)
- 文献22 屯田兵ウィキペディア 屯田兵制度
<http://tonden.org/wiki/index.php?title=%E5%B1%AF%E7%94%B0%E5%85%B5%E5%88%B6%E5%BA%A6>
- 文献23 北海道屯田倶楽部ホームページ 屯田兵村の姿：太田
https://tonden.org/heison/entori/1910/12/3_nan_tai_tian_bing_cun_bei_tai_tian_bing_cun.html
- 文献24 研究ノート 厚岸柿崎家文書の紹介 高嶋弘志 一九九二
釧路公立大学紀要第4号 P1
- 文献25 感謝状(柿崎家善)※厚岸町海事記念館 (town.akkeshi.hokkaido.jp)
- 文献26 上越市ホームページ <https://www.city.joetsu.nigata.jp/soshiki/koubunsho/kakizakikemonzyo.html>
- 文献27 研究ノート 厚岸本庄家文書の紹介 高嶋弘志 一九九三
釧路公立大学紀要第五号 P27
- 文献28 「資料紹介」太田村屯田兵の日記 - 「孝長日誌」の紹介と解説 - 高嶋弘志 一九九四 釧路公立大学紀要第六号
- 文献29 根室地域における屯田兵村と神社の研究：土族屯田としての和田兵村と太田兵村を中心に 遠藤由紀子 二〇〇六 昭和女子大学文化史研究第一〇巻 P35

五ノ沢神社の社殿について

工藤義衛・坂本恵衣

はじめに

筆者の一人である工藤は、近年ネット上で、五ノ沢神社の社殿が、同市八の沢にあった伊夜日子神社が移築されたものとされていることに気がついた。しかし、八の沢からの移築については五ノ沢神社の由来を記した「北海道神社庁誌」にそういった記載が無く、またその他の資料でも確認できたのは「改築」までであった。そこで移築について確認する必要を感じ、令和二年十一月十二日にいしかり砂丘の風資料館の工藤義衛、坂本恵衣の二名で五ノ沢神社の社殿内及び社殿内の調査を実施した。当日は五ノ沢神社の管理をしている五の沢町内会青木恒夫会長の立ち合いをお願いした。

一 五ノ沢神社と伊夜日子神社

五ノ沢神社は石狩市八幡町高岡二八五番地にある。祭神は天照大神、誉田別尊である。明治三五（一九〇二）年に開拓民によって創立された。昭和五三（一九七八）年に石狩八幡神社の境内神社となった。社殿の形式は神明造である。（注一）。

伊夜日子神社があった八の沢は、石油採掘関係の作業員の住宅、事務所、工場、倉庫、学校などがあつたいわゆる「石狩油田」の中心となっていた場所である（注二）。伊夜日子神社の創立ははっ



五ノ沢神社の社殿

きりしないが、八の沢にある「伊夜日子神社碑」は昭和二（一九二七）年に建立されている（石狩市郷土研究会編二〇〇三、一九二頁）。そのため少なくとも昭和二年以前に創建されたと考えられる。石狩油田は採掘量が減少し昭和三五年に廃坑となった。伊夜日子神社の御霊は昭和三〇年代後半に札幌に移されたという（注三）。

二 社殿内の状況

社殿内では壁に貼ってある明治四三（一九一〇）年と昭和三六（一九六一）年の二枚の寄付者名板が確認できた。このうち昭和三六年の寄付者名板は五ノ沢神社社殿の改築に伴うものであった。寄付者名板には「篤志寄付芳名」として「神社及備品一式 北宝石油会社」とあった。北宝石油会社は八の沢の石狩油田が昭和三五年に廃止される際に油田の経営をしていた会社である（注四）。寄付者名板のこの記載は冒頭に書いた五ノ沢神社の社殿の八の沢からの移築を裏付けるものと考えて良いであろう。もう一枚の明治四三年の寄付者名板は「神社建築」となっており、昭和三六年に社殿が移築される前に建っていた社殿、いわば初代の社殿の新築に伴うものと考えられる。この二つの寄付者名板の内容は坂本が解読し、本文の後に掲載した。



社殿内の寄贈者名板

三 社殿内の祠

今回の調査で最も興味を引いたのが社殿内に置かれていた小型の祠である。この社殿には一般的な内陣が無く、祠の前に鏡が置かれている。祠の屋根はこけら葺きで面中央には何か扁額のようなものを据え付けていた痕跡が見られる。また祠の本体にはほとんど風化、劣化は見られないが、対照的に屋根のみに雨などが染み込んだような跡がみ

られた。しかしそれは、あまり酷いものではなく、野外にあったとしても比較的短期間であったと推測されるものであった。

先に述べたように、五ノ沢神社は明治三五年に創建されたとされている。創建当時の状況を伝える資料は見つかっていないが、社殿内の祠はこのとき建てられたものであり明治四三年の社殿の建築は祠を覆うためであったと仮定してみる。祠は創建から七年後に社殿で覆われたことになり、祠の屋根に見られる風雨の跡とも矛盾しない。

社殿を風雪から護るため、外側を建物で覆うことは深川市の芽生（めむ）神社で類例がある。同神社の社殿は明治三三（一九〇〇）年に建てられ、昭和一二（一九三七）年に当初の社殿を風雪から護るために外側の社殿が覆屋として建てられたものである。五ノ沢神社の社殿も深川市の芽生神社のように祠を保護するために建てられた可能性が考えられるのではないだろうか。



社殿内の祠

石がすべて取り換えられているとすれば、壁や床などの部材の取り換えなどという「改築」の範囲をではなくまさに「移築」が行われたことが推測される。

五 まとめ

今回の調査では、五ノ沢神社の社殿が昭和三六年に八の沢の伊夜日子神社の社殿を移築したものであることがほぼ確認できた。

しかし、今回の調査は社殿の内外を目視で確認しただけであり、軒下や屋根裏は床板や天井板を外す必要があったため行っていない。そのため「移築」がどのようなものであり、どの程度伊夜日子神社の部材が生かされているのか、また棟札の存在や祠に墨書などがないかなどについての調査は不十分である。今後はそういった調査が必要になると考えられる。

五ノ沢神社はその社殿が八の沢にあった伊夜日子神社の社殿を移築したものであるという点が目目されがちのようである。しかし内部にある祠が明治三五年の創建時のものである可能性があることはもっと注目されて良いであろう。

最後にご多忙中、調査に協力いただいた青木恒夫氏に御礼申し上げます。

注

注一 北海道神社庁誌編輯委員会編 一九九九 北海道神社庁誌

八一〇頁

注二 石狩市郷土研究会編 二〇〇三 石狩の碑第三輯 石狩市郷土

研究会

注三 石狩市編 一九九七 石狩町誌 下巻 石狩市。四〇一頁

四 社殿本体

社殿本体は屋根のトタンの張替え、ペンキの塗りなおし、壁板の交換などの修理が幾度も行われていることが見て取れた。軒下の東石には、いくつかは軟石がみられるが、ほとんどがコンクリート製のものが使われている。これは明治四三年のものではなく昭和三六年の移築時に置かれたものではないかと感じられた。

昭和三六年の寄付者名板に「五ノ沢神社改築」となっているが、東

明治四二年神社建築寄附人名

神社建築

寄附人名

一	金	壹円宮地	嘉屋市太郎	一	八拾錢	中川宇之助
一	金	宮地	■田砂太郎	一	七拾錢	平田常次
一	金	貳円五拾錢	山谷宇之助	一	七拾錢	石山■志太
一	貳円	林田清次郎	中尾■助	一	六十錢	米村吉太郎
一	貳円	会津屋	赤■千三	一	六十錢	中野■助
一	參円	■郎支店	有馬西松	一	六十錢	福出■和五郎
一	壹円五拾錢	吉井直吉	岩本力■	一	六十錢	佐々木良助
一	壹円參拾錢	高橋庄吉	藥師吉榮太	一	六十錢	川越勘之助
一	壹円參拾錢	仲■德平	松林松伐	一	六十錢	清水一■
一	壹円	金沢戈吉	村上幸助	一	六十錢	水沢宗太郎
一	壹円	宮崎熊太郎	中渡仁八	一	六十錢	金沢■吉
一	壹円	鎌田國平	宮本シモ	一	五十錢	嘉屋平吉
一	壹円	大野榮■	鈴木寅吉	一	五十錢	■井■平
一	壹円五拾錢	関村恭一	北畑小市	一	五十錢	■藤吉
一	壹円	櫻喜三郎	■■	一	五十錢	中村吉工門
一	壹円	香月武夫	■■	一	五十錢	宮崎庄五郎
一	壹円	■村熊吉	■■	一	五十錢	
一	壹円	小野太郎吉	■■	一	五十錢	
一	壹円	■治作	■■	一	五十錢	
一	壹円	村田■政	■■	一	五十錢	
一	八拾錢	渡辺龜次郎	■■	一	五十錢	
一	九拾錢	■田熊吉	■■	一	五十錢	
一	八拾錢	古■吉太郎	■■	一	五十錢	

明治四拾貳年

一	五十銭	田澤
一	五十銭	浅井万吉
一	五十銭	宇山建造
一	五十銭	五十嵐
一	五十銭	関川徳一郎
一	五十銭	永沢常作
一	三十銭	小三造
一	三十銭	小川平吉
一	三十銭	松川與一郎
一	三十銭	水永
一	三十銭	石川浅吉
一	三十銭	小林次郎
一	三十銭	北村モヨ
一	二十銭	村源太郎
一	二十銭	内浅之
一	二十銭	北本喜左工門
一	二十銭	松川
一	二十銭	渡辺
一	五十銭	小川平次
一	二十銭	中野喜吉
一	二十銭	松屋
一	十銭	菓子屋園
一	三十銭	四髪

昭和三六年五の沢神社改築寄付芳名
五の沢神社改築
寄付芳名

一	金	四、〇〇〇圓	岩本宗吉
一	金	四、〇〇〇圓	渡辺 勇
一	金	四、〇〇〇圓	惣万基次
一	金	四、〇〇〇圓	松林外喜雄
一	金	四、〇〇〇圓	浦 義男
一	金	四、〇〇〇圓	青木恒太郎
一	金	四、〇〇〇圓	山谷徳太郎
一	金	三、五〇〇圓	市川軍治
一	金	三、五〇〇圓	嘉屋徳光
一	金	三、五〇〇圓	村上晴雄
一	金	三、五〇〇圓	嘉屋重義
一	金	三、〇〇〇圓	角田彦治
一	金	三、〇〇〇圓	岩本善太郎
一	金	三、〇〇〇圓	米村信義
一	金	三、〇〇〇圓	山谷信治
一	金	三、〇〇〇圓	嘉屋 睦
一	金	二、五〇〇圓	大村勇次郎
一	金	二、五〇〇圓	山西清助
一	金	二、五〇〇圓	金沢一生
一	金	二、五〇〇圓	清水清一
一	金	二、五〇〇圓	清水由太郎
一	金	二、〇〇〇圓	渡辺 操
一	金	二、〇〇〇圓	岩本忠蔵

- 一、金 二、〇〇〇圓 岩本政治
- 一、金 二、〇〇〇圓 玉木正秀
- 一、金 二、〇〇〇圓 古谷勝喜
- 一、金 二、〇〇〇圓 中野玉枝
- 一、金 二、〇〇〇圓 中野吉次郎
- 一、金 二、〇〇〇圓 村上幸光
- 一、金 二、〇〇〇圓 中村寿夫
- 一、金 二、〇〇〇圓 中村重義
- 一、金 二、〇〇〇圓 佐々木今朝雄
- 一、金 二、〇〇〇圓 松本崑知雄
- 一、金 二、〇〇〇圓 星 豊治
- 一、金 二、〇〇〇圓 松本貫寿
- 一、金 二、〇〇〇圓 青木善吉
- 一、金 二、〇〇〇圓 山田勝吉
- 一、金 二、〇〇〇圓 渡辺佐久平
- 一、金 二、〇〇〇圓 学校職員(越田 西山 神)
- 一、金 一、五〇〇圓 南部 清
- 一、金 一、五〇〇圓 宮原静雄
- 一、金 一、〇〇〇圓 外山一男
- 一、金 一、〇〇〇圓 山田勝雄
- 一、金 一、〇〇〇圓 山田市太郎

篤志寄付芳名

- 一、神社及備品一式

北宝石油会社

- 一、鳥居材 町役場
- 一、金 二、〇〇〇圓 中島常吉
- 一、金 一、〇〇〇圓 岩本力太郎

- 一、金 一、〇〇〇圓 平井良子

- 一、御簾一垂 南部 清

- 一、神殿幕 山谷信治

- 一、御霊代用具一式

- 渡辺 勇

- 惣万基次

- 青木恒太郎

- 松林外崑雄

- 一、神社資材 岩本忠蔵

- 渡辺 勇

- 岩本宗吉

- 金沢一生

- 嘉屋徳光

- 大村勇次郎

落成記念

昭和三十六年九月四日

60年にわたる郷土研の宝を電子化し、公開共有へ

石黒 隆一

はじめに

石狩市郷土研究会が60周年にわたって蓄積してきた知的財産は、地域の宝である。印刷物として多くが現在まで残され、石狩の地域史を学ぶ原典資料として活用されてきた。

この宝を、紙とは別の電子データという形で保存しインターネットで公開することを、平成29年度の総会で承認していただき、作業を進めてきた。令和2年1月16日には、石狩市郷土研究会ホームページを公開し、現在も情報公開を進めている。具体的な事例を通して、この取り組みの意義や可能性を考えたい。



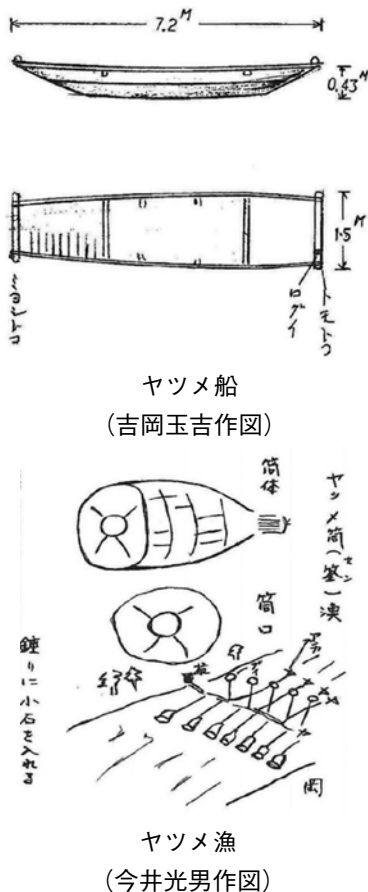
石狩市郷土研究会ホームページ。「石狩市郷土研」で検索を
<https://www.ishikari-kyoudoken.com/>

電子化した「いしかり暦」の活用事例

情報を電子化することで、効率的に情報を検索することが可能となる。記念講演をお願いするために関秀志先生を訪問した際に、いしかり暦の全文電子化について説明させていただいた。先生が最近取り組んでいる「石狩川のヤツメうなぎ」について、これまでどのような記録が残されているかを調べてみた。検索窓に「ヤツメ」と打ち込むと次のような資料が表示された。

- ① 第9号 「女船頭だったころ 松本ハナ談」 吉本愛子 高瀬たみ
- ② 第26号 「昭和初期から昭和20年代までの石狩市の漁船について」 吉岡玉吉
- ③ 第29号「似せられ若衆」 今井光男
- ④ 第30号「撮影紀行・河口の町石狩」 板東忠明

①は渡船場の船頭をしていた女性の回顧談。ヤツメ漁が石狩川の風物詩であったことが伝わる。②は、石狩の漁業の生き字引である本会会員の吉岡玉吉さんが漁船の特色という視点でまとめた論考の中に記されたヤツメ船の詳しい特色。ご自身の絵が示されている。



③は本会会員の今井光男さんが鮭漁と共に家業として経験したヤツメ漁の詳細を手書きの図を含めて記録した資料。④は、板東さんが昭

和後期に石狩に通って撮影したヤツメ漁写真と携わった人々のエピソード。いっどこで撮影されたかはつきりしている写真の価値は高く、この後、改めて板東さんから関先生に写真を提供していただくことになった。



14 屋内に干されたヤツメウナギ (1978・12)

写真 板東忠明

この後、関先生からいただいた電子メールを一部紹介させていただきます。

「今晩は。昨年12月には、石狩のヤツメウナギ漁の写真の件で大変お世話になり、誠にありがとうございました。改めてお礼申し上げます。石狩市郷土研究会のホームページ開設、おめでとうございます。また、「いしかり暦」の総目録、村山家文書目録のデータ化も素晴らしい事業で、敬服いたしました。ご苦労様でした。郷土研究会の事業、活動内容を、このような形で一般にPRするとともに一層の活用を図ることは大変重要で、意義のあること存じます。さすが、伝統のある貴研究会にふさわしいお仕事と、感じ入りました。」

いしかり暦創刊号から第32号までの1910ページには、石狩の生きた歴史が記録されている。今までだと、手持ちの号以外は図書館まで行って見当を付けながら探さなくてはならなかったが、電子データとすることによって、調べたいと思う言葉を検索すれば瞬時にその知見を活用することができる。積極的に活用していただきたい。

村山家文書を電子データ化し「村山家文書データベース」を作成

村山家文書は、石狩の場所請負人を務めた村山家が残したおよそ2500点の資料である。幕末から明治初期の記録が非常に充実しており、幕末期に幕府が行った蝦夷地経営の詳細を明らかにする原典的資料として極めて高い価値を持っている。

石狩市郷土研究会の村山耀一会長は場所請負人・村山伝兵衛の直系十代目に当たる。本会では定例的に村山家文書を読む会を開催し、文書の解読と歴史的な意味の分析に努めている。

さて、村山家文書は、村山会長が昭和59年に、当時の北海道開拓記念館に寄贈した1000点余りと、北海道大学附属図書館北方資料室がそれに先んじて経路不詳で収蔵し、本会の故長谷川嗣氏が精力的に調査された1500点余りが、二カ所に分散して保存されている。それぞれに、収蔵資料目録が作られ発刊されているが、次の点で活用するには困難な面があった。

①二つの館独自の項目で目録が作られているため、統一性がなく活用に制約がある。

②活字の出版物なので、データの並べ替えや、検索が難しい。

一方、原文写真と活字目録がマイクロフィルムに記録されており、さらにマイクロフィルムをTIFF形式の画像に記録したCDが石狩市民図書館を通して関係者である村山家に提供されていた。

このことから、今回、活字データをOCRによってエクセルデータに変換し、TIFFの原文写真を複数ページのPDFデータに変換して、リンクで結びつけることにした。また、すでに解読していた現代語訳もPDFデータとして、同様にリンクで結びつけることにした。

既存の文書目録では、開拓記念館が「収蔵番号」と村山資料としての「整理番号」(1〜…)、北大が村山資料としての「通し番号」(1〜….)としていた。石狩市民図書館が、両者を収録して「村山家資料目録」を作成した際に、通し番号としての「索引番号」を付加し

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
1	所	種別	種別	収蔵番号	収蔵年	資料名	著者・作成者・表出人	宛先	作成年	西暦	概要	分類	注	注
155	0154	開拓	148	10000330	▲	巳年石狩御場所勘定帳			安政5年2月	1858年				
162	0161	開拓	150	10000100	000001	安政五午年石狩改革一件(全①~⑩) 原文データは、この行の「原文」から表示	竹内下野守 堀 藤部守 村垣淡路守	(老中)	安政5年	1858年	※			
163	0162	開拓	150	10000101	▲	① 安政五午年石狩改革一件西地石狩場所改革仕儀議申上候書付	竹内下野守 藤部守 村垣淡路守	(老中)	安政5年	1858年	※			
164	0163	開拓	150	10000102	▲	② 申渡案		阿部屋傳次郎 他	安政5年	1858年		場所請負人を罷免		
165	0164	開拓	150	10000103	▲	③ 西地石狩場所改革仕儀二付附物 種取船番職之請附候書付	荒井金助		安政5年4月	1858年		直廻について		
166	0165	開拓	150	10000104	▲	④ 石狩場所直廻之儀二付相伺候書付	荒井金助		安政5年4月	1858年		直廻について		
167	0166	開拓	150	10000105	▲	⑤ 奉差上御請書之事	阿部屋傳次郎	石狩御用所	安政5年5月	1858年		元小屋維持の配慮依頼		
168	0167	開拓	150	10000106	▲	⑥ 覚	阿部屋傳次郎	石狩御用所	安政5年5月	1858年		付属建築物について		
169	0168	開拓	150	10000107	▲	⑦ 乍恐以上上書御奉申上候	阿部屋傳次郎	石狩御用所	安政5年5月	1858年		口上		
170	0169	開拓	150	10000108	▲	⑧ 海岸漁場割渡書付			安政5年4月	1858年		漁場を出稼ぎ人に割渡す		
171	0170	開拓	150	10000109	▲	⑨ 石狩漁場請目 差上申御請書之事	石狩御用所	阿部屋傳次郎等	安政5年5月18日	1858年		出稼ぎ人に示す案目		
172	0171	開拓	150	100001010	▲	⑩ 乍恐書附奉申上候	石狩御用所	阿部屋傳次郎等	安政5年5月18日	1858年				
173	0172	開拓	150	100001011	▲	⑪ 乍恐以書附奉申上候	山形屋代 仁三郎	石狩御用所	安政5年	1858年		秋味		
174	0173	開拓	150	100001012	▲	⑫ 奉差上御請書之事	濱役 勝右衛門	石狩御用所	安政5年	1858年		小遣		
175	0174	開拓	150	100001013	▲	⑬ 以上上書御奉申上候	松前枝ヶ崎町 増藏		安政5年	1858年		直場所		
176	0175	開拓	150	100001014	▲	⑭ 松前家来へ御達覚	下野守	6名	安政5年	1858年		家来への通達		
177	0176	開拓	150	100001015	▲	⑮ 乍恐以上上書奉申上候	松前枝ヶ崎町 増藏		安政5年5月	1858年				
178	0177	開拓	150	100001016	▲	⑯ 乍恐以書附奉申上候	山形屋代 仁三郎	石狩御用所	安政5年9月	1858年		直廻と沖の口役所口談		
179	0178	開拓	150	100001017	▲	⑰ 乍恐以書附奉申上候	松前枝ヶ崎町 増藏	石狩御用所	安政5年10月	1858年				
180	0179	開拓	150	100001018	▲	⑱ 石狩場所改革之儀二付相伺候書付 1	荒井金助 城六郎		安政5年11月	1858年		直廻と沖の口役所口談		
181	0180	開拓	150	100001019	▲	⑲ 石狩場所改革方取計之儀申上候書付	荒井金助 城六郎		安政5年11月	1858年		改革方針		
182	0181	開拓	150	100001020	▲	⑳ 石狩場所改革之儀二付相伺候書付 2	荒井金助 城六郎		安政5年11月	1858年		直廻 役宅		
183	0182	開拓	150	100001021	▲	㉑ 以内状得御意候然在	荒井金助	内山栄五郎様	安政5年3月8日	1858年				
184	0183	開拓	151	10041400	000414	安政五午年書上絵図面			安政5年	1858年		石狩川中・下流漁場図		
402	0401	開拓	363	10011800	000118	差入甲一札之事	村山吉太郎 村岡兵助	村山伝次郎 利兵衛	安政5年5月	1858年		借金返済約定		
767	0765	開拓	713	10008400	000084	地面借用証文之事	鬼田屋三三郎等1名	阿部屋作太郎	安政5年5月	1858年				
1207	1206	北大	2954	20005200		金100両也吉祥丸造船代内請取書	町年寄野庭文右衛門		安政5年5月	1858年				
1687	1686	北大	1434	20119800		金100両也万屋・阿部屋分内金受取覚	金100両也 利金受取覚以後1年1割の金利の納	橋崎 隆監	安政5年7月12日	1858年				

↑ Excel 形式に整理した「村山家文書目録」文書の他、実物資料も含め総点数は 2525 点。

上表はフィルタ機能によって、1858年の文書を選択表示している。セル3列目を見ると、開拓記念館文書と北大付属図書館文書が併せて表示されていることがわかる。右の◆と■は、それぞれ原文写真と現代語訳へのリンクボタン。項目には資料作成者、宛先、適用、分類などを設けており、活用の幅が広がった。

ている。「索引番号」は、開拓記念館収蔵分が(0001~0902)北大附属図書館所蔵分が(0903~2247)になっている。新規の村山家文書データベースでは、それ等の番号を残したうえで、石狩市民図書館版の「村山家資料目録」に収録されなかった文書以外のいわゆる「生活資料」112点と、村山家や各地の資料館や図書館が収蔵する文書を加え、統一の「No.」(表の左端)を付けて、資料を緊密に一体化することとした。現在「No.」は、0001から2525となっている。

次に、データベースの特色と活用の事例について説明したい。2500点余りの文書を作成された年を西暦で表示することによって、その項目を作成年を昇順でソートすれば、開拓記念館と北大等の区別なく、資料を一覧することができる。同様の操作で、特定の年だけを選択することができる。安政5年午年(1858年)を選択してみると、上表のように石狩改革に関係する文書が表示されてくる。「石狩改革の一件」というまとまった文書は、小項目ごとに21件の文書から成り立っている。石狩改革は、日米和親条約に基づく箱館開港を控え、1855年に蝦夷地を再度直轄した幕府が、1858年に実施した改革である。経済的に絶大な力を持っていた場所請負人「村山家」を罷免し、石狩役所が直接漁場を管理する「直捌」を実施。出稼人を募集して、漁場を分割することが、経済面の柱であった。21件の文書の中に「海岸漁場割渡書付」がみられる。出稼ぎ人にとどのように場所を分割したかがわかる資料である。同じ年に「安政五午年書上絵図面」という文書が見える。「絵図面」の文字通り石狩川河口域の地図であり、割渡書付と合わせて出稼ぎ人への漁場配置が具体的に把握できるようになっている。データベースから年ごとに文書を選択することによって、文字資料と地図を一体に利用できたことになる。

このデータベースでも検索機能を活用することが可能である。「鯨・ニシン」で検索すると、「ニシン場出稼ぎ人数」のように経営規模が

わかる資料などの他「ニシン場道具控」といった具体的な漁法に関する資料を発見することができる。人名や地名を入力することで、テーマを絞って資料を探すことが可能である。

このデータベースをDVDにして、石狩市民図書館時代に、「村山家資料目録」の作成に尽力された現函館中央図書館の丹羽秀人館長にお送りしたところ、次のようなお手紙をいただいた。一部をご紹介します。

「昨日村山家文書目録他の資料を拝受いたしました。本当にありがとうございます。早速夕べDVD・ROMを自宅のパソコンにセットして、いくつかの文書を見ました。研究、解読の当初の状況を知っているだけに、これだけの多くの資料にまで発展させた「村山家の文書を読む会」の皆様には敬意の思いしかありません。石黒先生が郷土研究会の事務局長になりとても活動が広がっていると、石狩の方々から聞いています。ご苦労様でした。私も函館に来て5年が過ぎました。明治から郷土資料収集に力を尽くした図書館ですから、内部に入ると驚くような資料を目の当たりにする機会を得ることもできました。石狩の皆様にもよろしくお伝えください。」

インターネットで情報を公開

いしかり暦や村山家文書データベースは、令和2年1月から開設した石狩市郷土研究会のホームページに公開している。その他、地図部会が収集した石狩の古地図や、いしかり暦以外の発刊物を掲載している。

また、石狩市総務部情報政策課から提供いただいた石狩町誌(4冊分)、石狩町年表、厚田村史、浜益村史、石狩百話なども公開させていただいている。最近では、創立60周年を記念して刊行した「石狩市小中高等学校校歌集」の本文と53校の音源も収録し公開した。どこにおいても、パソコンやスマホから校歌を聴くことが可能となり、好評



↑電子データとした石狩市郷土研究会の宝(石狩市民図書館)。
上が、「いしかり暦」等の刊行物。下が村山家文書の原文画面集と現代語訳。これを居ながらにして活用できるメリットは大きい。

である。こうした公開情報の追加はフェイスブックなどのSNSを通して、その都度発信している。
これによって、石狩市民だけでなく、地域史に関心を持つ全国の皆さんに情報を提供することが可能となった。こうして生まれた交流で、私たちが受け取った有益な情報はすでに数多くある。この交流がきっかけとなって入会した会員もいる。
さて、会の資産を電子化する作業を、どちらかというと対外的な広がりという観点から考えてきたが、会員にとっても有益であるというご意見をいただいた。古文書部会の代表として、「村山家文書を読む会」

を永年にわたって精力的に運営されている安井澄子さんから次のようなメールをいただいた。

「今まで私達が手にしていた古文書は、コピーのコピーの、その又コピーのコピーの様な文書でしたから、DVDをパソコンで開いたときは、その鮮明さに心底驚きました。図書館が我が家に来た様なものです。居ながらにしてこんなことが出来るなんて想像もできませんでした。この賜物を有難く享受させていただきます。(一部略)」

情報の電子化と公開共有は始まったばかりであるが、60周年を迎えた石狩市郷土研究会の新たな発展にとって可能性を持った手段である。例会の中止が余儀なくされ、実地調査もままならず、直接多くの方と交流することが難しい現状ではあるが、今後も電子化した情報の効果的な活用の可能性を探っていきたい。

資料紹介「石狩町ニチボー女子工員募集経過」

三島 照子

この資料は、石狩市郷土研究会の創立会員で、「いしかり暦」の名付け親でもあった故長谷川嗣さんの家族の方が図書館に寄贈された多数の資料の中にあつたものです。

この寄贈資料については一昨年、田中實先生とともに石狩市にとって、また石狩市民図書館にとって有用なものを選別する作業を行いました。そのなかにこの「石狩町ニチボー女子工員募集経過」の資料が発見されました。昭和四〇年代にあつた石狩町及び厚田村での事柄として、「いしかり暦」に紹介したいと思ひます。

資料の作成者は元郷土研究会会員の故小川茂氏で、小川氏が調査されたレポートが一枚、石狩地区季節社員名簿、ユニチカ百年史（平成三年六月発行）から年表の抜粋のコピー、ユニチカ本社人事部、岐阜工場、同じく岐阜県のある関ヶ原工場、垂井工場、愛知県犬山工場、ユニチカ北海道人事出張所の職員の名刺のコピーがあります。

名刺には、ニチボー株式会社、ユニチカ株式会社と印刷されているものがあり、調べてみると昭和四四年一〇月に、ニチボー株式会社と日本レーヨン株式会社が合併しユニチカ株式会社と社名が変わっています。

石狩地区季節社員名簿には、赴任工場として関ヶ原工場・岐阜工場・垂井工場といずれも岐阜県にある工場の名が記載されています。小川メモによれば、季節社員名簿は無かつた為平成四年当時のユニチカ札幌出張所に頼んで調べたものです。

資料に添付された小川メモには、ユニチカの募集は直接役場に来てその後厚田農協に、石狩農協には農業労働者受入協議会が取りまとめていたことが記されています。また、紡績工場に行った人達数人に聞き取りもしていたようで、賃金は一日三百五十円だったことやユニチ

カには夜学校があり、勉強したい人は夜学校に行くこともできた。ということがメモからわかりました。なお、小川茂氏は昭和三四年四月から同協議会の会長をされています。

昭和四二年から紡績工場の女子工員の募集が始まり、社員名簿から見ると昭和四八年が最後となっています。名簿には、年度・工場名・氏名・戸籍筆頭者・住所の順に記入されています。

石狩地区季節社員名簿

昭和四二年

石狩町・・・一七名・・・関ヶ原工場
厚田村・・・一五名・・・〃

石狩町・・・九名・・・岐阜工場
厚田村・・・一〇名・・・岐阜工場

江別市・・・一三名・・・工場名不明
昭和四三年

石狩町・・・九名・・・関ヶ原工場
厚田村・・・八名・・・〃

石狩町・・・二名・・・岐阜工場
厚田村・・・五名・・・〃

江別市・・・一四名・・・〃
昭和四十四年

石狩町・・・一四名・・・関ヶ原工場
厚田村・・・五名・・・〃

石狩町・・・八名・・・岐阜工場
厚田村・・・一五名・・・〃

江別市・・・一〇名・・・工場名不明
昭和四五年

石狩町・・・一二名・・・関ヶ原工場

厚田村・・・七名・・・
 石狩町・・・五名・・・岐阜工場
 厚田村・・・一名・・・
 江別市・・・九名・・・工場不明

昭和四六年

石狩町・・・九名・・・関ヶ原工場
 厚田村・・・一〇名・・・
 石狩町・・・二名・・・岐阜工場
 厚田村・・・六名・・・
 江別市・・・八名・・・

昭和四七年

石狩町・・・七名・・・関ヶ原工場
 厚田村・・・四名・・・
 厚田村・・・一名・・・岐阜工場
 江別市・・・九名・・・

昭和四八年

石狩町・・・二名・・・関ヶ原工場
 厚田村・・・三名・・・
 厚田村・・・四名・・・垂井工場

以上、四二年から四八年までの七年間の石狩地区季節社員名簿ですが、四七年まではすべて女性でしたが、四八年の垂井工場には三名の男性が行っています。また、二年三年と続けて行っている人達がいるということも名簿からわかりました。

左記の文章は小川茂さんが書かれレポートです。

石狩町ニチボー上司工員募集経過

内地の紡績工場では人出が足りなく、農閑期になると働く人を石狩町、農協を通して、農村に呼びかけて募集していた。

昭和三十八年以降、農機具の進歩で、田植機又コンバイン（稲刈り来）導入で手不足の解消となり、秋の農作業が終わり次第、余暇があり、他へ働きに出る人が出来、農家経済のため、この場臭を利用し、岐阜工場ニチボーに、その後、社名が改名されて、ユニチカ紡績工場となり、多数の人が応募して行く。稼働期間は約一〇〇日位。当時の竹中義雄所長、職員の大野典夫労務係と、私小川茂と昭和四十二年より昭和四十八年まで、右岸地区一帯と聚富村の一部を歩いて募集した。厚田及び望来地区は、厚田村農協組合長菅原鶴松氏が募集した。

募集名簿が無いので、ユニチカ札幌出張所長勝浦毅氏（現在の所長）に頼んで調べて頂く。

尚、正月前に働きに静岡のみかん採り、又、かん詰工場へは、種市農協参事と頼んで現地へ労務者を向けた。花畔方面は、ユニチカ岐阜工場の職員が直接募集した。

平成四年十一月十六日 調査は小川茂の資料による。

以上

「古文書」と私の愉しみ方

安井 澄子

私は退職し花川に住むようになり石狩市郷土研究会に入会。それまでは全く歴史にも郷土史にも無縁の生活で、漢文などは初めての出会いで唯々「ミミズが這っている」と言う表現がぴったりの文書綴りでした。でも一八年も古文書とにらめっこしていると、もう手も足も出ないと諦めきって投げ出していた文字が一ヶ月も過ぎてからはたと突然ミミズの線が文字に見えてきたりして、それは不思議でなりません。文書の中の一、二行の文面と歴史年表を照らし見ると、当時の出来事と村山家の生活のあれこれと想像を巡らせるのは、別の楽しさがあります。文書に書かれていない裏側が浮かんでくるのです。

過去の善悪を評する知識も資格もない自分でも、唯歴史の事実を正確に受け止めたいと思います。

田中實先生の日頃の厳しく「原文に当たりなさい。出典を明示しなさい。」とおっしゃられるお言葉を思い出すたびに、歴史家でも、研究者でもない素人の興味本位の古文書の愉しみ方は邪道で許されないのではと思いつつも虜になっています。

例えば、初代村山傳兵衛が娘くめ（糸）の婿養子にと迎えた二代目理兵衛が突然大坂へ往つてしまい、生涯を大坂で終えている。代々書によると一七三八年妻くめが三代傳兵衛（長男・直舊なおもと）を出産。二七四〇年長女を出産後直ぐに一九才にて死去してしまつた事と、外に翌一七四一年の寛保津波（松前・江差で三千人の死者があり、渡島大島が出現、破船一五二一艘）という大惨事に遭遇した為ではないのか？とか。

又、別文書から、後に次男治兵衛（直政）が「理兵衛の跡目相続として分家」しているが、直舊の代々書には出てこない。直舊と生年が

同じということは双子だったのか？昔は縁起を担いで双子の一人はひそかに捨て子同然に他家へ貰われたのか？

治兵衛直政は松前藩の桜井仁右衛門に育てられたのか？仁右衛門の娘豊と結婚し、孫の喜佐（佐幾子）は一四代松前藩主章廣の次男見廣ちかひろの側室となり、一五代藩主良広と一六代藩主昌広をもうけている。

六代治兵衛は長崎で医学を修め眼科医になっている。他の子孫も松前藩に仕えている。二代治兵衛の亡き後、治兵衛の娘（吉）が幼少のため後見人として越前敦賀の豪商の子息（四十物屋吉兵衛）が入夫し、三代治兵衛を継ぐが、四代は吉の子が継ぎ、吉兵衛は手代に徹し実子達は阿部屋武右衛門家を興し豊吉・豊作・勇作……と代々石狩・厚田で村山家を支えた。子孫は現在も緑ヶ原に住む。

その二 三代傳兵衛の時代、国後目梨の乱後、村山家の最盛期三十五ヶ場所（石狩・宗谷・樺太・斜里・国後・霧多布等）の請負場所の支配人として活躍していた四代専八（傳吉）が、一七九三年（寛政五年）三五才の若さで突然死去している。それも前年松前に大暴風雨（村山家では持船・雇船二艘破損とある）。これも文書には死因はどこにも出てこないが、これらの船を守るために大怪我をしたのではと勝手に想像を膨らませてみたり。

その三 阿部屋の支配人二代村山長三郎が一七九二年（寛政四年）に通詞上原熊次郎と共に『蝦夷方言藻汐草』を著すが、結局後に最上徳内により出版され、勝知文著『東夷周覽』にも「地名の訳は通詞阿部長三郎・上原熊次郎に由て正す」とのみ。

外にも子供の頃から阿部屋に勤めその後支配人になった能登屋圓吉も、何十年もアイヌの人々と仕事をしていく中で記録されたかなり正確なアイヌ語の記録『番人圓吉蝦夷記』を残していたという事実も余

り知られていない。

その四 六代村山傳兵衛(直之)が一八二〇年(文政三)四年にかけて)漁場経営を栖原屋茂八に任せ津々浦々の取引先を訪ねる全国行脚の船旅に出る。その文書を解読していた時は優雅な旅行と思っていたら、後に勉強した文書では、一八一七年から石狩場所で疱瘡が蔓延し労働力のアイヌが多数死亡(八三三人)し、村山家は経済危機に陥っていて、所有船五艘のうち三艘を売却している。又、前年暮れに「村山家身代取締のために五代利兵衛呼び戻しの勧告書」を松前藩から受け取っていた。直之の父五代利兵衛は一八〇一年(享和元年)長々病弱を理由に越前敦賀の生家西岡家に還っていた。次男傳次郎(直之の弟)を連れて。しかしついに父利兵衛も、弟傳次郎も正式に西岡家の跡取りとして決め、二人共呼び戻すことは出来ずに仕舞った。

当時、六代村山傳兵衛は松前藩の町年寄御收納役方元締役で、役柄「傳兵衛が傳兵衛を取締まる」ことは不都合なので、漁場請負人は名目上は弟の傳次郎名を使っていた。実質は分家の長三郎・甚六・傳吉・傳四郎・圓吉等が支配人として現場を仕切っていた。請負人は村山家だったが実質は栖原家が暫く経営している時期もある。

一八二九年(文政一二年)正月には「年限議定書」なるものを本家として同苗一同(村山家本店・各出店・別家)へ宛て向こう一二年間の暮らし方共万端儉約に心がけるよう細々と申し渡している。

その後、「廻船問屋部は利兵衛」と「漁業部は傳次郎」と定め代々襲名させるべく娘に婿養子を取り身内を固めようとするがすべて婿殿も早世している。

その五 一八三四年(天保五年)元旦石狩地方に強震。二月二二日まで毎日地震が続き、二月九日にはマグネチュード六・四と記録されている。これにより石狩元小屋及び倉庫等が破壊され、勤番の侍は

オタルナイに引揚げ、稼方・アイヌも出稼所であるオタルナイ・アツタ両所に避難している。

一八四五年(弘化二年)石狩川氾濫。村山傳次郎は越後より治水に長じた者一〇名を雇い、安政四年に至る一〇余年間堤防の修築・新築に努力している。

一八五七年(安政四年)傳次郎は私費で銭函く千歳間の道路開鑿・対雁く石狩間の道路開鑿も行っている。度重なる天災・火災・疫病にみまわれながらである。

その六 一八五八年(安政五年)の石狩改革はロシアの暴挙を伴う南下政策と開国を迫るペリーの来航等々、松前藩では蝦夷地を護りきれないという事で幕府の直搦きとなり、それによって各地の場所請負人たちは漁場を失い消えていき、個人営業の小さな漁師による網元の出現へと替わっていく。

その際、松浦武四郎や箱館奉行等から幕府に報告書が出されているが、村山家は「アイヌの撫育が悪い」①ユウフツのアイヌを長期間に亘り石狩の漁場で酷使したためアイヌの人口減少に至らしめた。②番人達のアイヌ女性への蛮行。③天然痘(疱瘡)の患者に対する手当が無策だった等々。①は春鮭・秋鮭漁の間も築堤工事、建物建設、道路開鑿等々本来なら国がやるべき事を請負人の村山家にやらせ(仕向け)ていた為だし。まだその頃は定住する和人は殆どいなくて労働力はアイヌ人だった。又、開鑿した道路は名ばかりでお粗末であると酷評しているが数ヶ月で数一〇kmも人力で、鉈も跳ね返ってくるような熊笹の藪を切り開いたとしても二年もすれば又原始の山に戻ってしまうことは武四郎等には理解出来ていなかったのではないか。その道を開いたのも荷物を持って案内しているのもアイヌなのにと反論したくなる。今増毛山道や荘内藩の保護管理をしている人たちにはその苦勞が解ってもらえるでしょう。そして一緒に働いた村山家の番人・稼方も

同様に拘束されている。番人は各十三場所に、アイヌの自分稼ぎの受入のために一二月末まで自宅に帰れないでいる。冬に松前に帰ると言うことは死と背中合わせで石狩番屋に戻るのがやっとかと思う。旭川の番人などは越冬している。

②も女性の人権を無視した許されざることだけど、現実には和人の女性達も家族の生活のために虐げられている。明治〳戦後までは遊郭が公認されていた（石狩にも昭和一五年まで貸座敷が実存）。戦後も昭和三年の売春防止法制定まで赤線地帯として存在。現在も「風俗……」と。この悲劇は無言を言わず即死刑という法律でも作らない限り無くならない気がする。

大和民族（日本人）は全員混血児である（北方系・南方系と）。特に秋田美人・博多美人・神戸美人等は遠い昔の混血児の末裔だろう。北海道出身の角界の力士たちの体格をみるとロシア系かなと思ったり。

そしてアイヌ人も和人の血を引き、アイヌの女性に育てられながらも、子供は番人に可愛がられきちんと教育をうけて、地域の立派な指導者になっている人も見られる。

③の天然痘（疱瘡）は一七九八年（寛政一〇年）松前で流行していたのを和人が石狩に持ち込んだとも、一八一七〳八年（文政元年）頃石狩場所で大流行。（アイヌ総人数二二三〇人余のうち九二六人が罹病、八三三人死亡）。けれどその時はまだ医者もおらず、予防接種の方法もなく、患者が出ると「山逃げ」といって患者を残して健康な人が山奥に逃げたという。道南や道東と違って極寒で一晩に一〳の降雪も珍しくないこの石狩の地では、山逃げのすべは不可能に思われる。明治一八年の対雁アイヌのコレラも然り。今のコロナウイルス同様為す術がなかったのである。

中川五郎治がロシアに連行され六年後一八一二年（文化九年）帰国した際、牛痘接種の技術を習得して接種法を記した書籍を持ち帰って

いる（我が国に初めて牛痘法伝来）が、大野村で初めて牛痘法に成功し接種にこぎついたのは一八二四年（文政七年）である。

病死したのはアイヌ人ばかりではない。厚田の古潭には、死後も家族の元に帰ることもかなわずに、阿部屋武兵衛の一七八四年（天明四年）六月一七日と記された小さいけれど良質な墓碑が風化することなく現存している。

一八四五年（弘化二年）には六代村山傳兵衛の三女と次女が七月二九日と八月二〇日と一ヶ月もおかずに二九歳・三二歳の若さで亡くなっている。この年は静内・三石地方で疱瘡流行とある。

一八五九年（安政六年）四月には廻船問屋部初代を相続した利兵衛（菱次郎・六代傳兵衛の三女の夫）が四一歳で「石狩元小屋で病死して五月一〇日に熊人松前着」とある。

一八六一年（文久元年）石狩御場所勘定帳にも「番人家内帰登付添又次郎より路用返上分受取三兩三歩一朱」とある。これは番人の誰かが重病になり奥さんが付き人と共に石狩を往復したのではと想像される。

その七 明治になって、石狩に日本で初めての缶詰工場が出来たがそれだけが喧伝されているが、内実は経営難で他全道五カ所の缶詰工場ともに、すぐに民間に払い下げになりそれも殆ど閉鎖になっている。

後に村山家も高橋儀兵衛と共に経営に参画しているが、矢張りお荷物になっている文書が残っている。操業期間が秋鮭の二ヶ月半位、缶詰は高価で一般人には普及せず、軍需用品位。外国輸出のためには継続した量産が出来無くて受注出来なかったのが現状のようだった。

高橋儀兵衛が産業博覧会等で賞を受けているのは鮭の燻製等乾物が多い。

その八 明治四一年石狩を去った村山家だが、漁業権は村山コトが

持ち続け、村山家の支配人として石狩へ戻ってきた吉田庄助に受け継がれていく。昭和一六年にはまだ吉田庄助の漁場の漁業権者は村山コトである。

多分、山田文右衛門家と同様戦後の財閥解体にともない不在漁業者として権利を失ったのではないか。

この様に文書と文書が繋がり裏が見えてくると、その必然性に納得したり感心したり反論してみたりと思いが膨らんでいくのです。

以上

(文字数を減らすため、口語体と文語体を混用)

村山家文書 「イシカリ年々勘定帳」分析表

安井澄子

村山家が石狩場所請負人となっていた頃の安政5年の石狩改革を挟んだ前後6年間の収支決算書が残されています。

旧北海道開拓記念館（現北海道博物館）村山家資料目録

整理番号 148 収蔵番号 100003 の 1・3・4・5・7・8

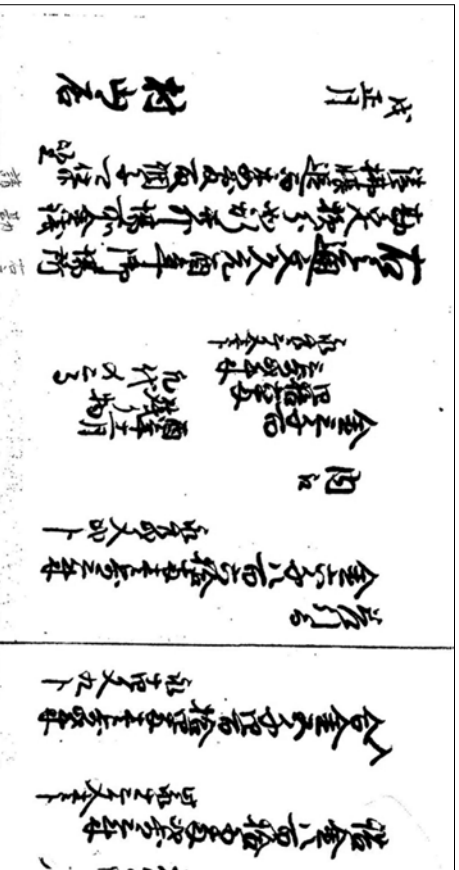
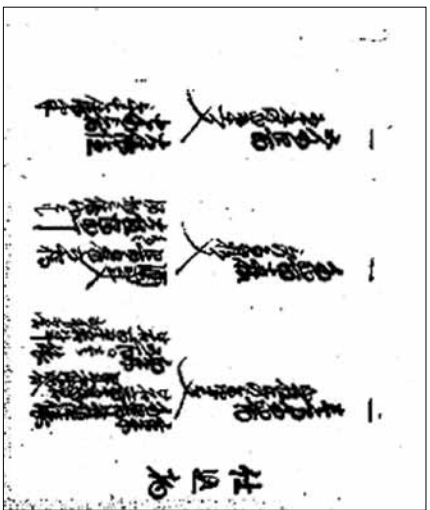
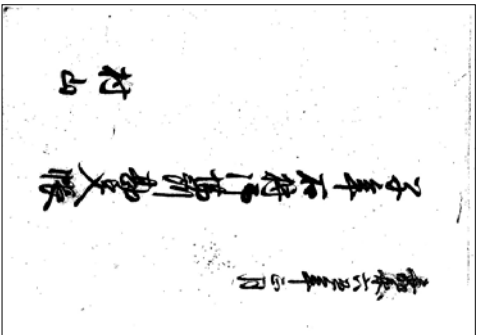
前年の収支決算書を翌年1～2月には書き上げています。別に金銭請拂帳があつて、それを毎年1年分ずつ科目毎にまとめたのが、品名・数量・金額とその勘定の細かさに驚く。筆書きで両・歩・朱・貫・文と十進法でない金銭の合算と繰り上げの煩わしさをそろばんをやったのかと思うと感心します。漁獲物の受入数量も束・尾まで細かい。金銭請拂帳の取調べも受けている。

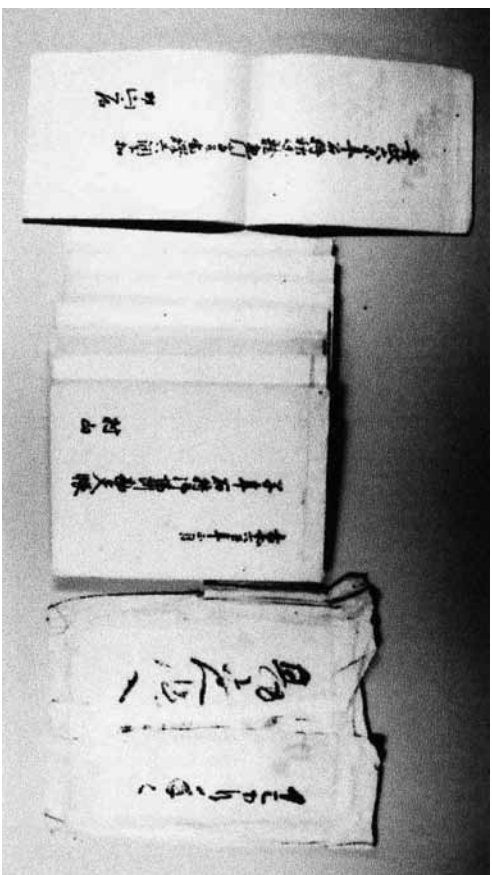
石狩改革後は運上金は納めずに、他の出稼ぎ人同様25%前後の歩役を課され、人馬継立等の差配はそのまま請け負わされているので、今までのような利益は望めず、「後取り」といわれた秋漁終了後のアヌ達の自分稼ぎの受入収入はその年の最後の行で「此外 十一月残り物代金」として一括計上し、翌年の勘定帳ではそっくり同額が支出欄に計上されている。ということは経費として落とすことを認められていたらしい。

原文通り活字にしても収支の全容はさっぱり見えません。算用数字にし、年代別・科目（費目）毎に横並びの表にしてみました。現代の会社の総勘定元帳と同様で経営状況がよく窺い知れます。残念ながら知識不足で何としても判読できません？マークが多々あります。小計・合計の金額が如何しても合致しない箇所もあります。

実際の帳簿の総計より、何を勘案しているのか不明だが大抵は僅かに大きな数で集計されている。* 詰(詰)金 詰(こう)=詰(つ)びる・告げるとも読む。「申告する」の意か、辞書には、「詰」とは別字だが、転用することがあるとあります。

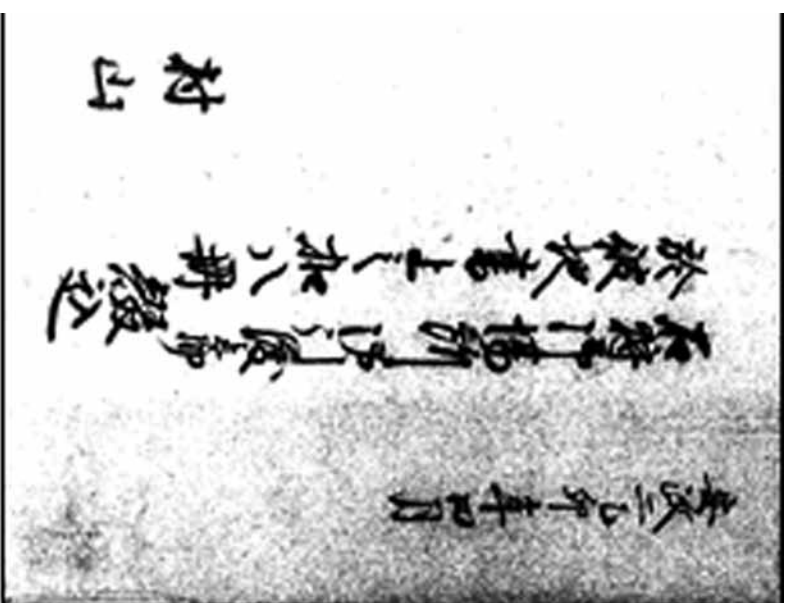
* 勘定帳は6年分のみ1年分が13～4頁に及ぶ





今回取り上げた村山家文書「イシカリ年々勘定帳」（北海道博物館所蔵）は、ひとつの文書ではなく、袋に入ったいくつもの文書で構成されている文書群です。その中には右の写真に示した文書も含まれています。

いしかり暦では、幕末期の石狩場所経営の全体像を知ることができ、貴重な資料として、既にいくつかの文書を読み下して紹介しています。



石狩御場所勘定帳 村山 No.1

収蔵番号 100003 の 1・3・4 安井澄子記

1 両 = 6,800 文 金貨 1 両 = 4 分(歩) 1 分 = 4 朱 錢貨 1 貫文(ノ) = 1,000 文(もん) = (金 1 分) 1 朱 = 250 文 1 匁 = 10 分(もん) 厘 毛

嘉永 5 子年 (1852 年度)		嘉永 6 丑年 正月		安政 4 巳年 (1857 年度)		安政 5 午年 2 月		石狩改革 安政 5 午年 (1858 年度)		安政 6 未年 正月					
(支配人 円吉)						(支配人 円吉)		5 代甚六 林太郎 ソノノ兄							
仕込物		仕込物		仕込物 (品)		仕込物 (品)		仕込物 (品)		仕込物 (品)					
万	千	貫	文	両	歩	朱	貫	文	両	歩	朱	貫	文		
p 2				p 2				p 2							
玄米	1,484 俵	672 石 4 斗 1 升 2 合	1	224	343	玄米	4 斗入 1,912 俵 1 斗 7 升 6 合 5 勺	800.3	70	玄米	1,816 俵 3 斗 5 升 外 4 斗入 厘り	102	3	258	
白米	0,501 俵	195 石 8 斗 2 升 5 合				白米	4 斗入 915 俵 5 升 1 合 8 勺	413.3	149	白米	1,147 俵 1 斗 9 升 2 合	689	1	123	
酒	2 斗入 456 樽		1	273	120	酒	2 斗入 502 樽	192.1	420	酒	2 斗入 335 樽	37	3	34.5	
大坂酒	2 丁					大坂酒	4 斗入 50 挺	62.1	850	大坂酒	35 挺	47	1	150	
酒粕	3 俵														
大俵塩	7,337 俵半		5	459	211	p 3	塩 大俵直り 10,816 俵 6 分 7 厘	959.3	639	p 3	大俵塩 5,363 俵	51	6	3	252
p 3	細網 ^{おさび} 75 箇 正味 1,244 貫 52 匁 外ニ 網渡ちん 468 貫 880 文		3	591	416	細網 ^{おさび} 取合 98 箇 1,786 貫 192 匁 129 両 200 文 網? 10,350 両 渡貫	1052.3	283	細網 ^{おさび} ? ? ? 70 箇 内 672 貫 文 網の渡ちん	868	1			419	
市皮	23 箇 目形 349 貫 400 匁 外ニ 金引 ^{おさび} 南部? ? 類ども			219	540	市皮 3,120 斤 金引 ^{おさび} 7 貫 600 匁	34.2	204	市皮 3,062 斤 5 ト 金引 ^{おさび} 7 貫 500 匁	41	1			79	
味噌	76 樽			280	915	味噌 10 貫入 169 樽 6 貫 580 匁	69.3	64	味噌 10 貫入 204 樽 4 貫 660 匁	80	1			166	
醤油	46 樽					醤油 1 斗入 130 樽			醤油 1 斗入 130 樽						
す	2 入 9 樽					す 2 斗入 11 樽 1 斗 3 升			す 2 斗入 9 樽 1 斗 5 升						
白餅米	22 俵 7 石 5 斗 8 升 7 合		110	618		白餅米 4 斗入 49 俵 1 斗 3 升	26.2	656	白餅米 4 斗入 39 俵 1 斗	25	3			250	
大豆	7 俵		39	482		大豆 4 斗入 38 俵 3 斗 5 合	22.3	236	小豆 12 俵 1 斗 6 升 5 合	8	3			56	
小豆	4 俵					小豆 6 俵 3 斗 1 升 5 合			大麦 3 俵 1 斗 2 升						
大麦	1 俵					蕎麦 麦 黒大豆 大角豆 外			黒大豆 2 俵 8 升 大角豆 3 斗 2 升						
大吸麴	208 俵		550	85		麴 249 俵	99.3	311	大吸麴 111 俵	57	1			107	
白米麴	1 斗														
地麴 ^{おさび} 煙草	33 箇		261	725		p 4 地麴 ^{おさび} 1,780 把 1,576 斤 2 ト 5 厘 保呂? 1,250 玉	21.3	472	地麴 ^{おさび} 煙 37 箇 2,683 斤 1 ト 2 保呂? 13 箇 1,596 玉 阿波粉 3 箱	52	2			250	
南部粉	大 1 箇														
相流	25 挺 同 2 斗入 12 樽		186	30		相木皮 500 丸 1 万把	46.1	500	相木皮 756 丸 15,120 把	65	3			37.5	
相木皮	257 丸					相流 4 斗入 50 挺			香見蓮 250 束 若狭蓮 500 束	125	1			26	
p 4	蓮 1,106 束		579	682		蓮 1,395 束	106.3	356	越中蓮 750 束						
細材繩	200 丸 大間繩 10 丸		382	612		繩 1,150 丸 棕梠繩 93 玉	74.3	223	中間繩 523 丸 酒田繩 502 丸	83	3			27.5	
中間繩	400 丸 酒田繩 324 丸 其外細類								? 羽繩 200 丸 ? 引繩 192 丸						

	草鞋 70 筒 草履 700 足		120	900		草鞋 100 筒 15,000 足 草履 850 足	26	1	600		草鞋 120 筒 井 18,000 束 草履 1,050 足	32	3	265
	表座 5 重 薄へり 2 束 帆座 7 束	70			18	3	1	500		小松表座 6 束 七福座 3 枚 ? 座 15 束 薄へり 20 束 ? 座 2 束	23	2	210	
	木綿 478 反 布 13 反 古手 123 枚	668	965		240	1		733		白木綿 100 反 花揚布 180 反 紅土代染 160 反 古手 380 枚 足袋 70 木綿布 85 反 ? 布 14 反 直田紐一玉	195	3	348	
	総糸 22 丸 ? 糸 繰糸 水引の類	31	270		4	3	1	4		総糸 ? 束 ??? 之類	6	1	6	
	紙墨 筆の類	81	740		39			695		紙墨 筆 硯 帳面の類	38	3	83	
	蛸燭 62 入 10 箱ト 110 丁 三六朱 30 袋 白木?	168	527		31	1		613		蛸燭 17 箱 目形 98 貫匁	31	3	249	
p 5	? 合不つち 作事釘 都加船釘類	154	736		28			57		船釘 132 貫 750 匁 外二 779) 1,000 本 ? ? 60 向	43	2	250	
	家釘 1083 把	155	145		50	1		386		家釘 2,898 王 (把)	50	3	73	
	新規鑄 150 丁 其外鉄物類	215	881		96	3	1	650		鉄物一式	91	3	165	
	明牌 1,293	129	300		37	3	1	545		明牌 801 小樽 100	18	3	340	
	? 膳盆 都而塗物類	160	925		58	6	1	665		塗物類一式	107	2	130	
	素上 14 斤 並日 12 斤 太白 20 斤 玉砂 35 斤 菓子類	79	800		39	2		100		p 6 茶菓子 砂糖代 干物類 漬物代とも	28	3	386	
	素? 玉子 艶ふし料理品 干物の類	64	595		69		1	7		油附木 燈心代	36	3	63	
	黒白炭 57 本 薪 250 本 白 1 斗 1 升 種油 1 斗 5 升	35	204		40		1	543		瀨戸物 類	11	2	131	
	瀨戸もの類	31	850		12			890		瀨戸物 類	11	2	40	
p 6	井戸管 8 本 其外桶 たらへ かすり類	66	844		8	1		210		桶 盥 柄杓 ? 之類	8	2	285	
	阿ら物 小間物の類	80	166		20	2		189		阿ら物 小物代	20	3	58	
	扇袋 200 枚 竹子笠 200 枚 傘 (からかさ) 3 本	31	500		6	1	1	500		蓑笠傘 相? 代共	8	1	55	
	弓張の張箱 丁ちん新規 張替え	23	710		3	1	1	45		弓張 高張り 新規張替え	3	1	350	
	種物類	5	440		2		1	190		p 7 菜種類代	3	3	345	
	菜の類	17	106		2		1	190		種物類	13	1	142	

	万	千	貫	文		面	朱	貫	文		面	朱	貫	文	
					p 6 畳 440 畳 莖呂 254 間	124	1		160		p 5 畳 264 畳 戸 障子 襖 共 144 間	68	3	2	355
					檜材木 768 本切 (脚) 住家 1 棟 板 1,475 間 檜楮紐木 ? 枚 (杉) 檜皮類一式	292	2	1	689		p 7 板紐 枚 (杉) 皮之類	100	2	3	215
檜紐 3,545 束 檜皮 140 間		304		768											
小 以	2	6	897	151	小 以	5,238	2	31	360	諸品代 外二 彦久丸 乘福丸 ? ? 繩尺不用分相渡 合 金	4,723	2	1	7	675
(1 間 = 6,800 文 = 換算)	(3,951 間)				こす 諸 (詰) 金	5,279			水 1118 卜	こす 諸 (詰) 金	4,735				水 287 卜

	両	朱	貫	文		両	朱	貫	文		両	朱	貫	文
p 7 御初懸	64	3		3		45	3	16	86		p 8 金 錢 座			
御運上金	1,000					1,000					御初懸	20	3	
式分積金	20					20								
上乗金 御店取荷物料	39	1				39	1				正金にて下し	40		
											建網戻加金	18		
秋味下り 献上 井 ? ? 残	28					27	2	1	54					
同 江戸御役人様分	40					2	2		37					
巻? 献上并藏残 白? 並? 引 640 本	24	3		68										
夏荷物買入代金 為替金等	430					50					為替金	13	3	25
夏荷掛揚御口錢 3 歩 間尺金口錢 2 歩	144	3		242										
											下り 路用	4	2	15
p 8 手船御用ノ高	37			410		300			300					
吉祥丸 彦久丸 乗福丸 子日丸						64	1	2	300					
式番子日丸 式者ノ乗福丸						114		4	210					
各地掛り物引去 ノ高														
フルヒヲ騾夷人 男 13 人分														
給金 Ⅱ (恵比寿屋) 渡	13													
エトシカハツ 男女 30 人														
給金 Ⅱ (恵比寿屋) 渡	44	1												
ヨイチ 男女 70 人 付添番人 2 人														
給金 全 (ヤマヅヨウ) 竹屋渡	96													
ヲ正ロ 男 25 人														
給代 Ⅱ 渡 (住吉屋?)	40													
タカシマ 男 16 人														
給金 Ⅱ 渡	26													
p 9 サルユカラツ 男女 80 人														
給金 Ⅱ 渡 (山田文右衛門)	80													
ヲス同 男 35 人														
給金 全 (ヤマヅヨウ) 竹屋渡	61	1												
給金 小以 269 人														

出産物				出産物				出産物						
万	千	貫	文	両	歩	朱	貫	文	両	歩	朱	貫	文	
p 11	夏荷物代 惣ノ高	1	6	788	904	夏荷物代 ノ高	16981	889	夏荷物 854 石	13172	91	夏荷物 854 石	13172	91
	内訳	8	84	698	夏荷物代 ノ高	16981	889	船中用捨 蔵へり見込共引去り	13172	91	船中用捨 蔵へり見込共引去り	13172	91	
	ワタルナイ 8ヶ所	3	607	301	秋味鮭 3647 石	8,7861	永 200	3	2924	985	秋味鮭 1,187 石 6 斗 4 升	2924	985	
	ワタルナイ 3ヶ所	3	841	443	筋子 共	10,6021	永 200	3	42412	76	筋子 63 石 2 斗 5 升	42412	76	
	ワタルナイ 買荷物	3	841	443	小以	10,6021	永 200	3	42412	76	小以	42412	76	
	ワタルナイ 干鮭	1	255	462	請 (詰) 金	10,6023	永 34	7	42412	2	請 (詰) 金	42412	2	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	御直住家御普請入用金	7503	201	3	42412	2	御直住家御普請入用金	7503	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	箱館御役所 下ヶ金	1	201	3	42412	2	箱館御役所 下ヶ金	1	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	大工路用 急金	35	201	3	42412	2	大工路用 急金	35	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	3	42412	2	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	給料 3 年春賃置き分	25	201	3	42412	2	給料 3 年春賃置き分	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	3	42412	2	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	間? 四郎様 御宿代	21	201	3	42412	2	間? 四郎様 御宿代	21	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	3	42412	2	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	3	42412	2	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	乗箱丸分	23	201	3	42412	2	乗箱丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	子日丸分	23	201	3	42412	2	子日丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	3	42412	2	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	3	42412	2	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	潮川屋分 同断	25	315	3	42412	2	潮川屋分 同断	25	315	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	榎方 9 人分 同断	2	375	3	42412	2	榎方 9 人分 同断	2	375	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	3	42412	2	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	名代金ノ高	108	1	222	42412	2	名代金ノ高	108	1	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	小以	1302	2	583	42412	2	小以	1302	2	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	御直住家御普請入用金	7503	201	3	42412	2	御直住家御普請入用金	7503	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	箱館御役所 下ヶ金	1	201	3	42412	2	箱館御役所 下ヶ金	1	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	大工路用 急金	35	201	3	42412	2	大工路用 急金	35	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	3	42412	2	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	給料 3 年春賃置き分	25	201	3	42412	2	給料 3 年春賃置き分	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	3	42412	2	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	間? 四郎様 御宿代	21	201	3	42412	2	間? 四郎様 御宿代	21	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	3	42412	2	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	3	42412	2	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	乗箱丸分	23	201	3	42412	2	乗箱丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	子日丸分	23	201	3	42412	2	子日丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	3	42412	2	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	3	42412	2	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	潮川屋分 同断	25	315	3	42412	2	潮川屋分 同断	25	315	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	榎方 9 人分 同断	2	375	3	42412	2	榎方 9 人分 同断	2	375	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	3	42412	2	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	名代金ノ高	108	1	222	42412	2	名代金ノ高	108	1	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	小以	1302	2	583	42412	2	小以	1302	2	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	御直住家御普請入用金	7503	201	3	42412	2	御直住家御普請入用金	7503	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	箱館御役所 下ヶ金	1	201	3	42412	2	箱館御役所 下ヶ金	1	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	大工路用 急金	35	201	3	42412	2	大工路用 急金	35	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	3	42412	2	ワ正口所 男殿夷人 14 人	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	給料 3 年春賃置き分	25	201	3	42412	2	給料 3 年春賃置き分	25	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	3	42412	2	クカシマ所 同 10 人 同断	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	間? 四郎様 御宿代	21	201	3	42412	2	間? 四郎様 御宿代	21	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	3	42412	2	山岡様家建上二付 場所賃分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	3	42412	2	彦久丸合積荷 受取品代ノ高	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	乗箱丸分	23	201	3	42412	2	乗箱丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	子日丸分	23	201	3	42412	2	子日丸分	23	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	3	42412	2	雇船 住吉丸 ? 丸も	2	201	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	3	42412	2	樫浦屋取藥品代ノ高差引受取	162	314	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	潮川屋分 同断	25	315	3	42412	2	潮川屋分 同断	25	315	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	榎方 9 人分 同断	2	375	3	42412	2	榎方 9 人分 同断	2	375	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	3	42412	2	場所差差引? 内林太郎持登り	131	3	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	名代金ノ高	108	1	222	42412	2	名代金ノ高	108	1	
	ワタルナイ 干鮭 870 束	1	255	462	小以	1302	2	583	42412	2	小以	1302	2	

石狩御場所勘定帳 村山 No.2

収蔵番号 100003の5・7・8 安井澄子配

金貨 1両 = 4分五分 (俵) 1分 = 4朱 銀貨 1貫文五分 (分) = 1,000文 = (金1分) 1朱 = 250文 1匁 = 10分五分 厘 毛

安政6末年 (1859年度)		安政6申年 正月 (3 / 18から万延元申年)		万延元申年 (1860年度)		文久元酉年 正月 (2/19 改元)		文久元酉年 (1861年度)		文久2戌年 正月 (能登屋門吉旗立)				
仕込物		仕込物		仕込物 (品)		仕込物 (品)		仕込物 (品)		仕込物 (品)				
	面	朱	貫	文		面	朱	貫	文		面	朱	貫	文
p 2	玄米 288俵1斗 4斗入直り	186		337		玄米 4斗入 1,439俵 133拾	1111	2	6		玄米 2129俵2斗6升8合4勺4斗入直	2151	3	423
	白米 1,264俵2斗8升5合5勺	824		355		白米 4斗入 1,209俵余 (略)	993	2	407		白米 277俵2斗2升8合	307	1	177
	酒 2斗入 161樽	74	2	310		酒 2斗入 204樽	127	3	270		酒 2斗入 161樽	84	1	55
	大坂酒 25丁	29	1			大坂酒 30樽	37	2			大坂酒 20樽	25	2	
p 3	大坂塩 1,730俵	164	3	104		p 3 大坂塩 6,013俵	561	3	123		p 3 大坂塩 8,875俵 3勺切 1,873俵	1,802	3	316
	細網 <small>カサ</small> 足掛 取合 75箇	737	3	193		細網 <small>カサ</small> ? 足掛 取合 85箇	918	2	66		細網 <small>カサ</small> 足掛 取合 (合) 95箇	1,094	3	313
	本正味目形 1,321貫174匁					本正味目形 1,567貫634匁					本正味目形 1,611貫458匁			
	外ニ 743貫107匁					外ニ 824貫400文 ? 鎌賀共					外ニ 772貫800文 ? 鎌賀共			
	市皮 2180斤	30	2	82		市皮 3,166斤2勺5匁	38	2	147		市皮 3,159斤3勺7匁5毛	61	2	266
	金引 <small>カサ</small> 7貫匁 ? ? 300匁					金引 <small>カサ</small> 4貫200					金引 <small>カサ</small> 6貫匁 忍糸 340匁			
	味噌 10貫入 183樽6貫500匁	64	3	31		味噌 10貫直り 181樽8貫100匁	95	2	114		味噌 10貫直り 93樽3貫600匁	85	1	174
	醤油 1斗入 89樽2斗 子 2斗入 4樽8升					醤油 1斗入 80樽 子 2 (斗) 入 4樽2升					醤油 1斗入直り 86樽1升5合 子 2斗入直り 3樽5升			
	白餅米 4斗入 31俵3斗	29		424		白餅米 4斗入 24俵2斗5升5合	24	3	109		白餅米 4斗入直り 17俵3斗8升5合	21	3	71
	白大豆 2斗5升入 1俵	1	3	25		大豆 4斗入 5俵2斗 小豆 1俵3斗5升 黒大豆 1俵4升 大麦 1俵3斗4升 大豆 2斗外	7	1	238		大豆 4斗入直り 5俵3斗3升7合 小豆 1俵3斗7升 黒豆 1斗 大豆 2斗	9	3	317
	保呂 ? 39箇 井 5,365玉	37	3	248		p 4 地廻真 (煙草) 11箇 794斤 保呂 ? 50箇 6,250玉	84	3	315		p 4 地廻真 6箇 正味 67貫700匁 此斤 423斤 1斗2勺	5	2	256
	柿渋 50挺 1斗5升 柏木渋 2貫500匁	52	1	100		柿渋 4斗入 50挺	46	3	50		柿渋 4斗入 50挺	46	1	275
	柏木皮 500丸 1万把					柏木皮 450丸 9,000把					柏木皮 20万緒 450丸 此 9,000把			
p 4	若狭産 350束 越中産 500束	57	3	124		香見産 150束 若狭産 387束 越中産 700束 ? 産 3束	104	3	215		香見産 150束 若狭産 343束 越中産 610束	92	3	36
	中間繩 251丸 酒田繩 351丸 ? 引繩 200丸	41	2	20		中間繩 100丸 酒田繩 300丸 桶引繩 200丸	32	1	350		中間繩 300丸 酒田繩 70丸 桶引繩 70丸 ? 引繩 113丸	37	1	100

	面	柒	貫	文		面	柒	貫	文		面	柒	貫	文		
板類		1	142							框 200 束	22	3	108			
仕込品代 〃	2578	2	6	337		仕込品代 〃	4493	2	7	441		仕込品代 〃	6103	1	7	412
詰 (詰) 金	2579		永 56	9 卜		詰 (詰) 金	4500	3	216	永 31	7 卜	詰 (詰) 金	6104	2	187	

金 銭 座	面	歩	朱	貫	文	p7 金 銭 座	面	歩	朱	貫	文	p7 金 銭 座	面	歩	朱	貫	文
p6 御初懸	22	1		3		御初懸	22	3				御初懸	24	1			
御選上金 委分稱金																	
正金にて下し 建網買加金 ツツタ分	500					正金にて差下ス 為替金 共 建網買加金 厚田分	1,166	3		320		正金にて差下ス 為替金にて渡共 建網買加金 厚田分	555				15
	15						15						15				
為替金渡	132	2	3		25												
						路用金	64					路用金	48				
p6 路用金渡 番人稼方 雇人	163	2				p7 番人 27人 給金ノ高	260	2				番人 27人 給金ノ高	233				
p7 雇士人 35人 給金 ウヌ フルヒラ	59	2				p8 右 (上) 27人 別段手宛	238	2				同 26人 別段手宛	171				
雇士人 5人 同和 人 28人	75	2				手傳人 5人 給金ノ高	22					手傳人 7人 給金ノ高	37				
付添夷人 1人 ノ 34人 分給金ノ高						右 (上) 之内 4人 別段手宛	10					右 (上) 之内 6人 別段手宛	15	2			
(上記) 手宛ノ高	17					稼方 18人 給金ノ高	160	2				稼方 14人 給金ノ高	124				
						右 (上) 之内 16人 別段手宛	130					同 14人 別段手宛	75				
						雇人 43人 給金ノ高	355	3				雇人 44人 給金ノ高	370				
						右 (上) 之内 1人 別段手宛	1										152
						餘は場所にて渡											
						シラオイ 男士 10人 春雇給料	40					シラオイ 男士 10人 春雇給料	40				
						ツツタ 男士 13人 春雇給料	53	2				ツツタ 男士 13人 春雇給料	53	2			
						ツツタ 女士 5人 春雇給料	13					ツツタ 女士 5人 春雇給料	13				

	面	歩	朱	貫	文		面	歩	朱	貫	文		面	歩	朱	貫	文
出産物																	
夏荷物 1244石 船中用捨蔵へり見込共引去	1931	2			155												
秋味雄 1535石 1斗6升 筋子 106石5斗	3088	2		1	337												
ノ金	5020			1	492												
詰(詰) 金	5020			3	永319ト												
出産物																	
夏荷物 1075石 船中用捨引去り如斯 此ノ内 141石 買荷物也	1768	3	1		永51												
秋味雄 1637石 7斗2升 筋子 182石5斗	3760	3			永200	1ト											
ノ金	5529	3	1		永1	1ト											
出産物																	
夏荷物 1273石 船中用捨引去如斯	1975			2	永185	1ト											
秋味雄 1181石 9斗2升6勺7才 筋子 22石5斗	2623				永4	2ト											
ノ金	4598			2	永189	3ト											
金銭受																	
p10 昨年7人給料? <input checked="" type="checkbox"/> より受取 正金請取 彦久丸登り節 為替金請取 石狩御会所より 御用所売上代 <small>長巳</small> 御下金 御座立金受 和三部より	7	2															
p11 前同断受 与市??? 前同断受 甚六より 家大工 岩吉 場所貸受取 シマユキ雇? 場所貸 ノ より 番人27人 手傳人7人 場所貸受取 稼方14人 前同断受取 雇人手宛場所? 場所貸給料引 米?? 船場所貸市?? 揚代受取 問屋店勝内にて用立金受取	100				420												
p12 番人の内 23人 場所貸しノ高 給金差引ニ入請取 稼方の内 16人 前同断 雇の内 27人 前同断	200			2	113	1				434							
p11 番人家内 端登 附添又次郎より 路用返上分受取 白傳甫 1丸 295わ 手首手掛け分 大使 盛 (3俵5斗) 641俵 御用所へ 取替分 印 (御座立) より受取 地使取合 45貫 400匁 彦久丸ニ登り 大坂日本一酒 6挺 麥酒いたし戻り	3	3	1		3					165							
p12 番人19人 手傳人2人 場所貸ノ高 差引ニ入受取 稼方7人 場所貸ノ高 差引ニ入受取 雇人26人 前同断 番人藤次郎組 路用返上分受取	87	2	3		307					310							

石狩御場所勘定帳 収支一欄 阿部屋村山家

収蔵番号 100003 の 1/3/4/5/7/8

	嘉永5子年 1852年	安政4巳年 1857年	安政5年4月 石狩改革	安政5午年 1858年	安政6未年 1859年	万延元年 1860年	文久元酉年 1861年	
出産物	両 夏荷物代 2,469 秋味鮭 5,846	両 1,816 8,786	幕山傳は石狩場次郎に所村山傳次郎は出稼ぎとして一部の場所を廃し、箱館奉行の直轄地(直接交易)とし、村山傳は石狩場次郎に所村山傳次郎は出稼ぎとして一部の場所を廃し、箱館奉行の直轄地(直接交易)とし、	両 1,317 2,924	両 1,931 3,089	両 1,768 3,761	両 1,975 2,623	鮭・干鮭・惣物 世話料
場所貸・諸品代		249		1,056	850	821	555	
名代金	66	108		141	151	128	124	
手船		57		24	171	45		
惣物代・普請	51	750			27			
その他	91	139		246	193	447	137	(差違調整あり)
小計	8,523	11,905		5,708	6,412	6,970	5,414	(原文通り)
11月残物代	-	-		3,848	2,004	2,331	3,146	
収入合計	8,523	11,905		9,556	8,416	9,301	8,560	
仕込品代	3,951	5,279		4,567	2,579	4,500	6,104	
運上金・冥加金	1,380	1,353		18	15	15	15	
雇人給金・手当	966	884		1,075	1,723	1,504	1,222	テイス・和人共
手船荷物メ高	371	316		216	323	291	304	
運上家普請	287	478		476				
その他	683	129		638	824	1,260	640	
小計	7,638	8,439		6,989	5,464	7,570	8,285	(原文通り)
利足金	1,527	1,687		1,398	1,092	1,514	1,657	
前年11月残物代	-	-		-	3,848	2,004	2,331	
支出合計	9,165	10,126		8,388	10,405	11,089	12,274	(原文通り)
差引損益	▲ 642	+ 1,779		+ 1,168	▲ 1,989	▲ 1,788	▲ 3,714	
		石狩役所・住家 若生移転建設		人馬継立差配は そのまま	* 11月後の残物代は翌年全額経費(支出)として計上されている。 実質経費の程は不明。		* 『新札幌市史』参照	

鯉場出稼番人名前并夷人数

安政2年乙卯4月 石狩御場所御引渡之節

収蔵番号 100003 の 2 の⑤

タカシラ領 ヌケツシ(祝津)	番人	稼方	蝦夷人男女	鯉網員数
ヲタルナイ領 カツナイ	支配人 円吉 嘉七 重兵衛 吉五郎 藤吉 栄三郎 万五郎	福松	33人	220放
アツトワリ	藤次郎 小太郎 慶吉	万十郎 作十郎	16人	90放
モアサリ	与市 与八	藤三郎	14人	95放
カムイコタン	権右衛門 小次郎	重右衛門	14人	90放
ワウシリ	茂右衛門 六左衛門 幸五郎		16人	100放
レンソノツカ			14人	105放
ヲタヌツ	儀右衛門 秀次郎	鉄五郎 弥七	19人	170放
アツタ領 ヲ正ロコツ	通副 与左衛門 和三郎	清蔵 七之丞	22人	150放
ヘツトカリ	平吉	弥之丈 才吉	19人	150放
アツタ	専三郎	文蔵 寅之助	23人	150放
合計 11ヶ所	支配人・番人・稼方 40人	蝦夷人男女	207人	網数 1,440放
イシカリ 居残り	林太郎 藤右衛門 万右衛門 長作	増蔵 又三郎 栄四郎 初太郎		
上川越年	利七			

安政2年乙卯鯉場 秋味蝦夷網引場地名并網員数

収蔵番号 100003 の 2 の⑤

	夷人編網	蝦夷人鯉漁事引高改所
ワツカオイ	11統	引場毎各1番人各1人
フル	9統	
ヤウシハ	7統	
シビシビウシ	6統	
トウヤウシ	11統	
ヲタヒリ	4統	
サツホロフト	2統	
ツイシカリフト	1統	
メ網数	51統	引場8ヶ所
鯉漁後 夷人飯料取縮方・軽物世話方・干鯉改 ハツシヤフ川上		番人1人(越年もあり)
サツホロ川上		番人3人
アシリヘツ		
コトニ		
ヲソウシ		番人1人
ユウハリ		
チユクヘツ		番人3人(越年もあり)

安政6年 石狩秋味鮭惣引高并赤沢共調子扣 村山店

収蔵番号 100003 の6

網主	漁獲・役			漁獲高順			
	漁獲量(束)(本)	高(引高)比(%)	役量(束)(本)	高(歩役)比(%)			
㊦ 阿部屋 傳次郎	9,819	8	36.9	2,351	1	25.7	①
㊧ 山田文右衛門	5,600	12	21.1	1,533	13	16.8	②
勝右衛門	1,140	18	4.3	286	16	3.1	③
山縣屋 八十八	343	16	1.3	92	7	1.0	
※ 五三郎 (梶浦屋)	869	13	3.3	225	1	2.5	④
七兵衛	272	10		68	2		
〃	101	7	1.4	20	6	1.0	
林次郎	165	17	0.6	49	15	0.5	
金四郎 (三国屋)	510	7	1.9	127	7	1.4	⑧
利右衛門	408	9	1.5	122	10	1.3	
金兵衛	374	11	1.4	112	8	1.2	
久吉	144	15	0.5	43	8	0.5	
八右衛門	246	18	0.9	61	14	0.7	
三太郎	560	0	2.1	112	0	1.2	⑦
近郎	64	3	0.2	16	0	0.2	
瀬川屋 (孫兵衛)	824	17	3.1	184	18	2.0	⑤
㊨ ヤマシチ	249	14	0.9	62	8	0.7	
㊩ ヤマハヤ (天満屋)	238	0	0.9	35	14	0.4	
六郎兵衛 (船屋)	1	8	0	0	4	0	
傳吉	286	0	1.1	42	16	0.5	
市助	276	19	1.0	41	10	0.4	
吉太郎	99	1	0.4	19	16	0.2	
㊪ 半兵衛 (恵美須屋)	671	15	2.5	201	10	2.2	⑥

網主小計	23,259	238		5,801	204		
		11 束 18			10 束 4		
小計	23,270	18	87.3	5,811	4	63.6	
アヌ (土人網)	3,324	12	12.5	3,324	12	36.4	
	26,594	30		9,135	16		
		1 束 10					
合計	26,595	10	100	9,135	16	100	

引高の内 歩役引去り

引高 (23,270 束 18 本) - 歩役 (5,811 束 4 本) = 17,459 束 14 本 ← 全 出稼人荷物

惣引高凡そ歩譯

1分2厘5毛	土人網
3分6厘9毛2	阿部屋
2分1厘6毛	山田
2分9厘5毛2	出稼 20軒

いしかり暦 第三十四号

令和三年三月三十日 印刷

令和三年三月三十日 発行

発行者 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目一三一

村山耀一方

TEL 〇一三三三二七二七四八九